

元宮本前山遺跡

上河原崎・中西特定土地地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書 2

平成18年3月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第265集

もとみやもとまゑやま いせき
元宮本前山遺跡

上河原崎・中西特定土地地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書 2

平成 18 年 3 月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

序

つくば市は、昭和38年に筑波研究学園都市計画地域の指定を受けて、日本の科学技術研究開発の核として、さらに、国際交流の拠点としての国際都市にふさわしい町づくりを進めています。

本年度開通しました「つくばエクスプレス」は、新しい町づくりの一環としてつくば市と東京圏を結び、人・物・情報の交流を盛んにし、地域活性化の大きな力となってきております。この事業は、平成6年7月に、茨城県、つくば市、地権者の三者協議で、新線開発の合意を受け、茨城県は新線建設と沿線開発を一体的に進める土地区画整理事業を推進しております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県より埋蔵文化財発掘調査についての委託を受け、上河原崎・中西特定土地区画整理事業に伴い、平成13年度に島名ツバタ遺跡の発掘調査を実施いたしました。その成果の一部は、すでに当財団の文化財調査報告第203集として刊行いたしました。

本書は、平成16年度に調査を行った元宮本前山遺跡の調査成果を収録したもので、本書が学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、感謝申し上げます。

平成18年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 稲葉節生

例 言

- 1 本書は、茨城県県南都市建設事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成16年度に発掘調査を実施した、茨城県つくば市大字上河原崎元宮本字前山49番地の4ほか^{（1）}に所在する元宮本前山遺跡^{（2）}の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。
調 査 平成16年6月1日～平成16年10月31日
整 理 平成17年4月1日～平成17年7月31日
- 3 発掘調査は、調査課長川井正一のもと、以下の者が担当した。
首席調査員兼班長 吉原作平
主任調査員 小野克敏
主任調査員 高野裕歴
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理第二課長大森雅之のもと、主任調査員高野裕歴が担当した。

凡 例

- 1 地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標を原点とし、X軸 = +8,200m、Y軸 = +18,240mの交点を基準点 (A 1a) とした。

調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらにこの大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 S1-住居跡 SK-土坑 P-柱穴 FP-炉穴 K-掘乱

遺物 TP-拓本記録土器 DP-土製品 Q-石器・石製品 M-金属製品 G-ガラス製品

土層 K-掘乱

- 3 土層観察と遺物における色調の判定は、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

- 4 遺構及び遺物実測図の掲載方法については次のとおりである。

(1) 遺構全体図は600分の1、各遺構の実測図は60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。

(2) 遺物は原則として3分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に縮尺をスケールで表示した。

- (3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。



- 5 遺物観察表・遺構一覧表の表記については次のとおりである。

(1) 現存値は () で、推定値は [] を付して示した。計測値の単位はcm、gで示した。

(2) 遺物観察表の備考欄は、残存率、写真図版番号、その他必要と思われる事項を記した。

- 6 「主軸」は、炉を持つ堅穴住居跡については炉を通る軸線とし、他の遺構については長軸(径)を通る軸線を主軸と見なした。「主軸・長軸(径)方向」は、主軸・長軸(径)が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 N-10°-E)。なお、推定値は [] を付して示した。

抄 録

ふりがな	もとみやもとまやまいせき								
書名	元宮本前山遺跡								
副書名	上河原崎・中西特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書								
巻次	2								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告								
シリーズ番号	第265集								
著者名	高野 裕暉								
編集機関	財団法人 茨城県教育財団								
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL.029-225-6587								
発行日	2006(平成18)年3月24日								
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因	
元宮本前山遺跡	茨城県つくば市大字 上河原崎元宮本字 前山49番地の4ほか	08220 559	36度 04分 25秒	140度 02分 09秒	192 ~ 236 m	20040601 ~ 20041031	14.910mf	上河原崎中西 特定土地区画 整理事業に伴 う事前調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
元宮本前山遺跡	集落跡	旧石器	石器集中地点 1か所		石器(石核・ナイフ 形石器・石刃・網片)		石製模造品の工房とみら れる住居跡が確認され、 工作用ビットに比定さ れる施設が検出されてい る。		
		縄文	炉穴	3基	縄文土器(深鉢)				
			陥し穴	7基	石器(石鏃・台石)				
		古墳	竪穴住居跡	22軒	土師器・土製品(支脚)				
		土坑	4基	石製品(剣形模造品・ 有孔円板・白玉・勾玉・ 釧玉・紡錘車)滑石片					
	その他	方形竪穴遺構	1基	土師器					
		土坑	32基						
要約	旧石器時代から古墳時代にかけての複合遺跡である。旧石器時代では、南側に広がる台地の端部において、石器集中地点が確認されている。縄文時代では、炉穴3基が確認されている。竪穴住居跡はいずれも古墳時代中期で、住居跡から多数の石製模造品が確認されている。石製模造品の工房とみられる住居跡が確認されている。竪穴住居跡22軒中10軒が焼失住居である。								

目 次

序	
例言	
凡例	
抄録	
目次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	8
1 旧石器時代の石器集中地点と遺物	8
(1) 調査の方法	8
(2) 石器集中地点	8
2 縄文時代の遺構と遺物	11
(1) 炬穴	11
(2) 陥し穴	17
3 古墳時代の遺構と遺物	21
(1) 竪穴住居跡	21
(2) 土坑	78
4 その他の遺構と遺物	82
(1) 方形竪穴遺構	82
(2) 土坑	83
(3) 遺構外出土遺物	87
第4節 まとめ	89
写真図版	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県は、首都圏とつくば研究学園都市を結ぶつくばエクスプレスを開通させるとともに、それに伴う沿線開発に取り組んでいる。

平成6年8月18日、茨城県知事から茨城県教育委員会教育長あてに、上河原崎・中西特定土地地区画整理事業における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会があった。これを受けて茨城県教育委員会は、平成10年2月9日、3月3日～6日、3月9日～13日にかけて試掘調査を実施した。平成10年6月1日、茨城県教育委員会教育長から茨城県知事あてに、事業地内に元宮本前山遺跡が所在する旨回答した。

平成15年1月22日、茨城県知事から、茨城県教育委員会教育長あてに、文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づき、土木工事等の通知が提出された。平成15年2月13日、茨城県教育委員会教育長から茨城県知事あてに、記録保存のための発掘調査が必要であるとし、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

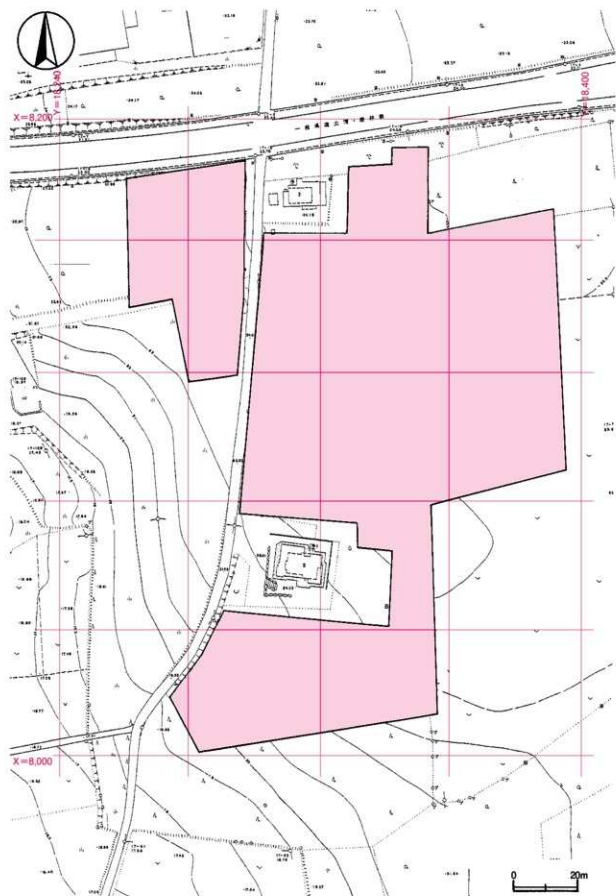
平成16年3月24日、企画部つくば・ひたちなか整備局新線沿線整備課長は茨城県教育委員会教育長に、島名・福田坪地区特定土地地区画整理事業及び上河原崎・中西特定土地地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。平成16年3月24日、茨城県教育委員会委員長から企画部つくば・ひたちなか整備局新線沿線整備課長あてに、元宮本前山遺跡について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、財団法人茨城県教育財団を紹介した。

茨城県と財団法人茨城県教育財団は、企画部つくば・ひたちなか整備局新線沿線整備課長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成16年6月1日から平成16年10月31日にかけて、元宮本前山遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

調査は、平成16年6月1日から平成16年10月31日まで実施した。その概要を表で記載する。

期 間		6月	7月	8月	9月	10月
工程	調査準備					
	遺構調査					
	遺物写真					
	補足調査					



第1図 元宮本前山遺跡調査区設定図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

元宮本前山遺跡は、茨城県つくば市大字上河原崎元宮本字前山49番地の4ほか¹⁾に所在している。

つくば市は、筑波山の南西に広がる標高20~25mの平坦な台地上に位置している。この台地は、筑波・稲敷台地と呼ばれ、東を霞ヶ浦に流入する桜川、西を利根川に合流する小貝川の二つの河川によって区切られている。それぞれの河川によって大きく開析された流域には、標高約5mほどの沖積地が発達している。台地は、東から花室川、蓮沼川、小野川、東谷田川、西谷田川などの中小河川がほぼ北から南に向かって流れて浅く開析され、谷津や低地が細長く入り組んでいる。

筑波・稲敷台地は、貝化石を産する海成の砂層である成田層を基盤として、その上に竜ヶ崎層と呼ばれる斜交層理の顕著な砂層、砂礫層、さらに常総粘土層と呼ばれる泥質粘土層（0.3~5.0m）、褐色の関東ローム層（0.5~2.5m）が連続して堆積し、最上部は腐植土層になっている¹⁾。

当遺跡の所在する上河原崎地区は、つくば市の南西部、旧谷田部町域に位置している。当遺跡は、西谷田川に面した標高23mの台地上に立地している。台地は主に畑地として耕作され、沖積低地は水田として利用されている。当遺跡の調査前の現況は山林であった。

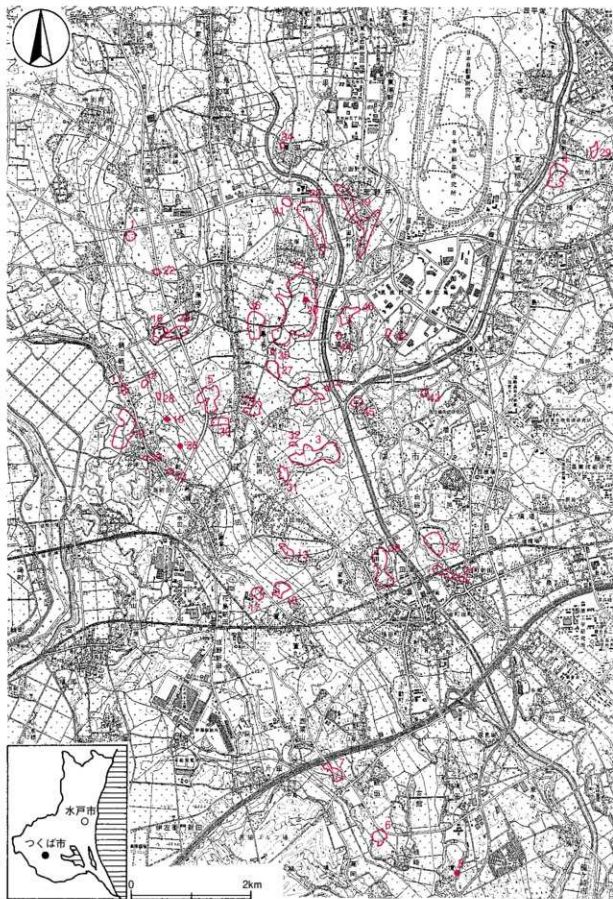
第2節 歴史的環境

当遺跡周辺の小貝川や西谷田川、東谷田川、蓮沼川沿岸の台地上には、縄文時代から中世にかけての遺跡が数多く所在している。

旧石器時代の遺跡は、東谷田川右岸の鳥名前野東遺跡²⁾<2>や鳥名境松遺跡³⁾<3>、東谷田川支流の蓮沼川左岸に所在する薊尚神殿遺跡⁴⁾<4>、西谷田川左岸の鳥名ツバタ遺跡⁵⁾<5>、同右岸の根崎遺跡⁶⁾<6>や西栗山遺跡⁷⁾<7>、花室川左岸の中原遺跡⁸⁾などがあり、ナイフ形石器や尖頭器などの遺物が出土している。なかでも、中原遺跡からは石器集中地点が9か所確認され、ナイフ形石器・石刃などが出土している。

縄文時代の遺跡は、小貝川左岸及び西谷田川に挟まれた台地上で、縄文時代中期以降の集落跡が確認されている。西谷田川に面した台地の緑辺部に立地している境松貝塚⁹⁾<8>は、つくば市谷田部の代表的な貝塚であり、縄文時代中期から後期の土器や石器が出土している。小貝川左岸の台地上に立地する真瀬山田遺跡¹⁰⁾<9>からは、中期から後期の土器や石器が広範囲にわたって出土している。また、隣接する真瀬堀附南遺跡¹¹⁾<10>、真瀬山田北遺跡¹²⁾<11>、鍋沼新田長峰遺跡¹³⁾<12>からも縄文土器片が出土していることから、広い範囲に集落が存在していたと想定される。東谷田川と西谷田川に挟まれた台地上には、当財団が調査した鳥名前野東遺跡、鳥名境松遺跡、谷田部漆遺跡¹⁴⁾<13>、鳥名前野遺跡¹⁵⁾<14>が立地し、中期の堅穴住居跡や陥し穴が確認されている。特に鳥名境松遺跡では、土器焼成遺構と考えられる土坑も確認されている。これらの河川に臨む台地の緑辺部を中心に、縄文時代中期から本格的な生活が営まれるようになったと考えられる。さらに、今回の当遺跡の調査により、縄文時代早期の炉穴が確認されたことから、中期以前にも断続的に集落が営まれてきたことをうかがい知ることができる。

弥生時代の遺跡は当地域では少なく、谷田部地区では中期から後期の遺物が出土した境松遺跡や鳥名熊の山



第2図 元宮本前山遺跡分布図（国土地理院 1：25,000地形図「土浦」）

表1 元宮本前山遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代					番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安			中世	近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安
①	元宮本前山遺跡	○	○				24	鳥名椋内古墳群				○			
2	鳥名前野東遺跡					○	25	鳥名関ノ台古墳群				○			
3	鳥名境松遺跡			○			26	真瀬新田古墳群				○			
4	苅間神田遺跡	○	○	○	○	○	27	鳥名八幡前遺跡				○	○	○	
5	鳥名ツバタ遺跡		○	○		○	28	真瀬堀附北遺跡				○			
6	根崎遺跡		○	○			29	苅間六十目遺跡				○	○	○	○
7	西栗山遺跡		○	○			30	鳥名椋内遺跡				○			
8	境松貝塚		○	○		○	31	鳥名タカド口遺跡		○	○				
9	真瀬山田遺跡		○				32	鳥名一丁田遺跡		○					
10	真瀬堀附南遺跡		○	○			33	真瀬中畑遺跡		○	○			○	
11	真瀬山田北遺跡		○	○			34	高田和台古遺跡							
12	鍋沼新田長峰遺跡		○	○			35	鳥名栗師遺跡							
13	谷田部漆遺跡		○				36	鳥名木田遺跡				○	○	○	
14	鳥名前野遺跡				○	○	37	谷田部台成井遺跡		○					
15	鳥名熊の山遺跡				○	○	○	38	谷田部福田前遺跡		○	○	○		
16	下河原崎高山遺跡			○	○		39	真瀬新田谷津遺跡		○					
17	真瀬三度山遺跡		○	○			40	水堀下道遺跡							
18	上笠丸古屋敷遺跡				○	○	○	41	鳥名関ノ台遺跡						
19	鳥名面野井古墳群				○		42	水堀遺跡				○			
20	鳥名熊の山古墳群				○		43	柳橋遺跡				○		○	
21	谷田部台町古墳群				○		44	水堀屋敷添遺跡		○	○			○	
22	下河原崎古墳群				○		45	平後遺跡				○		○	
23	下河原崎高山古墳群				○										

遺跡¹² <15>、¹³下河原崎高山遺跡<16>などが確認されているのみである。特に、鳥名熊の山遺跡では、出土した土器片から粉痕が認められ、稲作を考えた上で興味深いものである。

古墳時代になると遺跡数の増加が顕著になる。前期では、鳥名熊の山遺跡、鳥名前野遺跡、鳥名前野東遺跡などで集落跡が確認され、鳥名前野東遺跡では集落に付随した形で方形周溝墓3基が調査されている。しかし、これらの集落はいずれも小規模で、東谷田川に沿って点在していた集落の一つと捉えることができる。

中期になると、集落は西谷田川沿いにまで広がりを見せ、前述した遺跡に加えて、谷田部漆遺跡や鳥名ツバタ遺跡、真瀬三度山遺跡¹³ <17>、¹⁴上笠丸古屋敷遺跡¹⁵ <18>などにおいても集落跡が確認されている。これらの前・中期の集落は、いずれも台地の縁辺部や低湿地へ向かう緩斜面部に適度な距離をおいて営まれており、集落の立地や営みには、台地裾部の自然湧水を利用した谷津田との関わりが窺われる。

後期になると、谷田部地区においては古墳群11か所、古墳約300基が確認される¹⁰など、急速に古墳が築造されたことがわかる。当遺跡に近い西谷田川に面する台地上には、下河原崎古墳群<22>、下河原崎高山古墳群¹¹<23>、島名根内古墳群<24>、真瀬新田古墳群<26>が確認されている。集落跡の様相は、中期において東谷田川、西谷田川両河川台地縁辺部から低地にかけての広い範囲で小規模な集落が形成されてきたのに対し、後期になると、しだいに島名熊の山道跡を中心に大集落が形成され、台地の内陸部まで開墾されるようになる。

※文中の〈 〉内の番号は、第2図及び周辺遺跡一覧表の該当番号と同じである。

註

- 1) 日本の地質「関東地方」編集委員会「日本の地質3 関東地方」共立出版 1986年10月
- 2) 専門千勝・田原康司・梅澤貴司「島名前野東道跡・島名地松道跡・谷田部津道跡－島名・福田坪一体型特定地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第191集 2004年3月
- 3) 註2)と同じ
- 4) 成島一也「神田道跡－(仮称)葛城地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第121集 1997年3月
- 5) 菅川 修「島名ツバタ道跡－上河原崎・中西特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第203集 2003年3月
- 6) 渡邊幸雄「根崎道跡 西栗山道跡－(仮称)堂丸地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第119集 1997年3月
- 7) 註6)と同じ
- 8) 高野節夫・白田正子・仲村浩一郎・島田和宏「中原道跡3－中根・金台特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第170集 2001年3月
- 9) 久野俊彦「境松道跡－主要地方道取手筑波線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第41集 1987年3月
- 10) 谷田部の歴史編さん委員会「谷田部の歴史」谷田部町教育委員会 1975年9月
- 11) 註10)と同じ
- 12) 福田義弘「島名前野道跡－島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅵ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第175集 2001年3月
- 13) 福田義弘「熊の山道跡 島名福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第190集 2002年3月
松本直人「熊の山道跡 島名福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第236集 2005年3月
- 14) 白田正子「三度山道跡 古塚敷道跡－(仮称)堂丸地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第132集 1998年3月
- 15) 註14)と同じ
- 16) 谷田部町文化財保存会「谷田部町文化財報告Ⅰ」『古墳総覧』谷田部町教育委員会 1960年
- 17) 佐野 正「科学博関連道路谷田部明野線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書－ツバタ道跡 高山古墳群」『茨城県教育財団文化財調査報告』第22集 1983年3月

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

元宮本前山遺跡は、つくば市の南西部、西谷田川左岸の標高19～23mの台地縁辺部に立地している。調査対象面積は14910㎡であり、古墳時代中期を中心とした旧石器時代から古墳時代にかけての複合遺跡である。

今回の調査で確認された遺構は、旧石器時代の石器集中地点1か所、縄文時代の炉穴3基、陥し穴7基、古墳時代の竪穴住居跡22軒、土坑4基、その他の方形竪穴遺構1基、土坑32基である。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に45箱出土しており、遺物の大半は古墳時代のものである。主な遺物は、旧石器時代の石器（石核・ナイフ形石器・剥片・台石他）、縄文土器（深鉢）・石鏡、竪穴住居跡から出土した土師器（坏・椀・甗・高坏・壺・甕・甔）、土製品（支脚）、石器・石製品（敲石・砥石・勾玉・紡錘車・白玉・霰玉・模造品）、ガラス製品（小玉）などである。

第2節 基本層序

調査区東側の北部（A4i6）にテストピットを設定し、深さ2.0mまで掘り下げて基本層序の観察を行った。土層は6層に分層された。土層の観察結果は以下の通りである。

第1層は黒褐色を呈する耕作土層である。ローム粒子を微量含み、粘性・締まりともに弱い。層厚は22～25cmである。

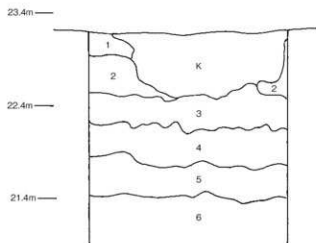
第2層は明褐色のソフトローム層である。粘性がやや強く締まりは普通である。層厚は40～44cmである。

第3層は暗褐色のソフトローム層である。粘性がやや強く締まりは普通である。層厚は25～40cmである。

第4層は暗褐色のハードローム層である。粘性・締まりともに強い。第II黒色体に相当すると考えられる。層厚は30～45cmである。

第5層はにぶい褐色のハードローム層である。粘性・締まりともに強く、層厚は30～45cmである。

第6層はにぶい褐色のハードローム層である。粘性・締まりともに極めて強い。下層が未掘のため、本来の厚さは不明である。遺構は、第2層上面で確認できた。



第3図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 旧石器時代の石器集中地点と遺物

(1) 調査の方法 (第4図)

遺構確認時に旧石器時代の石器集中地点が確認され、その地点を中心に調査区を設定した。調査区は、調査区城南部の標高22.8~23.1mの台地平坦部から端部に位置している。E 3e3・E 3e4・E 3f3・E 3f4区の4グリッドのルーム面を少しずつ下げながら調査した。その結果は、E 3e3・E 3e4・E 3f3区の3グリッドにわたり、ナイフ形石器、石核、剥片など22点が出土した。

(2) 石器集中地点

前述の通り、1か所の石器集中地点が確認された。以下、その特徴と出土した石器について記述する。

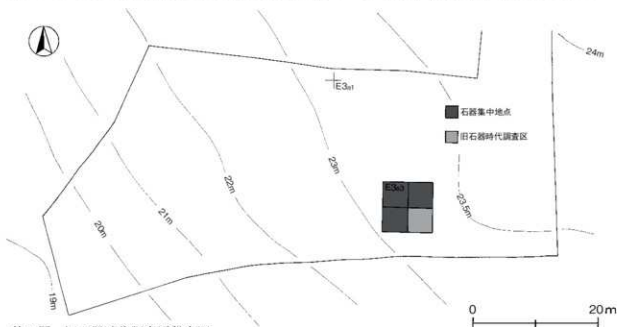
石器集中地点 (第5図)

位置 調査区南部のE 3e3・E 3e4・E 3f3区で、台地の平坦部から端部に位置している。

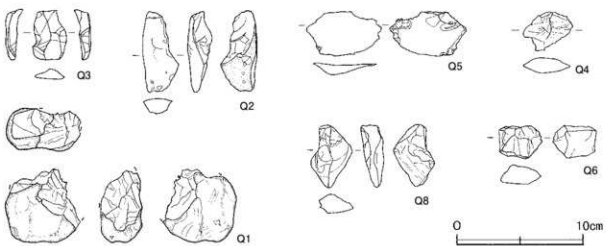
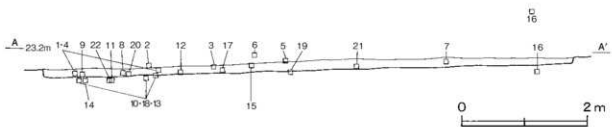
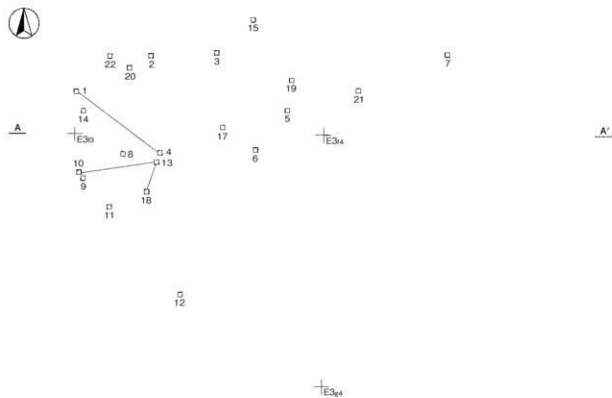
遺物出土状況 石器・剥片等がE 3e3・E 3f3区を中心に、南北44m、東西59mの範囲で集中して出土している。垂直分布は、標高22.723~23.018mで、基本層序の第3層に相当する。

遺物 石核3点、剥片17点、ナイフ形石器1点及び台石1点が出土している。石材別には、珪質頁岩8点、硬質頁岩1点、瑪瑙5点、凝灰岩4点、流紋岩3点である。母岩別には、頁岩4点、凝灰岩4点、瑪瑙2点、流紋岩2点と推定される。頁岩製のQ1・Q4と、Q10・Q13・Q14・Q18・Q22及び、瑪瑙製のQ3・Q15とQ5・Q11・Q16、流紋岩製のQ8・Q12は、それぞれ同一母岩から剥離されたものと考えられる。その中でも、頁岩製のQ1・Q4及びQ10・Q13・Q18については、接合関係にある。Q11のナイフ形石器については、瑪瑙を石材とし、1鋼線加工が施されたものである。

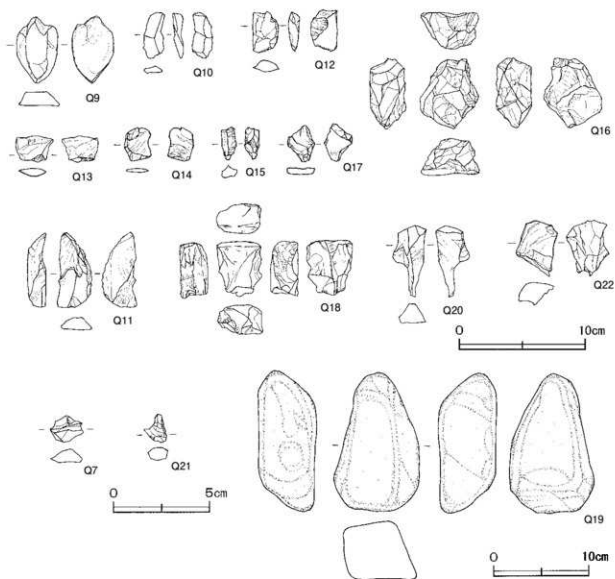
所見 石核や台石が存在し、剥片が接合することから、小規模な剥片剥離が行われた石器製作跡の可能性が考えられる。出土層位は、基本層序の第3層に該当し、遺物の平面分布から判断して同一時期の可能性が高いと思われる。また、石材に黒曜石を含まず在地石材を使用している。時期は、後期旧石器時代と考えられる。



第4図 旧石器時代調査区設定図



第5図 石器集中地点・出土遺物実測図



第6図 石器集中地点出土遺物実測図

石器集中地点出土遺物観察表 (第5・6図)

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	石核	5.8	6.0	3.3	(137.10)	珪質頁岩	楕円形の礫を素材とし上部に液けた打面から縦長や横長の測片を剥離している Q 4と接合	第3層	PL18
Q 2	測片	6.4	2.9	1.9	20.80	珪質頁岩	縦長測片 背面に前段階の剥離痕と礫面を有する	第3層	PL18
Q 3	測片	4.0	2.7	1.3	8.85	瑪瑙	縦長測片 礫上部に凸出された打面から剥離された測片 背面に礫面を有する	第3層	PL18
Q 4	測片	3.1	3.9	1.2	8.65	珪質頁岩	縦長測片 Q 1 を母岩として剥離した測片 背面に礫面を有する	第3層	PL18
Q 5	測片	3.5	6.0	0.9	13.60	瑪瑙	縦長測片 一部欠損 背面に礫面を有する	第3層	PL18
Q 6	測片	2.6	3.4	1.5	12.60	凝灰岩	縦長測片 背面に前段階の剥離痕を有する	第3層	PL18
Q 7	測片	1.5	1.7	0.8	2.50	凝灰岩	測片剥離時に形成された碎片	第3層	
Q 8	測片	4.9	3.3	2.5	15.60	流紋岩	縦長測片 背面に前段階の剥離痕 側面に礫面を有する	第3層	PL18
Q 9	測片	5.3	3.4	1.2	19.50	流紋岩	縦長測片 背面に前段階の剥離痕と礫面を有する 全面被熱	第3層	PL18
Q 10	測片	3.6	1.6	0.8	2.88	珪質頁岩	縦長測片 背面に前段階の剥離痕と礫面を有する Q 18を母岩とし接合	第3層	PL18
Q 11	ナゲ形器	5.9	2.7	1.5	18.10	瑪瑙	厚みのある縦長測片を素材とし 縁部に細かい調整を加えた1個体加工	第3層	PL18
Q 12	測片	3.2	2.2	0.9	4.84	流紋岩	縦長測片 背面に前段階の剥離痕を有する	第3層	PL18
Q 13	測片 (2.1)	2.9	0.6	3.16		珪質頁岩	縦長測片 背面に前段階の剥離痕と礫面を有する Q 18を母岩とし接合	第3層	PL18

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 14	測片	2.7	2.2	0.3	3.70	埴質頁岩	縦長測片 背面に前段階の測片痕を有する Q18を母岩とするが接合は見られない	第3層	PL18
Q 15	測片	2.1	1.2	0.9	1.94	瑪瑙	縦長測片 背面に前段階の測片痕を有する	第3層	PL18
Q 16	石核	5.5	4.6	2.9	63.00	瑪瑙	大原礫を素材とし上下及び側面に設けられた礫面打面から縦長測片・横長測片を測片している	第3層	PL18
Q 17	測片	2.9	2.2	0.5	2.66	凝灰岩	縦長測片 背面に前段階の測片痕を有する	第3層	PL18
Q 18	石核	4.3	3.6	2.2	41.00	埴質頁岩	楕円形の礫を素材として分割 上部に設けられた打面や稜上から縦長や横長の測片を測片している Q10 Q13の母岩	第3層	PL18
Q 19	台石	16.6	10.3	7.0	1490.00	硬砂岩	全面研削加工 出土状況から測片測片作業に使用されたと思われ	第3層	PL18
Q 20	測片	5.6	2.7	1.6	13.60	凝灰質頁岩	縦長測片 背面に前段階の測片痕を有する	第3層	PL18
Q 21	測片	1.4	1.2	0.7	2.86	凝灰岩	測片測片時に形成された砕片	第3層	
Q 22	測片	4.4	3.4	(4.8)	(18.70)	埴質頁岩	縦長測片 背面に前段階の測片痕を有する	第3層	PL18

2 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は、炉穴3基、陥し穴7基が確認された。これらの遺構は標高23.0～23.6mの台地の平坦部から端部に位置している。以下、確認された遺構について記述する。

(1) 炉穴

第1号炉穴（第7図）

位置 調査区西部のB 2es区、標高23.6mの台地の平坦部に位置している。

確認状況 東部は調査区域外にあたるため、全体の形状を確認することができなかった。

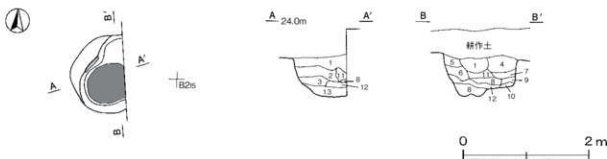
規模と形状 長径1.30m、短径1.10mの楕円形と推定される。長径方向は、推定N-50°-Eで、壁は外傾して立ち上がっている。炉は底面の南側寄りに位置している。炉の平面形は長径75cm、短径65cmの不整楕円形で、確認面から炉床面までの深さは70cmである。炉床は火熱を受けてやや赤変硬化している。

覆土 13層からなり、全体に焼土粒子を含んでいる。第13層は炉の覆土で、炉床中央から北側にかけて厚さ15～20cmで堆積している。ブロック状の不規則な堆積状況を示していることから人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|---------|-----------------------|----------|--------------------|
| 1 黒 褐色 | ロームブロック微量 | 8 暗 褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 灰 褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 9 灰 褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック微量 |
| 3 褐 褐色 | ローム粒子多量、焼土ブロック微量 | 10 灰 褐色 | 焼土粒子少量、ロームブロック微量 |
| 4 暗 褐色 | 焼土粒子少量、ロームブロック・炭化粒子微量 | 11 黒 褐色 | ローム粒子・焼土ブロック微量 |
| 5 褐 褐色 | ロームブロック少量 | 12 褐 褐色 | 焼土粒子少量、ロームブロック微量 |
| 6 褐 褐色 | ロームブロック微量 | 13 鈍い赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック少量 |
| 7 極暗 褐色 | ロームブロック・炭化物微量 | | |

所見 時期は、遺構の形態から早期と推定される。



第7図 第1号炉穴実測図

第2号炉穴（第8～10図）

位置 調査区西部のB 2e4区、標高23.4mの台地の平坦部に位置している。

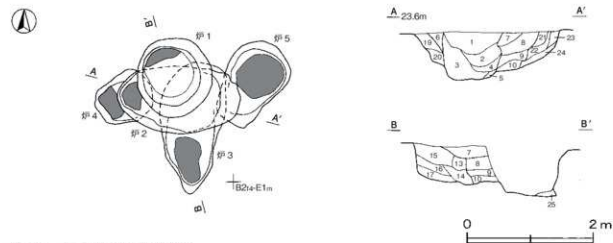
規模と形状 長径3.20m、短径2.45mの不定形である。壁は外傾して立ち上がっている。炉床までの深さは最深部で75cmである。炉を作り替えているために、層位・位置を異にして5か所の炉跡が確認された。炉1が最も新しく炉2を掘り込んでいる。また、炉2は炉3,4,5を掘り込んでいる。炉3,4,5の新旧関係は土層から判断できなかった。

覆土 27層からなる。土質や堆積状況から、人為堆積（6～10層、13～18層、21～24層）の後に自然堆積したものと考えられる。

土層解説

1 黒 褐色	焼土ブロック・炭化粒子少量、ロームブロック微量	15 褐色	ローム粒子多量、焼土ブロック少量
2 極暗赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量	16 鈍い赤褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
3 暗赤褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	17 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量
4 極暗赤褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	18 鈍い赤褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量
5 暗褐色	ローム粒子多量	19 褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量
6 暗褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	20 鈍い赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量
7 暗赤褐色	ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量	21 褐色	ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量
8 灰褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量	22 褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
9 暗赤褐色	ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化物微量	23 暗褐色	ローム粒子多量
10 灰褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量	24 明褐色	ロームブロック中量
11 鈍い赤褐色	ロームブロック少量、焼土粒子微量	25 鈍い赤褐色	焼土ブロック中量、締まり強
12 暗赤褐色	焼土ブロック中量、締まり強	26 鈍い赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量
13 褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量	27 赤褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量
14 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量		

遺物出土状況 縄文土器片13点（深鉢）が覆土上層から中層にかけて出土している。



第8図 第2号炉穴全体実測図

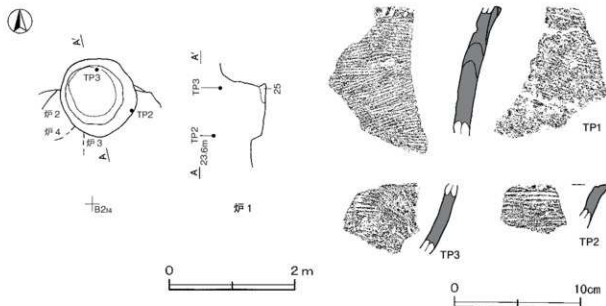
炉1

規模と形状 長径1.25m、短径1.20mのほぼ円形と推定される。壁は外傾して立ち上がっている。炉は底面の北側寄りに位置しており、炉の平面形は長径0.65m、短径0.20mの不整楕円形で、確認面から炉床面までの深さは75cmである。炉床及びその壁面の一部は炉床から10cm上まで火熱を受けて赤変硬化している。

覆土 単一層である。

炉1土層解説

25 鈍い赤褐色	焼土ブロック中量、締まり強
----------	---------------



第9図 第2号炉穴炉1・出土遺物実測図

第2号炉穴出土遺物観察表（第9図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP1	縄文土器	深鉢	-	(10.2)	-	右系・長石・ 右系繊維	黒褐	普通	外面横・斜方向内面多方向の貝殻 外面縦・斜方向内面多方向の貝殻	覆土中	5% PL19
TP2	縄文土器	深鉢	-	(3.4)	-	右系・長石・ 右系繊維	黒褐	普通	外面横・斜方向内面多方向の貝殻 外面縦・斜方向内面多方向の貝殻	覆土中	5% PL19
TP3	縄文土器	深鉢	-	(5.6)	-	右系・長石・ 右系繊維	橙	普通	外面横・斜方向の貝殻条痕文	覆土中	5% PL19

炉2

規模と形状 長径1.75m、短径1.10mの不整楕円形と推定されるが、炉1に掘り込まれており正確な規模は不明である。炉は底面の西側寄りに位置しており、炉の平面形は長径0.45m、短径0.30mの不整楕円形、確認面から炉床までの深さは50cmである。炉床及びその壁面の一部は炉床から10cm上まで火熱を受けて赤変硬化している。

覆土 2層からなる。ブロック状の堆積状況を示していることから人為堆積と考えられる。

炉2土層解説

- 11 鈍い赤褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量 12 暗赤褐色 焼土ブロック中量、粘り強

炉3

規模と形状 長径1.90m、短径1.05mの不整楕円形と推定されるが、炉1及び炉2に掘り込まれており正確な規模は不明である。炉は底面の南側寄りに位置しており、炉の平面形は長径0.75m、短径0.45mの不整楕円形、確認面から炉床までの深さは70cmである。炉床及びその壁面の一部が炉床から15cm上まで火熱を受けて赤変硬化している。

覆土 単一層である。

炉3土層解説

- 26 鈍い赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化粒子少量

炉4

規模と形状 長径0.90m、短径0.80mの不整楕円形と推定されるが、炉1及び炉2に掘り込まれており正確な規模は不明である。炉は底面の西側寄りに位置しており、炉の平面形は長径0.50m、短径0.30mの不整楕円形、確認面から炉床までの深さは50cmである。炉床及びその壁面の一部は炉床から20cm上まで火熱を受けて赤変硬化している。

覆土 2層からなり、ブロック状の堆積状況を示していることから人為堆積と考えられる。

炉4土層解説

19 褐色 romeブロック・焼土ブロック少量

20 鈍い赤褐色 romeブロック・焼土ブロック少量

炉5

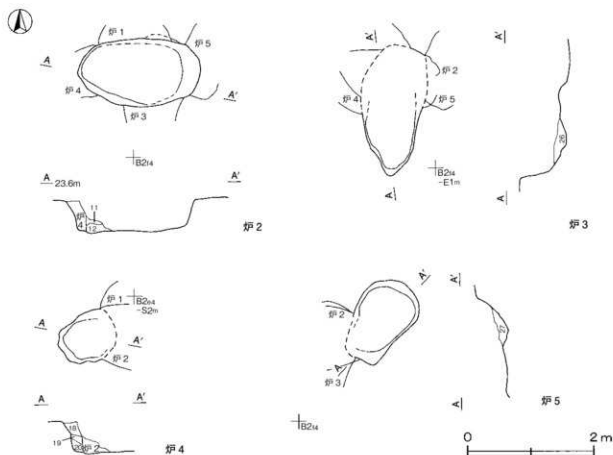
規模と形状 長径1.40m、短径0.95mの不整楕円形と推定されるが、炉2に掘り込まれており正確な規模は不明である。炉は底面の北東側寄りに位置しており、炉の平面形は長径0.75m、短径0.65mの不整楕円形、確認面から炉床までの深さは50cmである。炉床は火熱を受けて赤変硬化している。

覆土 単一層である。

炉5土層解説

27 赤褐色 焼土ブロック中量、romeブロック・炭化粒子少量

所見 炉床面及びその脇の壁が高さ数十センチにかけて赤変硬化している。炉の新旧関係は、土層から炉1が最も新しく炉2を掘り込んでいる。次いで炉2が他の炉3・4・5を掘り込んでいる。時期は、遺構の形態や出土遺物から、早期後葉の茅山式期と考えられる。



第10図 第2号炉穴炉2・3・4・5実測図

第3号炉穴（第11・12図）

位置 調査区西部のB 2区、標高232mの台地の平坦部に位置している。

確認状況 位置を異にして4か所の炉が確認された。

規模と形状 長径3.15m、短径2.90mの不整形円形である。

覆土 14層からなる。レンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|---------|-----------------------------|----------|-------------------------|
| 1 灰褐色 | ロームブロック少量 | 8 鈍い赤褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック微量 |
| 2 灰褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量 | 9 鈍い赤褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック微量、締まり強 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 10 明褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子微量、締まり強 |
| 4 暗褐色 | 焼土粒子少量、ロームブロック・炭化物微量 | 11 鈍い赤褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 5 鈍い赤褐色 | 炭化物中量、ローム粒子少量、焼土ブロック微量、締まり強 | 12 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土ブロック少量、締まり強 |
| 6 褐色 | ローム粒子中量 | 13 褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 7 褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 | 14 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土ブロック微量 |

遺物出土状況 縄土器片78点（深鉢）が、覆土の上層から中層にかけて出土している。

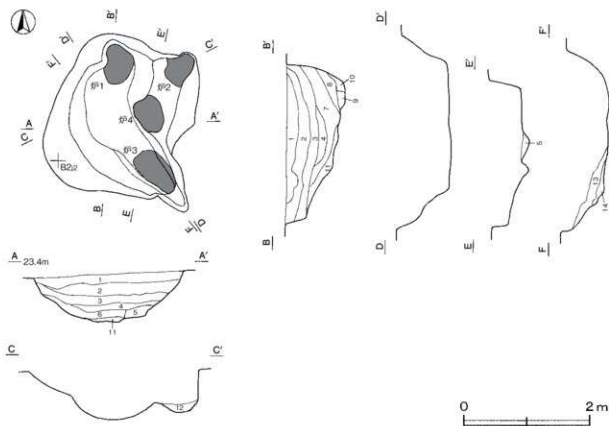
炉1

規模と形状 全体の形状は、長径1.90m、短径1.60mの不整形円形と推定される。壁は外傾して立ち上がっている。炉は底面の北側寄りに位置しており、炉の平面形は長径0.65m、短径0.50mの不整形円形で、確認面から炉床までの深さは95cmである。炉床及びその壁面の一部が炉床から30cm上まで火熱を受けて赤変硬化している。

覆土 2層からなり、堆積状況から自然堆積と考えられる。

炉1土層解説

- | | | | |
|---------|-----------------------|--------|--------------------|
| 9 鈍い赤褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック微量、締まり強 | 10 明褐色 | 焼土ブロック・炭化粒子微量、締まり強 |
|---------|-----------------------|--------|--------------------|



第11図 第3号炉穴実測図

炉2

規模と形状 炉は底面の北東隅寄りに位置しており、炉の平面形は長径0.25m、短径0.20mの不整楕円形で、確認面から炉床までの深さは70cmである。炉床及びその壁面の一部は炉床から20cm上まで火熱を受けて赤変硬化している。

覆土 1層で焼土を含んでおり、自然堆積と考えられる。

炉2土層解説

12 暗赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック少量、締まり強

炉3

規模と形状 長径1.80m、短径0.80mの不整楕円形と推定されるが、炉1及び炉4に掘り込まれており、正確な規模は不明である。炉は底面の南側寄りに位置しており、炉の平面形は長径0.70m、短径0.40mの不整楕円形、確認面から炉床までの深さは65cmである。炉床が火熱を受けて赤変硬化している。

覆土 2層からなり全体に焼土を含んでいる。堆積状況から自然堆積と考えられる。

炉3土層解説

13 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量

14 暗褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック微量

炉4

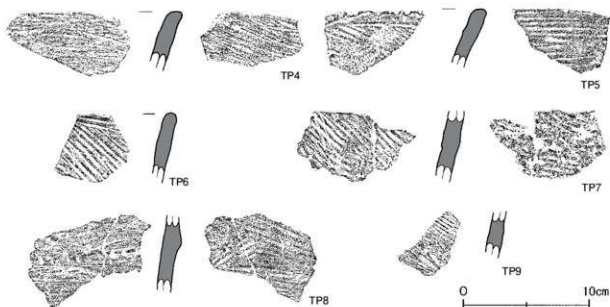
規模と形状 炉床の平面形は長径0.60m、短径0.40mの不整楕円形で、確認面から炉床までの深さは60cmである。炉床及びその壁面の一部が、炉床から20cm上まで火熱を受けて赤変硬化している。

覆土 単一層であり、堆積状況から自然堆積と考えられる。

炉4土層解説

5 鈍い赤褐色 炭化物中量、ローム粒子少量、焼土ブロック微量、締まり強

所見 炉床面及びその壁が高さ数十センチにかけて赤変硬化している。土層から、炉1から炉4は、ほぼ同時



第12図 第3号炉穴出土遺物実測図

期に使用された後、同時期に廃絶されたものと考えられる。時期は、遺構の形態及び出土遺物から、早期後葉の茅山式期と考えられる。

第3号が穴出土遺物観察表（第12図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP4	縄文土器	深鉢	-	(47)	-	石英・長石・石炭層	鈍い黄褐色	普通	外面縦・斜方向 内面多方向の貝殻	覆土中	5% PL19
TP5	縄文土器	深鉢	-	(46)	-	石英・長石・石炭層	鈍い黄褐色	普通	外面縦・斜方向 内面縦方向の貝殻	覆土中	5% PL19
TP6	縄文土器	深鉢	-	(56)	-	石英・長石・石炭層	鈍い黄褐色	普通	外面縦・斜方向 内面縦方向の貝殻	覆土中	5% PL19
TP7	縄文土器	深鉢	-	(57)	-	石英・長石・石炭層	鈍い黄褐色	普通	外面縦・斜方向の貝殻条痕文	覆土中	5% PL19
TP8	縄文土器	深鉢	-	(62)	-	石英・長石・石炭層	灰黄褐色	普通	外面縦・斜方向 内面多方向の貝殻条痕文 裏面に設置を持つ	覆土中	5% PL19
TP9	縄文土器	深鉢	-	(38)	-	石英・長石・石炭層	黒褐色	普通	外面縦・斜方向の貝殻条痕文	覆土中	5% PL19

表2 縄文時代が穴一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 (時期)
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(m)					
1	B 2c5	N-50°-W	不整形円形	1.30 × 1.10	70	外傾	平坦	人為		早期
2	B 2c4	—	不定形	3.20 × 2.45	75	外傾	平坦	人為→自然	縄文土器	早期(茅山式期)
3	B 212	N-35°-W	不整形円形	3.15 × 2.90	95	外傾	平坦	人為→自然	縄文土器	早期(茅山式期)

(2) 陥し穴

第1号陥し穴 (SK10) (第13図)

位置 調査区中央部のC 2 as区、標高236mの台地の平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.76m、短径1.62mの円形を呈しており、深さは110cmで、長径方向はN-62°-Eである。

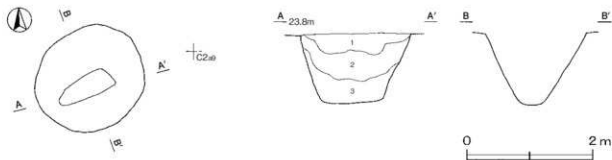
底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

覆土 3層からなり、周囲からの土砂の流入と見られるレンズ状を示していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量 3 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
2 褐色 ロームブロック・炭化物微量

所見 時期は、遺構の規模や形状から縄文時代と推定される。



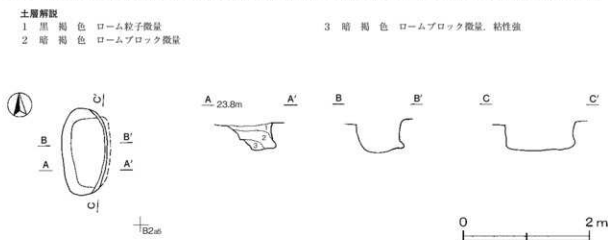
第13図 第1号陥し穴実測図

第2号陥し穴 (SK13) (第14図)

位置 調査区西部のA 2j4区、標高23.5mの台地の平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.35m、短径1.22mの楕円形を呈しており、底面は平坦で、東壁は内傾しながらほぼ直立し、他は外傾して立ち上がっている。深さは84cmである。長径方向は、N-2°-Eである。

覆土 3層からなり、周囲からの土砂の流入と見られるレンズ状を示していることから自然堆積と考えられる。



第14図 第2号陥し穴実測図

第3号陥し穴 (SK14) (第15図)

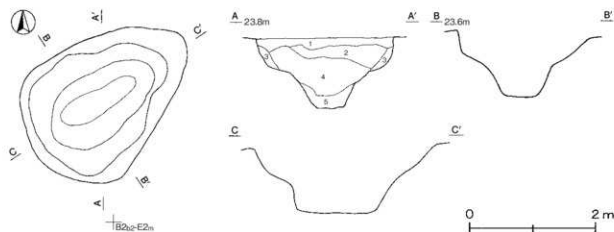
位置 調査区西部のB 2a2区、標高23.4mの台地の平坦部に位置している。

規模と形状 長径2.98m、短径2.20mの楕円形を呈し、深さは120cmである。底面は平坦で、壁は中位に階段状の段を有し、ゆるやかな起伏を持ちながら外傾して立ち上がっている。長径方向は、N-58°-Eである。

覆土 5層からなり、レンズ状を示していることから自然堆積と考えられる。



所見 時期は、遺構の規模や形状から縄文時代と推定される。



第15図 第3号陥し穴実測図

第4号陥し穴 (SK16) (第16図)

位置 調査区西部のB 2a4区、標高23.6mの台地の平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.65m、短径0.90mの楕円形を呈し、深さは60cmであり、長径方向はN-30°-Eである。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

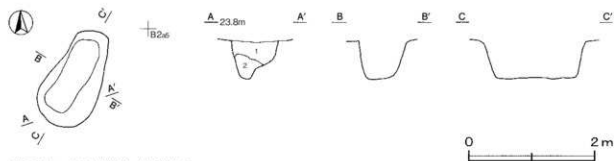
覆土 2層からなり、ブロック状を示していることから人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量

2 暗褐色 ロームブロック少量

所見 時期は、遺構の規模や形状から縄文時代と推定される。



第16図 第4号陥し穴実測図

第5号陥し穴 (SK27) (第17図)

位置 調査区北東部のB 4a6区、標高23.1mの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第50号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長径2.20m、短径1.60mの楕円形を呈し、深さは95cmであり、長径方向はN-50°-Eである。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 4層からなり、周囲からの土砂の流入と見られるレンズ状を示していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

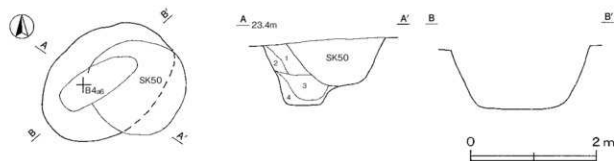
1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

3 黒褐色 焼土ブロック微量

2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

4 黒色 ロームブロック少量

所見 時期は、遺構の規模や形状から縄文時代と推定される。



第17図 第5号陥し穴実測図

第6号陥し穴 (SK28) (第18図)

位置 調査区中央部のC 3f1区、標高23.4mの台地の平坦部に位置している。

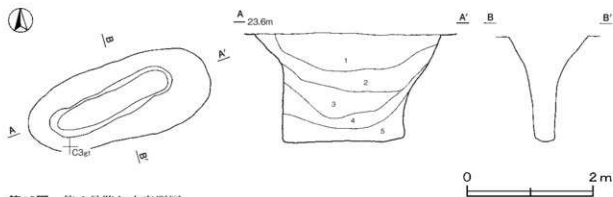
規模と形状 長径2.95m、短径1.20mの長楕円形を呈し、深さは170cmであり、長径方向はN-70°-Eである。底面はほぼ平坦で、壁は漏斗状に立ち上がる。

覆土 5層からなり、周囲からの土砂の流入と見られるレンズ状を示していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|-------------------------|---------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック微量、粘り強 | 4 黒褐色 ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量 | 5 黒褐色 ローム粒子微量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック微量、粘性弱、粘り強 | |

所見 時期は、遺構の規模や形状から縄文時代と推定される。



第18図 第6号陥し穴実測図

第7号陥し穴 (SK42) (第19図)

位置 調査区東部のC 4c2区、標高23.5mの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第52号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長径2.85m、短径1.40mの楕円形を呈し、深さは125cmであり、長径方向はN-55°-Eである。

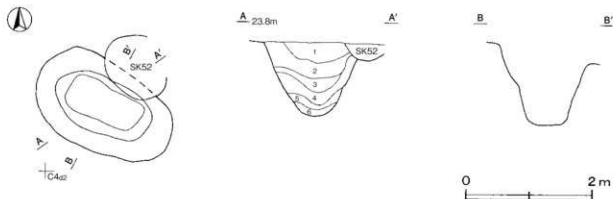
底面はほぼ平坦で長方形を呈し、壁はゆるやかに外傾して立ち上がっている。

覆土 6層からなり、周囲からの土砂の流入と見られるレンズ状を示していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|---------------------|-------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック微量、粘り強 | 4 褐色 ローム粒子中量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック微量 | 5 黒褐色 ローム粒子微量、粘性強 |
| 3 黒褐色 ロームブロック微量 | 6 褐色 ロームブロック少量 |

所見 時期は、遺構の規模や形状から縄文時代と推定される。



第19図 第7号陥し穴実測図

表3 縄文時代陥し穴一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 (時期)
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					
1	C 2a8	N-62°-E	不整楕円形	1.76 × 1.62	110	外傾	平坦	自然		縄文時代
2	A 2j4	N-2°-E	不整楕円形	1.35 × 1.22	84	外傾	平坦	自然	壺	縄文時代
3	A 2a4	N-58°-E	不整楕円形	2.98 × 2.20	120	外傾	平坦	自然		縄文時代
4	B 2a4	N-30°-E	不整楕円形	1.65 × 0.90	60	外傾	平坦	自然		縄文時代
5	B 4a6	N-50°-E	不整楕円形	2.20 × 1.60	95	外傾	平坦	自然		縄文時代
6	C 3f1	N-70°-E	長楕円形	2.95 × 1.20	170	外傾	平坦	自然		縄文時代
7	C 4c2	N-55°-E	不整楕円形	2.85 × 1.40	125	外傾	平坦	自然		縄文時代

3 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、竪穴住居跡2軒、土坑4基が確認された。遺構は、標高23mほどの台地の平坦部から端部にかけて位置している。以下、確認された遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡（第20図）

位置 調査区南部のD3c4区で、標高23.8mの台地の平坦部に位置している。

規模と形状 長軸4.40m、短軸3.80mの長方形で、主軸方向はN-15°-Wである。壁高は16~20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦であり、締まりがなく軟弱である。

炉 2か所。炉1・炉2ともにほぼ中央部に位置し、炉床面を確認するにとどまった。炉床は厚く赤変硬化していることから長期にわたり使用されたものと考えられる。

炉1土層解説

1 暗赤褐色 焼土ブロック少量

炉2土層解説

1 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 8か所。P1~P4は深さ11~48cmで、配置から主柱穴と考えられる。P6~P8の性格は不明である。P5は長径0.90cm、短径0.80cmの楕円形で、深さは10cmほど歯状に掘りくぼめている。

P5土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・炭化物微量、締まり弱

2 暗褐色 ロームブロック微量、締まり弱

3 暗褐色 ロームブロック少量、粘性強

覆土 10層からなり、土質及びブロック状の堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

2 暗褐色 ローム粒子少量

3 褐色 ロームブロック微量

4 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

5 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

6 暗褐色 ローム粒子少量、粘性強

7 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

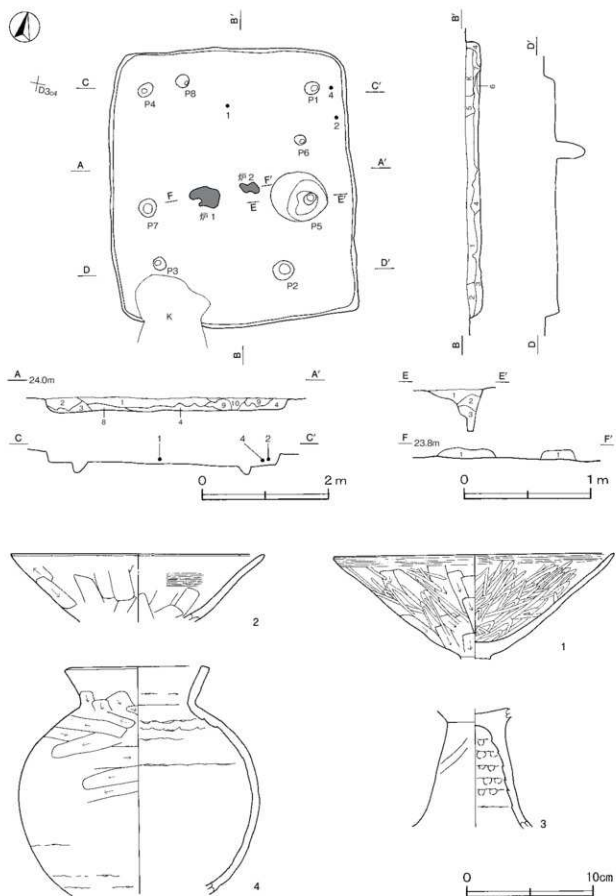
8 暗褐色 ロームブロック微量

9 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

10 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片238点（埴2、高埴44、壺192）が床面や覆土下層から出土している。1は中央部北寄り、2は東壁際、4は北東部のそれぞれ覆土下層から散在した状態で出土している。

所見 P5は、その形態から出入り口に設けられた貯蔵穴の可能性がうかがわれる。時期は、出土土器から中期前半（5世紀前半）と考えられる。



第20图 第1号住居跡・出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表（第20図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	高坏	22.3	(8.3)	-	石英・長石・ 赤色顔料	明赤褐色	普通	口縁部内外面ヨコナテ 外部外面ヘラケズリ後ヘラミゴキ 内面放射状のヘラミゴキ	覆土下層	50%
2	土師器	高坏	20.2	(5.3)	-	石英・長石・ 赤色顔料	橙	普通	口縁部内外面ヨコナテ 外部外面ヘラケズリ 内面ヘラケズリ後ハケ目	覆土下層	40%
3	土師器	高坏	-	(9.4)	-	石英・長石・ 赤色顔料	橙	普通	外面ヘラナゲ 内面輪積み肌 摺面 往肌	覆土中	5%
4	土師器	甕	10.3	(18.0)	-	石英・長石・ 赤色顔料	橙	普通	口縁部内外面ヨコナテ 外部外面ヘラケズリ後ヘラナゲ	覆土下層	60%

第2号住居跡（第21・22図）

位置 調査区南部のE3az区で、標高23.1mの台地の端部に位置している。

確認状況 全体として耕作による削平及び攪乱を受けており、遺存状態は不良である。

規模と形状 長軸4.80m、短軸4.40mの方形で、主軸方向はN-7°-Eである。壁は高さ3cmほどである。

床 平坦で軟弱である。

炉 北壁寄りに位置している。地床炉で床面をわずかに皿状に掘り込んで作られており、炉床は火熱により赤変硬化している。

炉土層解説

1 明赤褐色 炭土ブロック少量

ピット 7か所。P1～P4は深さ14～30cmで、配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ58cmで、炉と対峙し、壁側にやや外傾して掘り込まれていることから出入り口施設に関連すると考えられる。P6、P7は補助支柱穴と推定される。

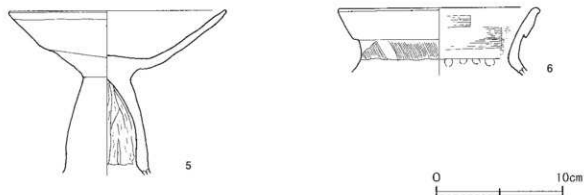
貯蔵穴 底面はほぼ平坦で、深さは40cmである。上部の北側及び東側は樹木による攪乱を受け、形状は不明であるが、長方形と推定される。

覆土 単一層で、堆積状況は不明である。

土層解説

1 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子少量

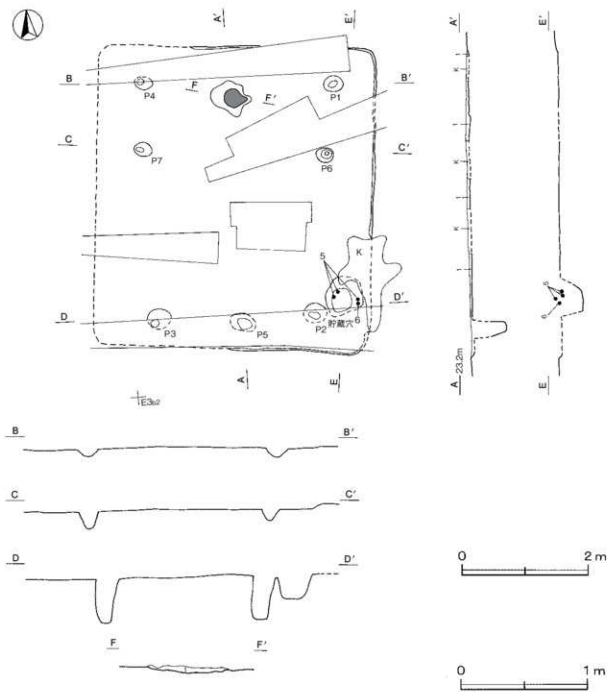
遺物出土状況 土師器片246点（高坏68、甕178）が南部の床面を中心に出土している。5、6は貯蔵穴の覆土



第21図 第2号住居跡出土遺物実測図

上層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から中期前半（5世紀前半）と考えられる。



第22図 第2号住居跡実測図

第2号住居跡出土遺物観察表（第21図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
5	土師器	高坏	172	(130)	-	石英・長石・赤色粒子	浅黄	普通	脚部内面指痕によるナデ	貯蔵穴	40%
6	土師器	壺	160	(53)	-	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部内外面ハケ目後ヨコナデ 脚部内面指痕圧痕	貯蔵穴	10%

第3号住居跡 (第23・24図)

位置 調査区南部のD3as区で、標高23.8mの台地の平坦部に位置している。

確認状況 樹木等による攪乱を受けており、遺存状態は不良である。

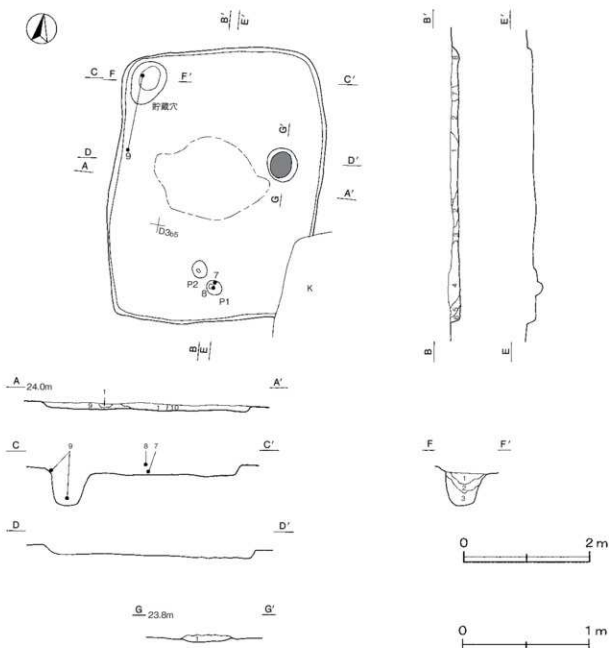
規模と形状 長軸4.35m、短軸3.30mの長方形で主軸方向はN-S-Wである。壁は高さ10~20cmでやや外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、中央部及び炉の周辺は硬化している。

炉 1か所。中央部より東壁寄りに位置している。地床炉で床面からわずかに皿状に掘りくぼめられ、炉床は火熱により赤変硬化している。

炉土層解説

1 赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量



第23図 第3号住居跡実測図

第4号住居跡（第25～27図）

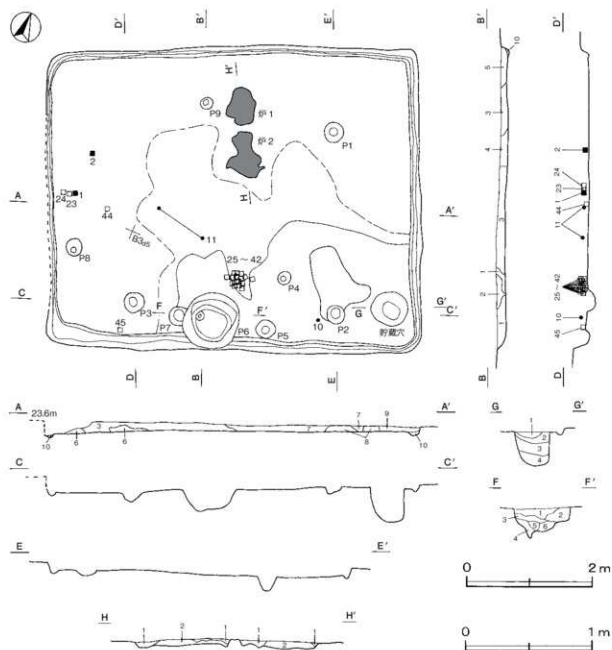
位置 調査区南部のB3cs区で、標高23.4mの台地の平坦部に位置している。

重複関係 西部壁際が削平されているため遺存状態は不良である。

規模と形状 長軸5.90m、短軸4.80mの長方形で、主軸方向はN-25°-Wである。壁は高さ5～15cmで、やや外傾して立ち上がっている。

床 平坦で壁溝が全周している。全体的に軟弱であるが、中央部及び炉の周辺、P9の周りが硬化している。また、貯蔵穴の周りに高さ10～15cmほどの馬蹄形の高まりが確認された。

炉 2か所。中央部より北壁寄りに位置している。炉1、炉2ともに地床炉で、床面を皿状にわずかに掘りくぼめ、炉床は赤変硬化している。覆土や炉床面の状態から、両者は同時期に使用されていたものと考えられる。



第25図 第4号住居跡実測図

炉1土層解説

- | | |
|-----------------------|--------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子微量 | 2 鈍い赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子微量 |
|-----------------------|--------------------------|

炉2土層解説

- | | |
|---------------------|-------------------------|
| 1 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子微量 | 2 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子微量 |
|---------------------|-------------------------|

ピット 9か所。P1～P3は深さ15～23cmで、配置から主柱穴である。P4、P5、及びP7～P9は補助柱穴と考えられる。P6は長径0.95m、短径0.85の楕円形で、深さは40cmほど盥状に掘りくぼめ、さらに底部西寄りを径が10cmほどの円筒形状に掘りくぼめており性格は不明である。

P9土層解説

- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 | 4 褐色 ロームブロック中量、粘性強、締まり弱 |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量、粘性・締まり弱 | 5 褐色 ロームブロック中量、粘性強 |
| 3 褐色 ロームブロック少量、粘性・締まり弱 | 6 黒褐色 ロームブロック少量、粘性強、締まり弱 |

貯蔵穴 底面はほぼ平坦で、深さは56cmである。覆土は4層からなり、レンズ状の堆積状況を示していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|------------------------|-----------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック少量 | 3 褐色 ロームブロック中量、焼土粒子少量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量 | 4 褐色 ロームブロック中量 |

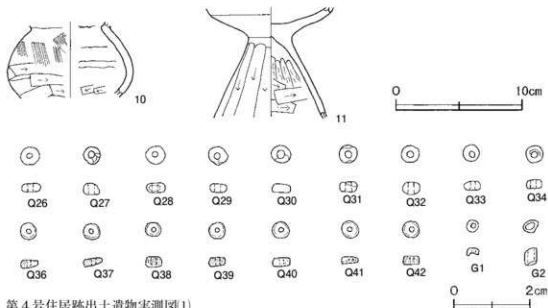
覆土 10層からなる。壁際から覆土下層(1、9、10層)は自然堆積の状況を示し、中央付近はブロック状に堆積し埋め戻された状況を示しており、自然堆積の後人為堆積したものと考えられる。

土層解説

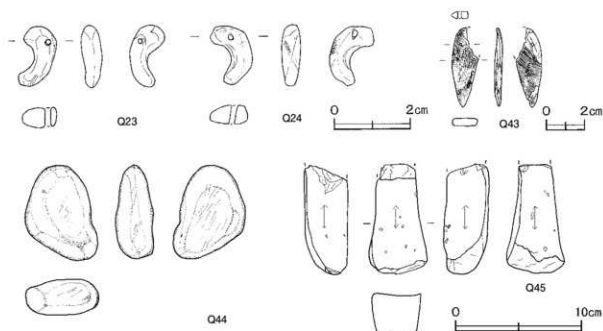
- | | |
|------------------------|-----------------------|
| 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 6 褐色 ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量 | 7 暗褐色 ロームブロック微量 |
| 3 黒褐色 炭化物少量、ロームブロック微量 | 8 褐色 ロームブロック微量 |
| 4 暗褐色 ロームブロック少量 | 9 黒褐色 ローム粒子微量 |
| 5 黒褐色 ロームブロック・炭化物微量 | 10 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片1160点(埴41、高坏31、甕1088)、ガラス製品2点(小玉)、石製模造品21点(剣形品1、白玉18、勾玉2)、石器2点(磨石、砥石)が、北西部及び南部の壁際付近を中心に出土している。Q23、Q24、G1は西壁際の床面から並んで出土し、Q25～Q42はP6脇の床面からまとまって出土している。

所見 Q45の砥石は、有孔円板や剣形品等の研磨に用いられた平砥石の可能性が考えられる。時期は、出土土器から、中期前半(5世紀前半)と考えられる。



第26図 第4号住居跡出土遺物実測図1)



第27図 第4号住居跡出土遺物実測図(2)

第4号住居跡出土遺物観察表(第26・27図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
10	土胎器	埴	-	(6.0)	-	石英・長石・ 石炭・長石・ 石炭・長石・ 炭粒	橙	普通	体部外面上部ハケ目下部ヘラケズリ 内面編み頭	床面	5%
11	土胎器	高坏	-	(8.8)	-	石英・長石・ 石炭・長石・ 炭粒	橙	普通	体部外面縦方向のヘラケズリ 内面指掘痕跡後ヘラケズリ	床面	20%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 23	勾玉	1.10	0.80	0.50	0.93	滑石	孔径0.1 両面縦位 斜位の研磨 両面穿孔	西壁床面	Pl.20
Q 24	勾玉	1.60	0.95	0.50	0.94	滑石	孔径0.15 両面横位 斜位の研磨 両面穿孔	西壁床面	Pl.20

番号	種別	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 25	白玉	0.45	0.15	0.30	0.10	滑石	側面はやや太鼓状 片面穿孔	南壁寄り床面	Pl.20
Q 26	白玉	0.50	0.20	0.20	0.06	滑石	側面は円筒状 片面穿孔	南壁寄り床面	Pl.20
Q 27	白玉	0.42	0.18	0.30	0.08	滑石	側面はやや太鼓状 片面穿孔	南壁寄り床面	Pl.20
Q 28	白玉	0.50	0.15	0.25	0.08	滑石	側面は太鼓状 片面穿孔	南壁寄り床面	Pl.20
Q 29	白玉	0.45	0.15	0.18	0.06	滑石	側面は太鼓状 片面穿孔	南壁寄り床面	Pl.20
Q 30	白玉	0.50	0.20	0.25	0.07	滑石	側面はやや太鼓状 片面穿孔	南壁寄り床面	Pl.20
Q 31	白玉	0.45	0.15	0.22	0.07	滑石	側面はやや太鼓状 片面穿孔	南壁寄り床面	Pl.20
Q 32	白玉	0.42	0.15	0.30	0.09	滑石	側面は太鼓状 片面穿孔	南壁寄り床面	Pl.20
Q 33	白玉	0.43	0.15	0.22	0.06	滑石	側面はやや太鼓状 片面穿孔	南壁寄り床面	Pl.20
Q 34	白玉	0.43	0.17	0.21	0.07	滑石	側面はやや太鼓状 片面穿孔	南壁寄り床面	Pl.20
Q 35	白玉	0.43	0.10	0.13	0.04	滑石	側面は円筒状 片面穿孔	南壁寄り床面	Pl.20
Q 36	白玉	0.42	0.14	0.20	0.06	滑石	側面は円筒状 片面穿孔	南壁寄り床面	Pl.20
Q 37	白玉	0.43	0.13	0.17	0.06	滑石	側面はやや太鼓状 片面穿孔	南壁寄り床面	Pl.20
Q 38	白玉	0.43	0.13	0.29	0.10	滑石	側面はやや太鼓状 片面穿孔	南壁寄り床面	Pl.20
Q 39	白玉	0.43	0.13	0.25	0.08	滑石	側面は太鼓状 片面穿孔	南壁寄り床面	Pl.20
Q 40	白玉	0.42	0.13	0.20	0.07	滑石	側面は円筒状 片面穿孔	南壁寄り床面	Pl.20
Q 41	白玉	0.44	0.13	0.18	0.06	滑石	側面は円筒状 片面穿孔	南壁寄り床面	Pl.20
Q 42	白玉	0.43	0.13	0.20	0.08	滑石	側面はやや太鼓状 片面穿孔	南壁寄り床面	Pl.20

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
Q 43	刷彩品	4.20	1.50	0.40	(286)	滑石	両面平滑 全面研磨調整 両面穿孔 一部穿孔失敗による欠損	覆土中	PL20
Q 44	磨石	7.50	5.80	2.90	1620	安山岩	全面磨滑痕を有する	床面	PL17
Q 45	砥石	(8.10)	4.70	3.40	(1790)	凝灰岩	表面面 2 難縁を使用	南壁床面	PL17

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
G 1	小玉	0.30	0.12	0.20	0.03	ガラス	濃いブルー 側面はやや太鼓状 両面穿孔	西壁寄り床面	PL20
G 2	小玉	0.39	0.20	0.40	0.05	ガラス	水色 側面は円筒状 両面穿孔	西壁寄り床面	PL20

第5号住居跡（第28～31図）

位置 調査区北西部のA 2 e2区で、標高23.6mの台地の平坦部に位置している。

確認状況 遺存状態は良好である。

規模と形状 一边が7mほどの方形で、主軸方向はN-18°-Wである。壁は高さ5～20cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で壁溝がほぼ全周している。主柱穴の内側は踏み固められている。貯蔵穴の周りは、高さが10cmほどの馬蹄形状の高まりが見られる。

炉 5か所。中央付近に作り替えと思われる4か所。中央部より西壁寄りに位置して1か所設けられている。住居廃絶時まで使用されていたものは西壁寄りの炉4のみで、中央部の炉1～3・5は炉床面が平滑されて硬化しており、床面として使われていたと推測される。炉4は地床炉で床面を8cmほど皿状に掘りくはめ、炉床は火熱により赤変硬化している。

炉1土層解説

1 暗赤褐色 焼土ブロック少量、締まり強

炉2土層解説

1 暗赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量、締まり強

炉3土層解説

1 暗赤褐色 焼土粒子多量、締まり強

炉4土層解説

1 暗赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子微量

炉5土層解説

1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量、締まり強

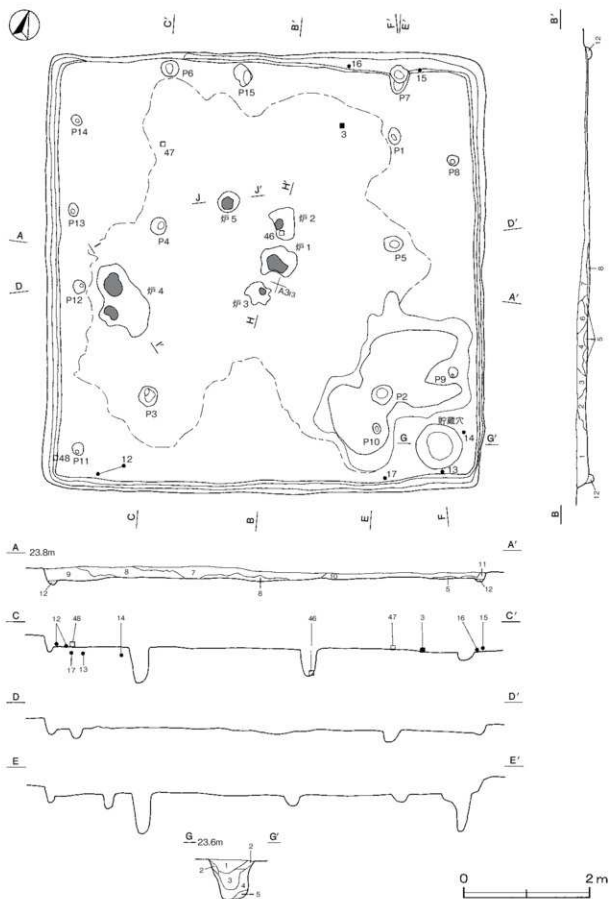
ピット 15か所。P 1～P 4は深さ15～65cmで、配置から主柱穴である。P 5は、炉と対峙して位置し壁側にやや外傾していることから出入口施設に関連すると考えられる。P 6～P 15は、補助柱穴と考えられる。

貯蔵穴 底面はほぼ平坦で、深さは72cmである。覆土は5層からなり、ロームブロックを微量含む暗褐色土を基調とし、ブロック状の堆積状況を示していることから人為堆積と考えられる。

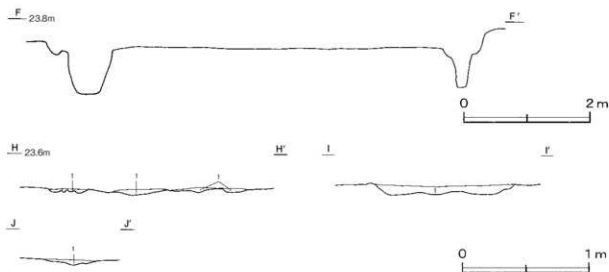
覆土 12層からなる。ロームブロックや炭化物を含む黒褐色土や暗褐色土で埋め戻された状況を示している。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック微量、粘性強 | 5 褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | | |



第28图 第5号住居跡实测图(1)



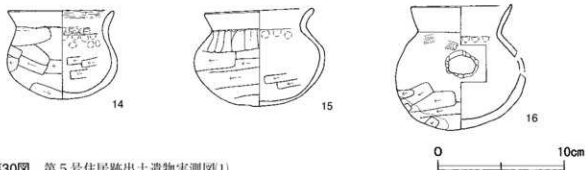
第29図 第5号住居跡実測図(2)

土層解説

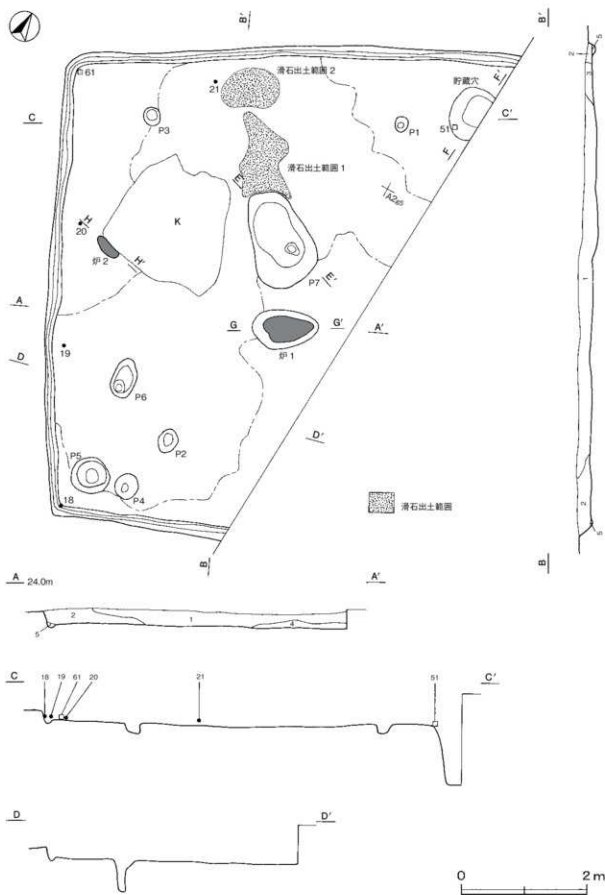
- | | | | |
|-------|------------------|--------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | 8 褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量 | 9 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化物微量、粘性強 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量、織まり弱 | 10 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック微量 | 11 褐色 | ロームブロック少量 |
| 6 黒褐色 | ロームブロック少量 | 12 褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片1562点(埴107、高坏478、甕951、小型壺26)、ガラス製品1(小玉)、石製模造品2(白玉、紡錘車)、石器1点(敲石)が出土している。土師器片はおもに南東部及び南部の壁際付近を中心に出土している。12-17はいずれも壁直下の床面から出土しており、廃絶時における壁際からの転落と思われる。16の体部には、幅2.2cm、高さ1.5cmほどの穿孔が施されており、蓋の模倣と考えられる。

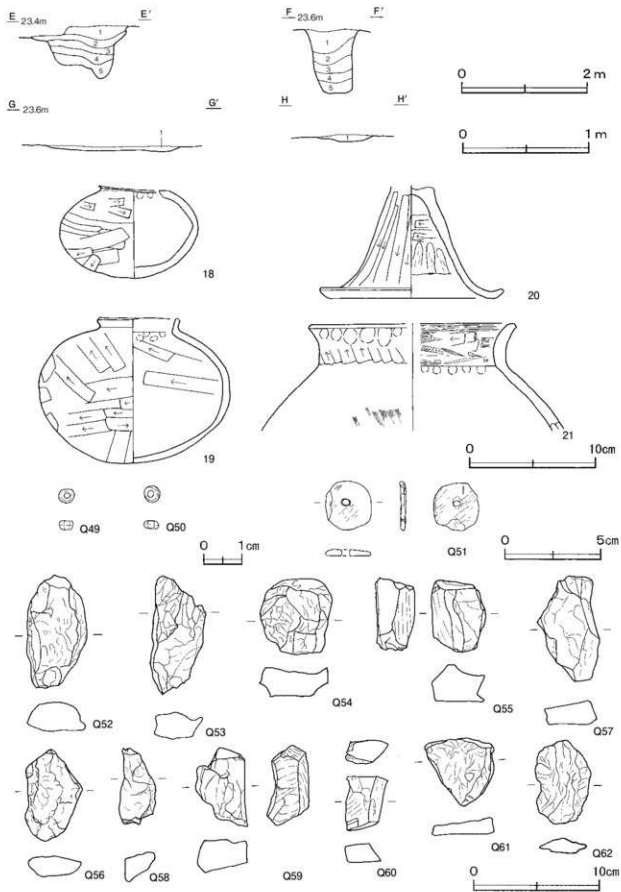
所見 13(高坏坏部)は、砥石に転用したと思われる数条の擦痕が見られ、その断面形状は刃物等の研磨ではなく、石製模造品製作の研磨工程に用いられたとみられるU字型の溝痕を有する。また、敲石には石を撃打したと思われる痕跡があることから、滑石の荒割・形割工程に用いられたものと推測される。さらに、隣接する第6号住居跡からは多量の滑石の原石、剥片(荒割品、形割品、砕片)が出土している。これらのことから、本住居跡が石製模造品製作工房の可能性が考えられる。時期は、出土土器から中期前半(5世紀前半)と考えられる。



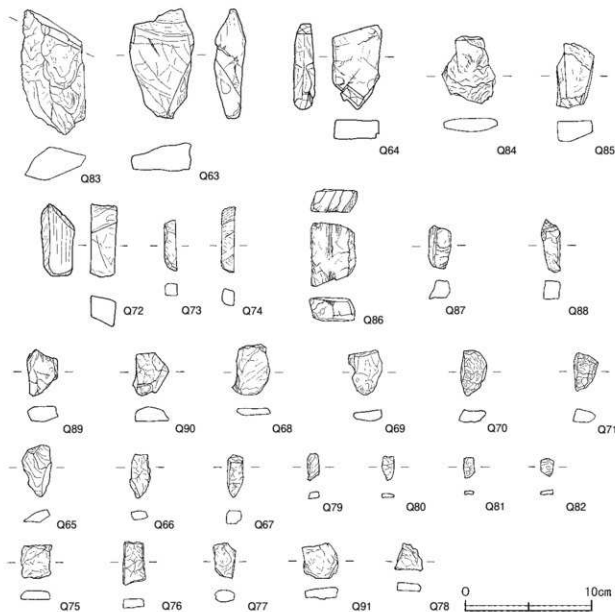
第30図 第5号住居跡出土遺物実測図(1)



第32图 第6号住居跡実測图



第33图 第6号住居跡・出土遺物実測図



第34図 第6号住居跡出土遺物実測図

所見 出土した滑石の荒制品・形制品から、刀子状のもので溝を入れた後に敲打して分割する擦切施溝分割法の痕や切痕がうかがわれる。P7は、周辺から滑石片が出土していること、またその特殊な形状から石製模造品製作の工作用ビットと考えられる。遺物の出土状況及び工作用ビットの存在から、石製模造品工房と考えられる。時期は、遺物の出土状況から中期前半（5世紀前半）と考えられる。

第6号住居跡出土遺物観察表（第33・34図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
18	土師器	埴	-	(7.4)	-	石英・長石・赤色砂子	橙	普通	口縁部欠損後研磨し再利用 体部外面ヘラケズリ 頸部内面指頭によるナデ	南西コーナー 壁際	50% PL6
19	土師器	壺	-	(11.5)	-	砂粒	橙	普通	口縁部欠損後研磨し再利用 体部外面ヘラケズリ 頸部内面指頭によるナデ	床面	10%
20	土師器	高坏	-	(9.0)	14.6	石英・長石・赤色砂子	橙	普通	頸部外面ヘラケズリ 内面指頭磨 底後ヘラケズリ	床面	95% PL6
21	土師器	甕	[16.0]	(8.4)	-	石英・長石・砂粒	鈍い橙	普通	口縁部外面磨(欠)ナデ研磨(赤) 内面ヘラケズリ 底3コナデ一部ナデ 頸部内面指頭によるナデ	床面	90%

番号	種別	径	厚さ	孔径	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
Q 49	白玉	0.40	0.25	0.17	0.06	滑石	側面は太鼓状 片面穿孔	覆土下層	PL20
Q 50	白玉	0.40	0.17	0.20	0.05	滑石	側面は太鼓状 片面穿孔	覆土下層	PL20
Q 51	有孔円板	2.40	0.30	0.35	3.70	滑石	表面斜位の研磨 表面多方向の研磨 両面穿孔	貯蔵穴内	PL20
番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
Q 52	滑石原石	8.8	4.6	2.3	124.5	滑石	原産地から搬入された状態のもの 工具痕は見られない	香石土層2	PL7
Q 53	滑石薄片	9.3	3.8	2.1	81.0	滑石	荒製品 部分的に工具痕を残す 銅形品を意図したものか	香石土層1	PL7
Q 54	滑石薄片	5.9	5.65	2.7	113.5	滑石	荒製品 荒削れにより生じた薄片 紡錘車または有孔円板を意図したものか	香石土層2	PL7
Q 55	滑石薄片	5.7	4.4	2.9	97.2	滑石	荒製品 石材の磨削を利用し分割 管玉を意図したものか	香石土層1	PL7
Q 56	滑石薄片	7.1	4.6	1.6	58.4	滑石	荒製品 擦切施溝分割の痕跡を残す 勾玉を意図したものか	香石土層2	PL7
Q 57	滑石薄片	8.3	4.9	1.9	94.0	滑石	荒製品 刀状の金属部または石部による切痕が明確に現る 石材の磨削を利用し分割した後に荒研磨を施している 銅形品を意図したものか	香石土層2	PL7
Q 58	滑石薄片	6.0	3.0	2.2	45.5	滑石	荒製品 Q 59 と接合 石材の磨削を利用し分割した	香石土層1	PL7
Q 59	滑石薄片	6.4	4.0	2.6	88.7	滑石	荒製品 Q 58 と接合	香石土層1	PL7
Q 60	滑石薄片	4.3	3.35	1.5	30.3	滑石	荒製品 石材の磨削を利用し分割 管玉を意図したものか	香石土層2	PL7
Q 61	滑石薄片	5.4	5.6	1.3	42.3	滑石	荒製品 1cm程度の厚みに調整した 表面に穿孔孔を残す 紡錘車または有孔円板を意図したものか	北西角床面	PL7
Q 62	滑石薄片	6.7	4.4	1.2	36.7	滑石	荒製品 細かい調整磨削を行っている 勾玉を意図したものか	香石土層1	PL7
Q 63	滑石薄片	8.7	5.0	2.2	110.7	滑石	荒製品 板状を呈する 刀状の金属部または石部による切痕が明確に現る 石材の磨削を利用し分割した後に荒研磨を施している 銅形品を意図したものか	香石土層1	PL7
Q 64	滑石薄片	6.7	3.9	1.7	61.6	滑石	荒製品 板状を呈する 刀状の金属部または石部による切痕が明確に現る 石材の磨削を利用し分割した後に荒研磨を施している 銅形品を意図したものか	香石土層1	PL7
Q 65 滑石薄片 4.1 2.3 1.0 8.0 滑石	銅形品 荒研磨を施している 銅形品を意図したものか								
Q 66	滑石薄片	3.5	1.6	0.7	6.2	滑石	銅形品 板状を呈する 銅形品を意図したものか	北部覆土中	PL7
Q 67	滑石薄片	3.9	1.3	1.05	5.2	滑石	銅形品 荒研磨を施している 銅形品を意図したものか	北部覆土中	PL7
Q 68	滑石薄片	3.1	4.0	0.55	12.2	滑石	荒製品 板状を呈する 勾玉を意図したものか	北部覆土中	PL7
Q 69	滑石薄片	3.55	2.75	0.86	10.3	滑石	荒製品 板状を呈する 勾玉を意図したものか	香石土層2	PL7
Q 70	滑石薄片	3.7	2.1	1.0	9.5	滑石	荒製品 板状を呈する 勾玉を意図したものか	北部覆土中	PL7
Q 71	滑石薄片	3.0	1.9	1.1	5.8	滑石	荒製品 板状を呈する 勾玉を意図したものか	北部覆土中	PL7
Q 72	滑石薄片	5.7	2.7	2.0	53.0	滑石	荒製品 刀状の金属部により切裁されたと思われる Q 73・Q 74 の母岩	北部覆土中	PL7
Q 73	滑石薄片	4.0	1.0	0.9	6.3	滑石	銅形品 刀状の金属部により切裁されたと思われる 管玉を意図したものか Q 72 から分割し さらに Q 74 と分割	北部覆土中	PL7
Q 74	滑石薄片	5.2	1.0	1.0	11.7	滑石	銅形品 刀状の金属部により切裁されたと思われる 管玉を意図したものか Q 72 から分割し さらに Q 73 と分割	北部覆土中	PL7
Q 75	滑石薄片	2.7	2.5	0.7	7.8	滑石	荒製品 板状を呈する 白玉を意図したものか	北部覆土中	PL7
Q 76	滑石薄片	3.4	1.8	0.7	8.4	滑石	荒製品 板状を呈する 白玉を意図したものか	北部覆土中	PL7
Q 77	滑石薄片	2.8	1.9	0.9	6.3	滑石	荒製品 板状を呈する 白玉を意図したものか	香石土層2	PL7
Q 78	滑石薄片	2.1	2.3	0.6	4.0	滑石	荒製品 板状を呈する 白玉を意図したものか	北部覆土中	PL7
Q 79	滑石薄片	2.17	0.9	0.5	1.3	滑石	銅形品 板状を呈する 白玉を意図したものか	香石土層2	PL7
Q 80	滑石薄片	1.5	1.0	0.3	0.8	滑石	銅形品 板状を呈する 白玉を意図したものか	香石土層2	PL7
Q 81	滑石薄片	1.6	0.8	0.3	0.8	滑石	銅形品 板状を呈する 白玉を意図したものか	北部覆土中	PL7
Q 82	滑石薄片	1.5	1.0	0.4	0.7	滑石	銅形品 板状を呈する 白玉を意図したものか	北部覆土中	PL7
Q 83 滑石薄片 10.0 5.0 2.1 162.2 滑石	母岩 擦切施溝分割により輪切りに切り出す 銅形品の形製品を作出したものか								
Q 84	滑石薄片	5.4	4.2	1.1	34.8	滑石	荒製品 板状の溝口に縦方向の擦切施溝を施している 銅形品を意図したものか	香石土層2	PL7
Q 85	滑石薄片	5.1	3.0	1.6	32.8	滑石	荒製品 縦方向の擦切施溝を施し分割を試みている 銅形品を意図したものか	香石土層2	PL7
Q 86	滑石薄片	5.0	3.6	1.9	53.1	滑石	荒製品 厚みのある板状薄片に擦切施溝を施している 管玉類を意図したものか	香石土層2	PL7
Q 87	滑石薄片	3.4	1.7	1.4	12.4	滑石	荒製品 四角柱状を呈している 管玉類を意図したものか	香石土層1	PL7
Q 88	滑石薄片	4.2	1.5	1.3	13.4	滑石	荒製品 四角柱状を呈している 管玉類を意図したものか	香石土層1	PL7
Q 89	滑石薄片	3.7	2.5	1.14	滑石	荒製品 板状を呈し擦切施溝分割痕を残す 勾玉を意図したものか	香石土層2	PL7	
Q 90	滑石薄片	3.4	2.9	1.2	15.9	滑石	荒製品 板状を呈し擦切施溝分割痕を残す 勾玉を意図したものか	香石土層2	PL7
Q 91	滑石薄片	2.9	2.8	0.9	9.3	滑石	荒製品 板状を呈し擦切施溝分割痕を残す 有孔円板・白玉を意図したものか	北部覆土中	PL7

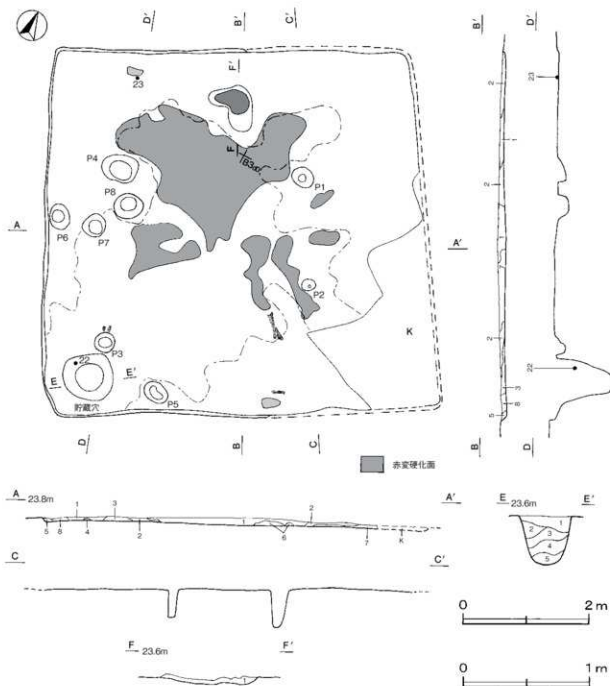
第7号住居跡 (第35・36図)

位置 調査区北部のB3d0区で、標高23.5mの台地の平坦部に位置している。

確認状況 掘削や耕作による掘削・削平のため、遺存状態は不良である。

規模と形状 推定一辺約6mほどの方形で、主軸方向はN-25°-Wと考えられる。壁は高さ8cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、主柱穴の内側を中心に踏み固められており、中央付近は赤変硬化した床面が広がっている。さらに焼土や炭化材が出土している。



第35図 第7号住居跡実測図

炉 1か所。中央部より北壁寄りに位置し、地床炉で床面を5cmほど皿状に掘りくぼめている。炉床は火熱により赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック微量

ピット 8か所。P1～P4深さ18～60cmで配置から主柱穴である。P5～P8は補助柱穴と考えられる。

貯蔵穴 底面はほぼ平坦で、深さは90cmである。覆土は5層からなり、壁際及び床面付近が自然堆積で、その後人為堆積したものと考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化物微量
2 黒褐色 ロームブロック微量
3 黒褐色 ローム粒子微量
4 暗褐色 ローム粒子少量
5 黒褐色 ロームブロック微量、粘性弱

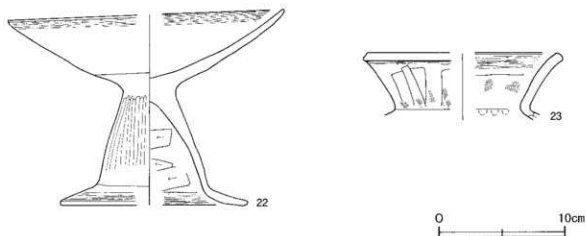
覆土 8層からなり、ロームブロックや焼土ブロック、炭化粒子等を多く含む黒褐色土や暗褐色土がブロック状に堆積し、埋め戻された状況を示している。

土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子少量、ローム粒子微量
2 暗褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック微量
3 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子少量
4 暗褐色 ローム粒子少量
5 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子少量
6 暗褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子少量
7 褐色 ロームブロック多量、炭化粒子少量
8 褐色 ローム粒子・焼土ブロック多量、炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片434点(埴2、椀2、高坏86、甕344)が、炉付近を中心に散在する状態で出土している。22は、貯蔵穴の覆土中層から横位で出土している。23は北壁際の床面から出土している。

所見 赤変硬化した床面の状況や炭化材・焼土の出土状況から、焼失住居と考えられる。時期は、出土土器から中期前半(5世紀前半)と考えられる。



第36図 第7号住居跡出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物観察表(第36図)

番号	類別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
22	土師器	高坏	[21.9]	15.5	[14.8]	石英・長石・雲母	橙	普通	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面へラミガキ 内面ヘラケズリ	貯蔵穴中層	60%
23	土師器	甕	[15.0]	(5.3)	-	石英・長石・砂粒	橙	普通	口縁部外面ヘラナデ後ハケ目・ヨコナデ 内面ハケ目・ヨコナデ 胴部内面指頭圧痕	北壁際床面	10%

第8号住居跡 (第37・38図)

位置 調査区北部のA3ds区で、標高23.1mの台地の平坦部に位置している。

確認状況 北西部及び中央部が掘乱されており、遺存状態は不良である。

規模と形状 長軸5.20m、短軸4.00mの長方形で、主軸方向はN-30°-Wである。壁は高さ8~30cmで外傾して立ち上がっている。

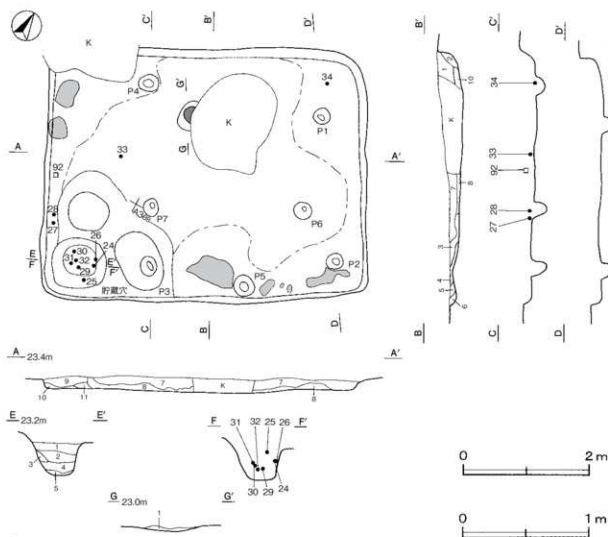
床 平坦で、主柱穴の内側を中心に踏み固められている。貯蔵穴の周りに10~15cmほどの高まりを持っている。南東部及び西部の床面から焼土塊が確認された。

炉 1か所。中央部より西壁寄りに位置している。地床炉で床面を5cmほど皿状に掘りくぼめ、炉の東側半分が掘乱により掘削されている。炉床は火熱により赤変硬化している。

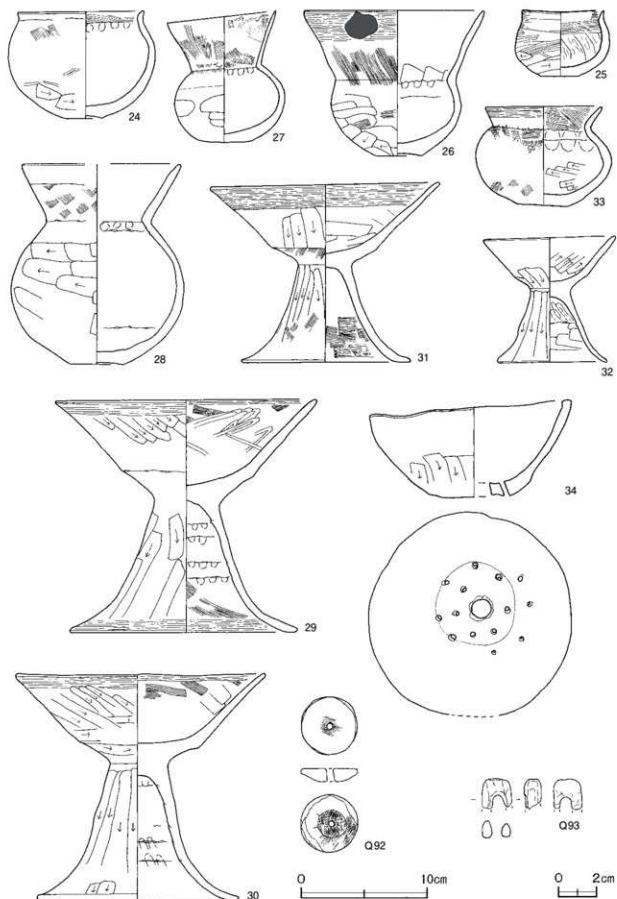
炉土層解説

1 濃い赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量

ビット 7か所。P1~P4は配置から主柱穴で、深さ14~44cmである。P5は炉と対峙し、南壁際に位置していることから、出入り口施設に関連すると思われる。P6、P7は補助柱穴と考えられる。



第37図 第8号住居跡実測図



第38图 第8号住居跡出土遺物実測図

貯蔵穴 底面は平坦で深さ54cmである。覆土は5層からなり、土質及び堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------|--------|---------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗赤褐色 | ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック微量 | 5 褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子微量 | | |

覆土 11層からなり、壁際及び床面付近は自然堆積で、その後人為堆積したものと考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|---------------------|---------|------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック微量 | 7 黒色 | ローム粒子微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子多量 | 8 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | 焼土粒子中量、ロームブロック微量 | 9 黒褐色 | ローム粒子・炭化物微量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 | 10 暗赤褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 5 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 11 褐色 | ローム粒子微量 |
| 6 暗褐色 | ローム粒子中量 | | |

遺物出土状況 土師器片907点(埴116, 椀4, 高坏257, 小型壺2, 甕470, 甌58)、石製模造品1点(紡錘車)が出土している。高坏8, 埴2, 椀1が貯蔵穴の覆土中層付近から重なり合う状態で出土している。

所見 床面の焼土塊の出土状況から、焼失住居と考えられる。時期は、貯蔵穴内及び壁際床面から出土した遺物から、中期前半(5世紀前半)と考えられる。

第8号住居跡出土遺物観察表(第38図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
24	土師器	椀	101	8.6	2.6	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	体部外面上部ハケ目 下部ヘラケズリ 口縁部内面ハケ目 頸部内面指頭圧痕	貯蔵穴中層	95%
25	土師器	椀	64	5.3	2.8	石英・長石・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部内面ヨコナデ 体部外面ヘラ ミダキ後ヘラケズリ 内面指頭圧痕	貯蔵穴上層	95%
26	土師器	埴	142	11.5	3.7	石英・長石・砂粒	橙	普通	口縁部外面ヨコナデ 内面ヨコナデ 体部外面ヘ ラケズリ後ハケ目 口縁部一部指痕 頸部指頭圧痕	貯蔵穴中層	100% PL9
27	土師器	埴	87	10.5	4.0	石英・長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部内外面ハケ目後ヨコナデ 体部 外面ヘラミダキ 頸部内面指頭圧痕	西壁際床面	95% PL9
28	土師器	埴	[126]	15.8	4.2	石英・長石・砂粒	明赤褐	普通	口縁部外面ハケ目後ヨコナデ 内面ヨコナ デ 体部外面ヘラケズリ 頸部内面指頭圧痕	西壁際床面	90% PL9
29	土師器	高坏	207	18.3	18.0	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	胴部外ヘラケズリ後ヨコナデ 内面ヨコナデ 体部外面ヘ ラケズリ後ハケ目 口縁部一部指痕 頸部指頭圧痕	貯蔵穴下層	95% PL9
30	土師器	高坏	197	18.0	16.0	石英・長石・雲母・砂粒	橙	普通	胴部外ヘラケズリ後ヨコナデ 内面ヨコナデ 体部外面ヘ ラケズリ 頸部内面指頭圧痕 スリ部ヨコナデ	貯蔵穴中層	90% PL9
31	土師器	高坏	182	14.3	13.2	石英・長石・赤色粒子・砂粒	橙	普通	坏部内外面ヘラケズリ後ヨコナデ 脚 部外面ヘラケズリ後ハケ目 内面ハケ目	貯蔵穴中層	60%
32	土師器	高坏	104	10.0	8.6	石英・長石・赤色粒子・砂粒	橙	普通	胴部外ヘラケズリ後ヨコナデ 頸部内面ヘラケズリ 後ハケ目 内面指頭圧痕後ハケ目 スリ部ヨコナデ	貯蔵穴下層	95% PL9
33	土師器	壺	9.2	8.1	3.9	石英・長石・雲母	橙	普通	口縁部ハケ目後ヨコナデ 体部外面 ハケ目 内面ヘラケズリ・指頭圧痕	覆土下層	90%
34	土師器	甌	16.1	7.7	6.1	石英・長石・砂粒	橙	普通	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面 ヘラケズリ	北東部床面	95% PL9

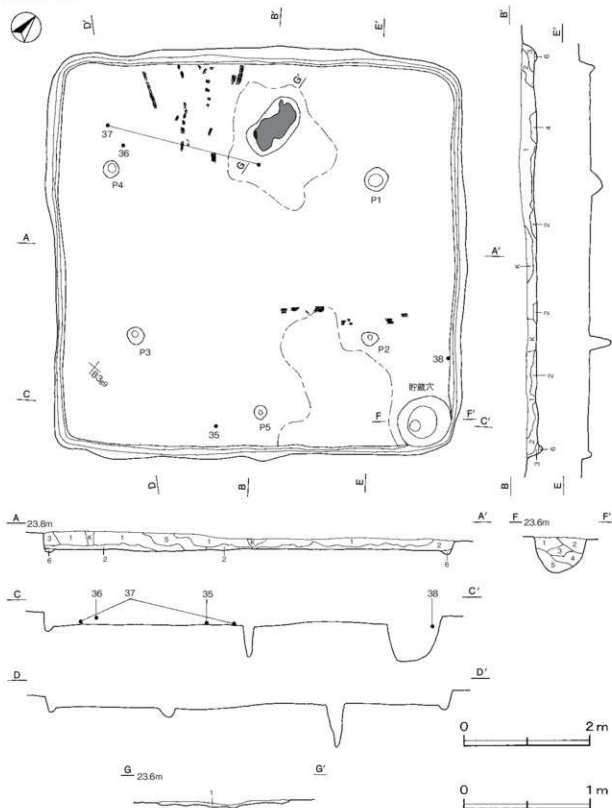
番号	種別	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 92	紡錘車	4.6	1.0	0.6	30.6	滑石	表面斜位の研磨 裏面多方向の研磨 両面穿孔	覆土下層	PL20

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 93	不明石製品	(1.6)	(1.6)	0.9	(1.26)	不明	帯金具状一部欠損	覆土中	PL19

第9号住居跡 (第39・40図)

位置 調査区北部のB36区で、標高236mの台地の平坦部に位置している。

規模と形状 一辺が6.50mの方形で、主軸方向はN-40°-Wである。壁は高さ16~26cmで外傾して立ち上がっている。



第39図 第9号住居跡実測図

床 平坦で、壁溝が全周しており、炉の周辺と貯蔵穴付近が硬化している。炉に近い北部から西寄りの床面を中心に、炭化材（角材 縦3～4cm、横4～8cm）が中央部に向かう形で放射状に並んで出土している。

炉 1か所。北西壁寄りに位置し、地床炉で床面を8cmほど皿状に掘りくぼめている。炉床は火熱により赤変硬化している。

炉土層解説

1 濃い赤褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量

ピット 5か所。P1～P4は深さ16～70cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ52cmで、炉と対峙して南東壁際に位置していることから、出入り口施設に関連すると考えられる。

貯蔵穴 底面はほぼ平坦で、深さは60cmである。覆土は5層からなり、不規則な堆積状況を示していることから人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック微量、締まり強
2 黒褐色 ロームブロック微量
3 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

4 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
5 極暗褐色 ローム粒子微量

覆土 6層からなり、黒褐色土や暗褐色土がブロック状に堆積し、埋め戻された状況を示している。

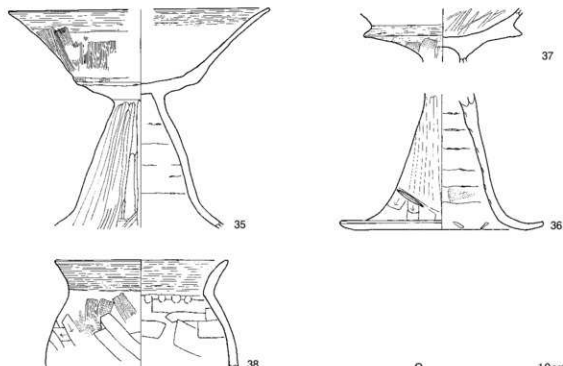
土層解説

1 黒褐色 炭化粒子中量、ロームブロック微量
2 暗褐色 炭化粒子中量、ロームブロック少量
3 褐色 ロームブロック微量

4 鈍い赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
5 黒褐色 炭化粒子中量、ロームブロック微量
6 暗褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況 土師器片1520点（埴58、椀24、高坏426、壺類26、甕986）が、炉の周辺と南東部の覆土下層～床面にかけて出土している。35は南東壁寄りの床面から、37は、炉付近と北西コーナー付近の床面から出土している。

所見 37は坏部下に突起を持つ北陸系の流れをくむものと思われる。床面の炭化材の出土状況から、焼失住居と思われる。時期は、出土土器から中期前半（5世紀前半）と考えられる。



第40図 第9号住居跡出土遺物実測図

第9号住居跡出土遺物観察表（第40図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
35	土師器	高坏	[209]	(17.4)	-	石英・長石・赤色粒子	鈍い黄褐色	普通	耳取部ヨコナテ取付目内面露出部分の穴縁部大断面部が傾斜した状態で出土している	南壁寄り床面	70%
36	土師器	高坏	-	(10.9)	16.2	長石・雲母・赤色粒子・砂粒	黄褐色	普通	脚部外面へカケズリ 内面ハケ目 脚部外面に黒石軸用痕	床面	40%
37	土師器	高坏	-	(4.4)	-	長石・赤色粒子・砂粒	鈍い黄褐色	普通	坏部下面に痕を持つ 外面へラナク後ハケ目 内部内面放射状のへらミ考す	北部床面	10%
38	土師器	甕	13.6	(8.7)	-	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面ヨコナテ 体部外面へカケズリ後ハケ目後ハケナテ 内部内面露出部	東壁側床面	20%

第10号住居跡（第41・42図）

位置 調査区北部のB3c7区で、標高23.5mの台地の平坦部に位置している。

規模と形状 長軸7.00m、短軸5.40mの長方形で、主軸方向はN-10°-Wである。壁は高さ20~25cmで外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、壁溝が全周している。炉の周辺と北壁コーナー部寄り及び南東部が硬化している。

炉 1か所。北壁寄りに位置し、地床が床面を10cmほど皿状に掘りくぼめている。炉床は火熱により赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 赤褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 2 明赤褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 6か所。P1~P4は深さ12~15cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は炉と対峙し、南壁際に位置していることから、出入り口施設に関連すると考えられる。P6は補助柱穴と考えられる。

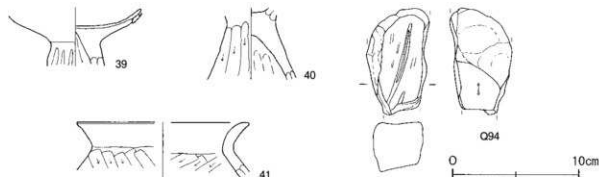
覆土 6層からなり、ロームブロックや焼土ブロックを多く含む黒褐色土や暗褐色土がブロック状に堆積し、埋め戻された状況を示している

土層解説

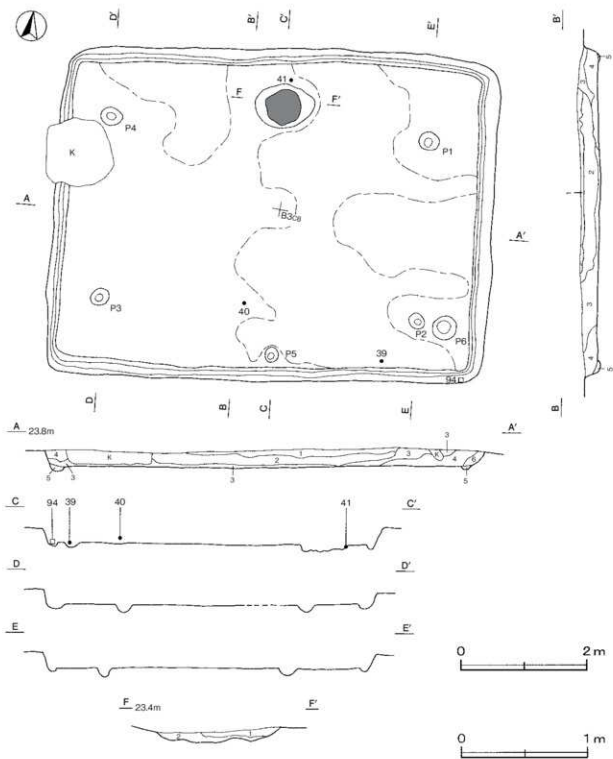
- 1 黒褐色 ロームブロック微量、粘性強 4 暗褐色 ローム粒子少量
2 黒褐色 ロームブロック微量 5 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
3 黒褐色 ロームブロック微量、粘性弱 6 褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片308点（増13、高坏103、壺1、甕191）、砥石1点が出土している。39は南東部壁際の床面から、41は炉付近の床面から出土している。Q94は南東コーナー壁際の床面から出土している。

所見 Q94に刻まれた捺痕は緩やかなU字型であり、鉄製品等を研いだものではなく、石製品製作工程の研磨に用いられたものと推測される。さらに、筋砥石面と平砥石面が見られ、使い分けをしたものと考えられる。遺物出土状況から、本住居跡が工房である可能性は低く、石製品の工房跡が近くに存在する可能性がある。時期は、出土土器から、中期前半（5世紀前半）と考えられる。



第41図 第10号住居跡出土遺物実測図



第42図 第10号住居跡実測図

第10号住居跡出土遺物観察表 (第41図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
39	土陶器	高坏	-	(4.5)	-	赤系灰白・黄母・ 茶色柱石・砂粒	橙	普通	坏部外面ヨコナデ 内面器面荒れのため 観察不明	南東埋床面	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
40	土師器	高坏	-	(5.7)	16.2	長石・雲母・ 鉄粉	橙	普通	唇部外面ヘラケズリ 内面指頭によるナデ	南寄り覆土層	5%
41	土師器	壺	[136]	(4.4)	-	白地粒子・ 赤褐色土・黒色粒子	鈍い黄橙	普通	体部内外面ヘラケズリ	北部床面	5%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 94	砥石	(8.3)	4.9	3.8	(215.0)	砂岩	石製品研削と思われるU字型の磨痕 表裏面 1 綫縁を使用	南東コーナー部床面	PL17

第11号住居跡 (第43・44図)

位置 調査区北部の B 3 区で、標高23.5mの台地の平坦部に位置している。

確認状況 南部、南東部及び西部が境乱によって掘り込まれており、遺存状態は不良である。

規模と形状 長軸7.60m、短軸7.30mの方形で、主軸方向はN-52°-Wと推測される。壁は高さ15~25cmで外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、炉の周辺が硬化している。壁溝が全周していると推定される。

炉 1か所。北西壁の中央部寄りに位置し、地床炉で床面を5cmほど皿状に掘りくぼめている。炉床は火熱により赤変硬化している。

炉土層解説

1 にぶい赤褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

ピット 3か所。P 1~P 3は深さ14~25cmで、配置から支柱穴と考えられる。

覆土 6層からなり、黒褐色土や暗褐色土がブロック状に堆積し、埋め戻された状況を示している。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------|--------|-------------------|
| 1 褐 色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 4 暗 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒 褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量 | 5 黒 褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック微量 |
| 3 灰 褐色 | ロームブロック・炭化物微量 | 6 明 褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片139点 (埴9、高坏34、壺3、甕93)、が出土している。43の高坏脚部は、南東壁際の覆土上層から出土している。

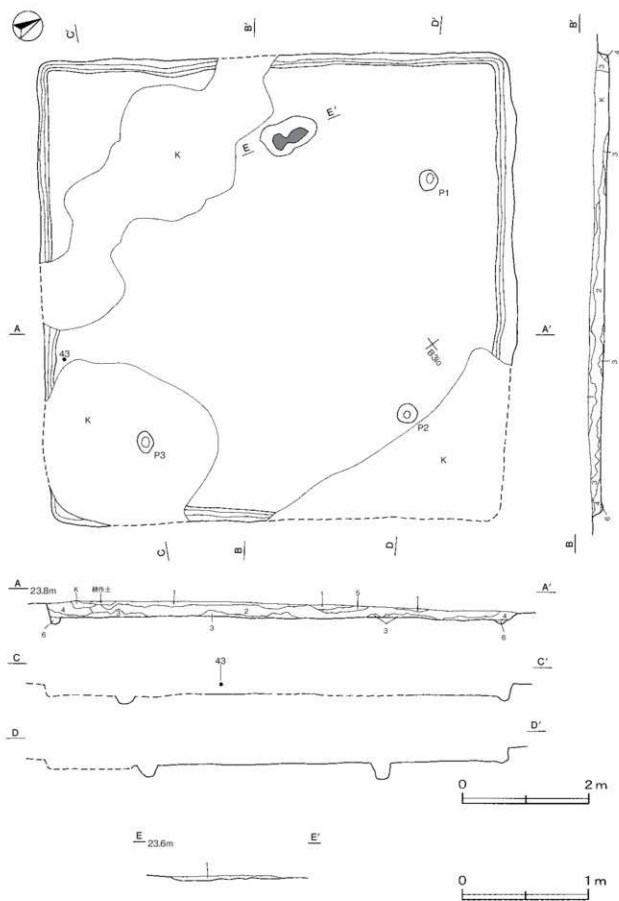
所見 時期は、出土土器から前期末から中期前半 (5世紀前半) と考えられる。



第43図 第11号住居跡出土遺物実測図

第11号住居跡出土遺物観察表 (第43図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
42	土師器	壺	[140]	(4.0)	-	石灰・長石・ 赤褐色土	明黄橙	普通	口縁部内外面ヨコナデ	覆土上層	5%
43	土師器	高坏	-	(7.7)	-	長石・雲母・ 鉄粉	鈍い黄橙	普通	唇部外面ヘラケズリ後ハケ目 内面指頭	覆土上層	5%



第44图 第11号住居跡実測図

第12号住居跡 (第45・46図)

位置 調査区北部のB 4 g1区で、標高234mの台地の平坦部に位置している。

確認状況 攪乱されており、遺存状態は不良である。

規模と形状 長軸5.00m、短軸4.90mの方形で、主軸方向はN-50°-Wである。壁は高さが10~14cmで、外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、全体に軟弱である。壁溝が部分的に巡っている。

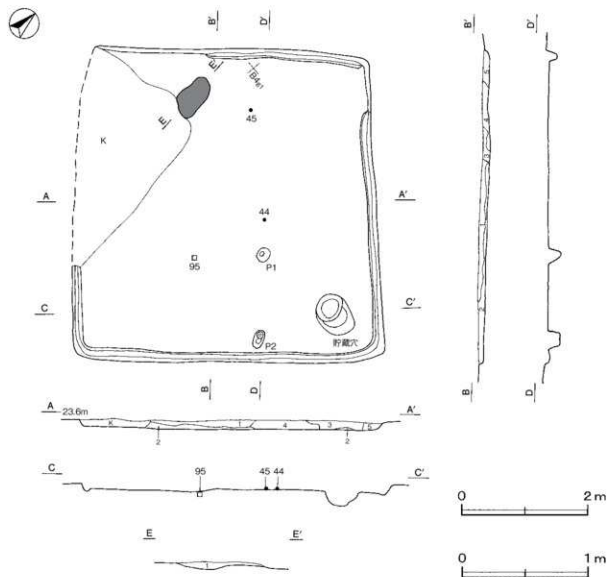
炉 1か所。北西壁寄りに位置し、地床炉で床面をわずかに皿状に掘りくぼめている。炉床は火熱により赤変硬化している。

炉土層解説

1 暗赤褐色 焼土粒子少量

ピット 2か所。P 1は深さ22cmで、配置から主柱穴と考えられる。P 2は深さ30cmで、炉と対峙し壁際に位置することから、出入り口施設に関連すると考えられる。

貯蔵穴 底面はほぼ平坦で、深さは22cmである。



第45図 第12号住居跡実測図

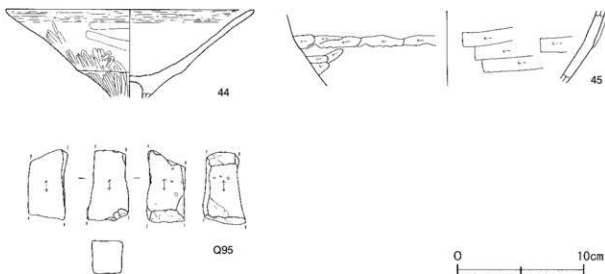
覆土 5層からなり、ロームブロックや炭化粒子を含む黒褐色土や暗褐色土がブロック状に堆積し、埋め戻された状況を示している。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|----------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック少量 | 5 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片189点（埴2、高坏76、壺1、甕110）、不明土製品4点、砥石1点が出土している。44及びQ95は中央部の床面、45は炉付近の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期前半（5世紀前半）と考えられる。



第46図 第12号住居跡出土遺物実測図

第12号住居跡出土遺物観察表（第46図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
44	土師器	高坏	19.6	(7.0)	-	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部内外面ヨコナデ ラケズリ後ヘラミガキ	床面	40%
45	土師器	鉢	-	(5.7)	-	石英・長石・雲母・砂粒	橙	普通	口縁部外面ヘラケズリ 体部内外面ヘラケズリ	床面	5%

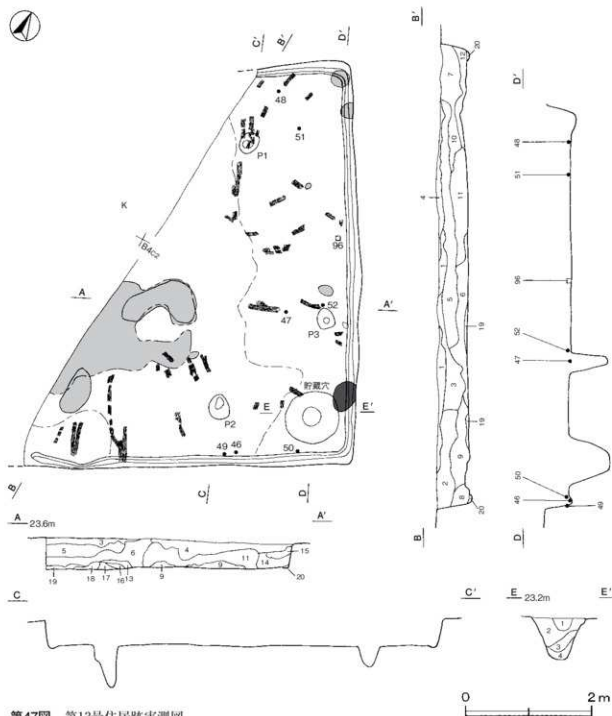
番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
Q 95	砥石	(3.4)	5.7	3.0	(78.6)	凝灰岩	表裏面 2側縁を使用	中央部床面	

第13号住居跡（第47・48図）

位置 調査区北部のB 4 c2区で、標高23.3mの台地の平坦部に位置している。

確認状況 西側はほぼ半分が攪乱されており、遺存状態は不良である。

規模と形状 一辺が推定6.4mの方形で、主軸方向はN-30°-Wと考えられる。壁は高さ40~50cmで、外傾して立ち上がっている。



第47図 第13号住居跡実測図

床 平坦で、主柱穴の内側が踏み固められ、壁溝がほぼ全周していると推測される。南壁及び東壁付近の床面から、焼土塊や炭化材（角材 縦2~6cm、横4~7cm）が、中央部に向かう形で放射状に並んで出土している。ピット 3か所。P1、P2は深さ34~65cmで、配置から主柱穴と考えられる。P3は深さ67cmで、炉と対峙すると推測され、壁際に位置していることから、出入り口施設に関連すると思われる。

貯蔵穴 底面はほぼ平坦で、深さは68cmである。覆土は4層からなり、土質及び不規則な堆積状況を示していることから人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|--------|------------------|--------|-----------------------|
| 1 褐 色 | ロームブロック少量・炭化粒子微量 | 3 灰黄褐色 | ロームブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 黒 褐色 | 焼土粒子・炭化物・粘土粒子微量 | 4 黒 褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 |

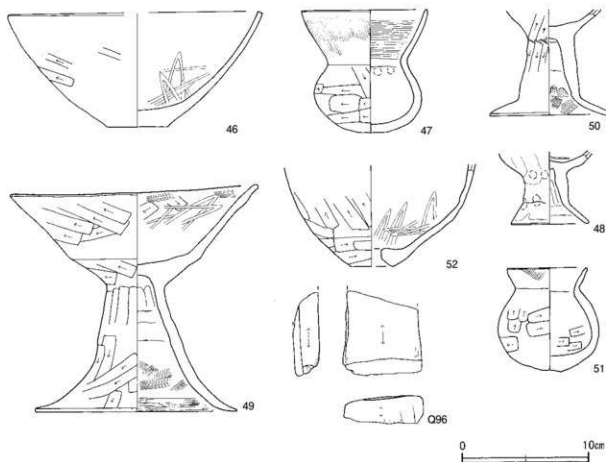
覆土 20層からなり、ロームブロック、焼土粒子、炭化粒子を含む黒褐色土や暗褐色土がブロック状に堆積し埋め戻された状況を示している。

土層解説

- | | | | |
|---------|---------------------|---------|------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 11 暗褐色 | ロームブロック中量、炭化物微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化物微量 | 12 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量 |
| 3 黒暗褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 13 黒褐色 | 焼土ブロック少量、炭化物・ローム粒子微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 14 黒褐色 | 炭化物少量、ロームブロック微量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 15 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 6 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 16 褐色 | ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 7 黒褐色 | ロームブロック少量 | 17 暗褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化物少量 |
| 8 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 18 黒暗褐色 | ロームブロック・炭化物少量、焼土ブロック微量 |
| 9 黒褐色 | ロームブロック・炭化物微量 | 19 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 10 暗赤褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子微量 | 20 褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片315点（坏10、埴7、高坏37、壺1、小型壺6、甕225、瓶25、ミニチュア高坏4）、砥石1点が出土している。土師器片は北部及び南東部の床面及び覆土下層から散在する状態で出土している。46、49、50は南壁直下の床面から出土し、特に49は坏部を南に向けた横位の状態で確認された。47、51はそれぞれ横位で床面から出土している。

所見 床面の炭化材や焼土塊の出土状況から、焼失住居と考えられる。時期は、出土土器から中期前半（5世紀前半）と考えられる。



第48図 第13号住居跡出土遺物実測図

第13号住居跡出土遺物観察表（第48図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
46	土陶器	碗	19.7	9.1	4.7	石英・長石・雲母・砂粒	橙	普通	体部外面ヘラケズリ 内面ヘラミガキ	南壁階床面	50% PL10
47	土陶器	埴	9.9	9.7	-	長石・雲母・砂粒	鈍い黄橙	普通	口縁部内外面ハケ目 体部外面ヘラケズリ 頸部内面指頭によるナデ	床面	80% PL10
48	土陶器	ミニチュア高杯 <small>ハカ</small>	-	(5.8)	6.0	赤色粘土	橙	普通	外面ユビナデ 頸部内面指頭によるナデ	北壁階床面	40% PL10
49	土陶器	高杯	19.6	17.9	15.9	石英・長石・雲母・砂粒	黄橙	普通	頸部内面ヘラケズリ 内面ヘラミガキ 口縁部内外面ハケ目 体部外面ヘラケズリ 頸部内面指頭によるナデ	南壁階床面	95% PL10
50	土陶器	高杯	-	(8.3)	9.6	石英・長石・雲母・砂粒	橙	普通	頸部外面ヘラケズリ 後ヨコナデ 内面ハケ目	南壁階床面	50%
51	土陶器	埴	6.3	8.2	-	石英・長石・赤色粘土・砂粒	明黄陶	普通	口縁部外面ハケ目 後ヨコナデ 内面ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 内面指頭押込	床面	85% PL10
52	土陶器	瓶	-	[8.0]	3.4	石英・長石・砂粒	明赤陶	普通	体部外面ヘラケズリ 内面ヘラミガキ	東壁階床面	30%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 96	磁石	(6.7)	6.3	2.2	(160.6)	石英粘土	表表面 2個縁を使用	東壁階床面	

第14号住居跡（第49図）

位置 調査区北部のA 3 d7区で、標高23.2mの台地の平坦部に位置している。

確認状況 耕作による削平のため、床と思われる硬化面の一部が残存しているに過ぎない。

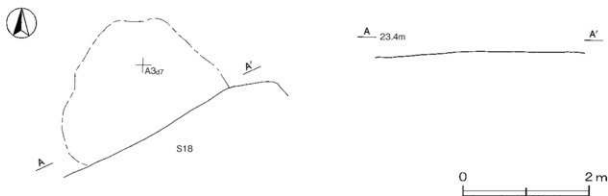
重複関係 南側を第8号住居に掘り込まれている。

規模と形状 確認された硬化面の範囲は、長軸2.70m、短軸1.80mである。

床 硬化面がはっきりとしており、第8号住居の北壁の東端で重複し、北へ1.8mほど広がっている。

遺物出土状況 土師器片24点（2発）が床面から出土している。

所見 出土土器から、時期は前期（4世紀）から中期（5世紀）と考えられる。



第49図 第14号住居跡実測図

第15号住居跡（第50・51図）

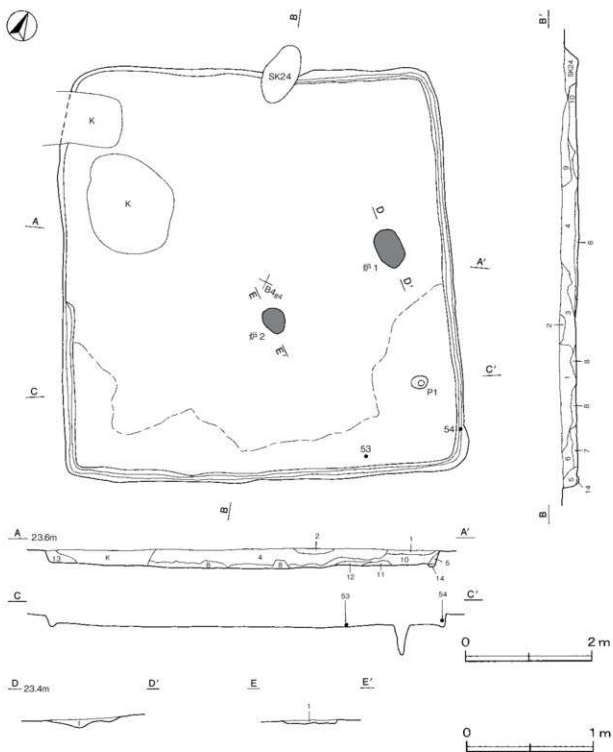
位置 調査区東部のB 4 b区で、標高23.4mの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第24号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸6.50m、短軸6.20mの方形で、主軸方向はN-30°-Wである。壁は高さ10~20cmでわずかに外傾して立ち上がる。

床 平坦で、南部の壁際は踏み固められている。壁溝は全周していると考えられる。

炉 2か所。炉1、炉2は地床炉で、炉1は東壁寄りに位置し、炉2は中央部やや南寄りに位置している。床面をわずかに皿状に掘りくぼめ、炉床は火熱により赤変硬化している。



第50図 第15号住居跡実測図

伊1土層解説

1 暗赤褐色 ローム粒子・焼土粒子中量、炭化粒子微量

伊2土層解説

1 暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量

ピット 1か所。深さは40cmで、配置からみて柱穴と考えられる。

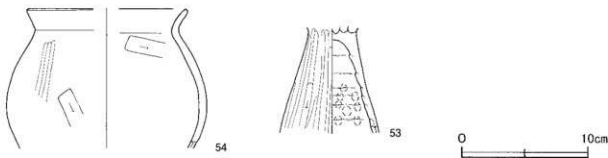
覆土 14層からなり、黒褐色土や暗褐色土がブロック状に堆積し、埋め戻された状況を示している。

土層解説

- | | | | |
|---------|-----------------------|----------|---------------------|
| 1 黒色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 褐色 | ローム粒子少量 | 9 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 10 褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 4 黒色 | ロームブロック・焼土粒子微量 | 11 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土ブロック微量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子少量 | 12 鈍い黄褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子微量 |
| 6 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 13 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 7 鈍い黄褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 | 14 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片468点（埴10、高坏63、壺17、甕366、小型甕12）が、北部及び南東部の覆土下層や床面から散在する状態で出土している。53は、南壁際から横位で、54は南東コーナー部の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から、中期前半（5世紀前半）と考えられる。



第51図 第15号住居跡出土遺物実測図

第15号住居跡出土遺物観察表（第51図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
53	土師器	高坏	-	(8.3)	-	石英・長石・赤色粒子	明赤褐	普通	脚部外面ヘラケズリ接ヘラミガキ 内面指頭牙痕	南壁際床面	20%
54	土師器	甕	(12.5)	(11.1)	-	石英・長石・赤色粒子・粉粒	橙	普通	口縁部内面ヨコナデ 口縁部外面ヨコナデ 脚部外面ヘラケズリ接ヘラミガキ 内面ヘラケズリ	南東角床面	20%

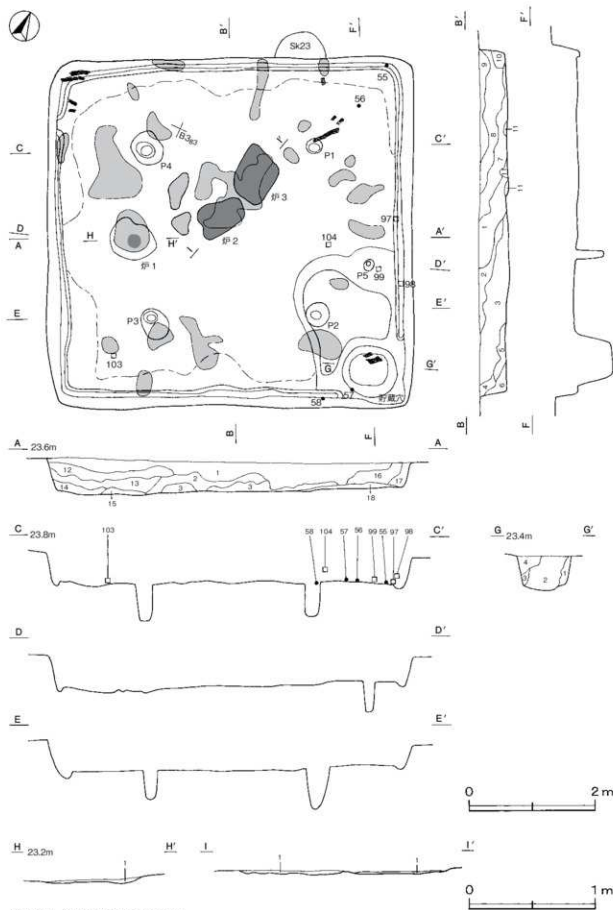
第16号住居跡（第52・53図）

位置 調査区北部のB 3g3区で、標高23.5mの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第23号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸5.80m、短軸5.60mの方形で、主軸方向はN-25°-Wである。壁は高さ40~60cmで、わずかに外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、全体がよく踏み固められており、壁溝が貯蔵穴付近を除いて全周している。貯蔵穴周辺を中心に10~15cmほどの馬蹄形状の高まりを持っている。床面全体から多量の焼土塊が出土し、北壁及び東壁付近の床面から炭化材（丸材 径5~8cm、板材 縦4cm、横2cm）が中央部に向かって放射状に並んで出土している。



第52图 第16号住居跡实测图

炉 3か所。炉1は西壁寄りに位置し、地床炉で床面を10cmほど掘りくぼめている。炉床は赤変硬化している。炉2は中央寄りに、炉3は中央部やや北寄りに位置しており、炉床の状態から作り替えのため床面として使用されていたと考えられる。住居廃絶時には、炉1のみが使用されていたと推測される。

炉1土層解説

1 赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子少量、炭化物微量

炉2土層解説

1 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ロームブロック少量、締まり強

炉3土層解説

1 暗赤褐色 焼土ブロック微量、締まり強

ピット 5か所。P1～P4は深さ45～64cmで、配置からみて主柱穴と考えられる。P5は炉と対峙し、壁際に位置していることから、出入り口施設に関連すると考えられる。

貯蔵穴 底面はほぼ平坦で、深さは58cmである。覆土は4層からなり、ロームブロックを少量含む黒褐色土を基調とし、土質及び堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

1 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化材微量

3 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量

2 黒褐色 炭化材少量、ロームブロック・焼土粒子微量

4 灰褐色 ロームブロック・炭化粒子少量

覆土 18層からなり、黒褐色土や暗褐色土がブロック状に堆積し、埋め戻された状況を示している。

土層解説

1 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

10 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量

2 褐色 ロームブロック中量

11 赤褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子中量

3 暗褐色 炭化粒子少量、ロームブロック微量

12 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

4 褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

13 褐色 ローム粒子多量

5 極暗褐色 炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子微量

14 褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

6 暗褐色 炭化粒子中量、ロームブロック微量

15 鈍い赤褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量

7 暗褐色 炭化粒子少量、ロームブロック微量

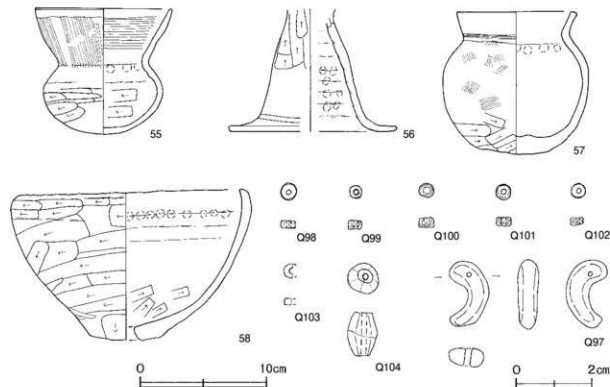
16 黒褐色 炭化粒子多量、ロームブロック・焼土粒子微量

8 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

17 極暗褐色 炭化粒子少量、ローム粒子微量

9 褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

18 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量



第53図 第16号住居跡出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片663点（増13、高环93、小型壺6、甕548、小型甕1、瓶2）、石製模造品10点（白玉8、勾玉1、甕玉1）、軽石2点が覆土下層及び床面から出土している。土師器片は、北壁及び東壁付近の覆土中層から床面にかけて、散在する状態で出土している。55は北東コーナー部の床面から逆位で、56は北東部の床面から横位で出土している。57は貯蔵穴脇の床面から横位で、58は南壁際から逆位で出土している。Q97～Q99は、東壁際の覆土中層から下層にかけて出土している。

所見 55、57、58は壁際からの転落の可能性が考えられる。また、床面の焼土塊や炭化材の状況から、焼失住居と推測される。さらに、Q97～Q99の出土状況から、住居焼失時に意図的に投げ込まれた可能性も考えられる。時期は、出土遺物から中期前葉（5世紀前葉）と考えられる。

第16号住居跡出土遺物観察表（第53図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
55	土師器	埴	108	102	-	石英・長石・砂粒	橙	普通	口縁部内外面ハケ目焼コナデ 体部外面ヘラケズリ 頸部内面指頭圧痕	北東角床面	90%
56	土師器	高环	-	(96)	[13]1	長石・雲母・赤色粘土・砂粒	橙	普通	頸部外面ヘラケズリ 内面輪積み痕・指頭圧痕	床面	40%
57	土師器	甕	94	114	-	石英・長石・雲母・赤色粘土	明赤陶	普通	口縁部コナデ 体部外面上部ハケ目下部ヘラケズリ 頸部内面指頭圧痕	貯蔵穴脇床面	85%
58	土師器	瓶	174	120	54	石英・長石・砂粒	橙	普通	体部外面ヘラケズリ後一部ヘラミダキ 口縁部内外面コナデ・指頭圧痕	南壁際床面	100% PL11

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 97	勾玉	1.80	1.10	0.50	1.22	滑石	孔径0.18 両面縦位 斜位の積層 両面穿孔	東壁際床面	PL20
Q 104	甕玉	1.12	0.82	-	1.14	滑石	孔径0.18 八面取り 縦位の積層 両面穿孔	覆土中層	PL20

番号	種別	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 98	白玉	0.40	0.13	0.20	0.06	滑石	側面はやや太鼓状 片面穿孔	東壁際床面	PL20
Q 99	白玉	0.28	0.13	0.17	0.04	滑石	側面は円筒状 片面穿孔	床面	PL20
Q 100	白玉	0.34	0.16	0.22	0.05	滑石	側面は円筒状 片面穿孔	覆土中	PL20
Q 101	白玉	0.37	0.14	0.19	0.06	滑石	側面はやや太鼓状 片面穿孔	覆土中	PL20
Q 102	白玉	0.38	0.14	0.18	0.06	滑石	側面はやや太鼓状 片面穿孔	覆土中	PL20
Q 103	白玉	0.31	0.14	0.11	(0.01)	滑石	側面はやや太鼓状 半分欠損	床面	PL20

第17号住居跡（第54図）

位置 調査区北部のA3j1区で、標高233mの台地の平坦部に位置している。

規模と形状 長軸2.85m、短軸2.70mの方形で、主軸方向はN-15°Wである。壁は高さ20～28cmでわずかに外傾して立ち上がっている。

床 平坦で全体がよく踏み固められており、特に中央付近は硬く締まっている。南東部の床面から多量の焼土塊が出土している。

炉 1か所。南壁寄りに位置し、地床が床面を10cmほど掘りこぼめている。炉床は赤変硬化している。

炉土層解説

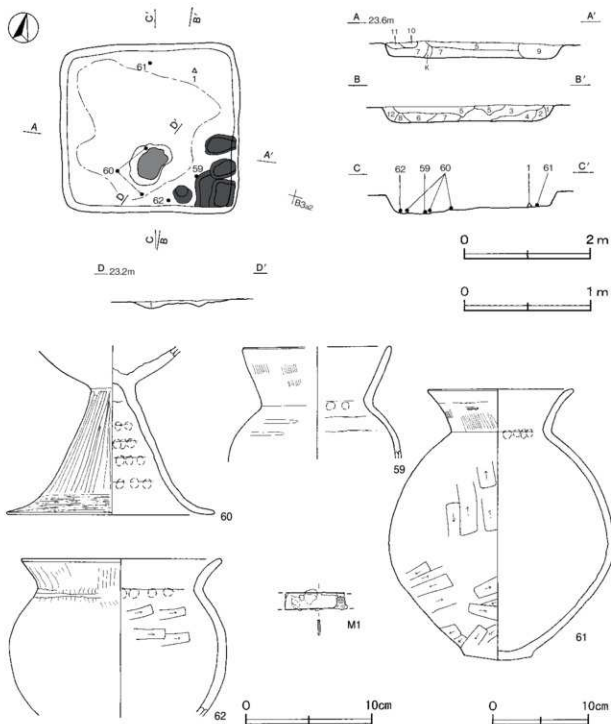
1 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量

覆土 12層からなり、黒褐色土や褐色土がブロック状に堆積し、埋め戻された状況を示している。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|--------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック微量 | 7 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 8 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量、粘性強 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量、締まり強 | 9 暗褐色 | 粘土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量 | 10 暗褐色 | ロームブロック微量 |
| 5 褐色 | ロームブロック微量 | 11 褐色 | ローム粒子中量 |
| 6 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量、粘性・締まり強 | 12 褐色 | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土師器片 625 点 (埴 24, 椀 12, 高坏 99, 甕 484, 壺 6), 鉄製品 1 点 (刀子), 多量の粘土塊が出土している。60 は埴周辺から逆位で, 59 は南東部床面の粘土塊脇から正位で, 61 は北部床面から正位で, M1 は北東部の床面からそれぞれ出土している。土師器片は, 住居全体の覆土下層から床面にかけて散在する



第54図 第17号住居跡・出土遺物実測図

状態で出土している。

所見 この時期においては住居の規模が際立って小さいこと、炉がしっかりと赤変硬化していること、多量の粘土塊が南東コーナー部にまとまった状態で出土していることなどから、何らかの工房跡の可能性が考えられる。時期は、出土土器から中期前葉（5世紀前葉）と考えられる。

第17号住居跡出土遺物観察表（第54図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
59	土師器	埴	[115]	(90)	-	石英・長石・砂粒	明赤陶	普通	口縁部外面ハケ目 内面ヨコナデ 底部外面ヘラミガキ 頸部内面指頭圧痕	床面	40%
60	土師器	高坏	-	(134)	165	石英・長石・砂粒	赤	普通	頸部外面ヘラミガキ 内面輪轆頭痕・指頭圧痕 スリ部内面ヨコナデ	炉周辺床面	50%
61	土師器	壺	[17.1]	32.4	7.9	石英・長石・赤色粒子	鈍い黄緑	普通	口縁部外面ハケ目 後ヨコナデ 底部外面ヘラミガキ 頸部内面指頭圧痕	北部床面	80% PL11
62	土師器	甕	15.8	(125)	-	石英・長石・砂粒	橙	普通	口縁部外面ハケ目 後ヨコナデ 底部外面上部ハケ目 頸部内面指頭圧痕	東壁際床面	50%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	不明鉄製品	(5.0)	1.3	0.2	(3.74)	鉄	刃身断面三角形 基部木貫付着 先端部・基部欠損 滑石の埋め輪縁分断法に用いられたと思われる	北東部床面	PL19

第18号住居跡（第55・56図）

位置 調査区北部のB2as区で、標高235mの台地の平坦部に位置している。

規模と形状 長軸6.60m、短軸6.40mの方形で、主軸方向はN-28°-Wである。壁は高さ30~40cmでわずかに外傾して立ち上がる。

床 平坦で、全体が踏み固められており、壁溝が全周している。貯蔵穴の周りを中心に、10cmほどの馬蹄形状の高まりを持っている。焼土塊が、壁付近を中心に覆土下層及び床面から出土している。炭化材は、炉1付近及び南北の壁際中央部付近からわずかに出土している。

炉 4か所。中央部から西壁に向かって一直線に並んで位置している。炉1は炉2を掘り込んでおり、炉4は炉3を掘り込んでいる。炉1以外は炉床面の凹凸がなく、平らに固められていることから、床面として使用され、住居廃絶時には炉1のみが使われていたと考える。すべて地床炉で、床面を5~10cmほど皿状に掘りくぼめている。炉床は赤変硬化している。

炉1土層解説

1 暗赤褐色 焼土ブロック・ローム粒子微量

炉2土層解説

1 鈍い赤褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック微量、締まり強

炉3土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量、締まり強

炉4土層解説

1 赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量、締まり強

ピット 6か所。P1~P4は深さ18~23cmで、配置から主柱穴、P5、P6は補助柱穴と考えられる。

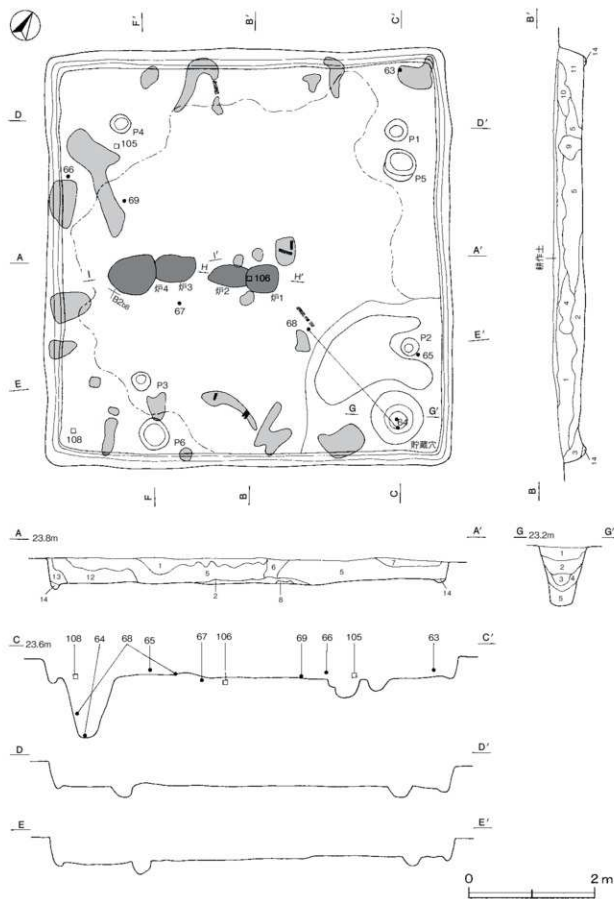
貯蔵穴 底面はほぼ平坦で、深さは100cmである。覆土は5層からなり、堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

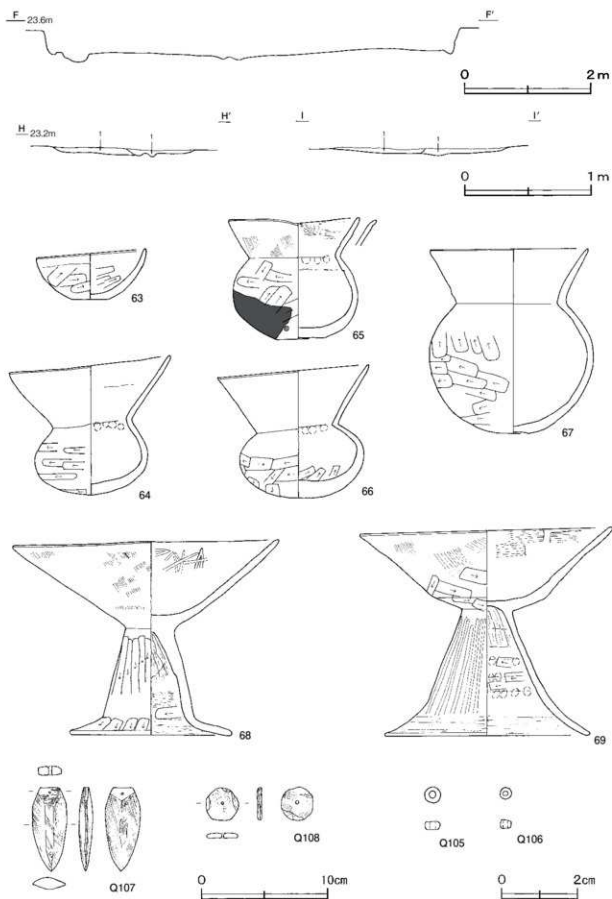
1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 4 褐色 ロームブロック少量、炭化材微量

2 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量 5 褐色 炭化物少量、ロームブロック微量

3 黒褐色 炭化物中量、ローム粒子少量



第55图 第18号住居跡実測図



第56图 第18号住居跡・出土遺物実測図

覆土 14層からなる。堆積状況から、第11、13、14層は自然堆積で、その後に埋め戻されたと考えられる。

土層解説

1	褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	8	赤褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量
2	暗褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	9	褐色	ロームブロック・炭化粒子微量
3	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	10	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
4	明褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量	11	暗褐色	炭化粒子少量、ロームブロック微量
5	褐色	ロームブロック・炭化材微量	12	暗褐色	ローム粒子・炭化材微量
6	暗褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	13	黒褐色	炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量
7	褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	14	暗褐色	ロームブロック少量

遺物出土状況 土師器片2262点（増183、碗2、高坏701、小型鉢1、甕1354、小型甕21）、石製模造品4点（白玉2、剣形品1、有孔円板1）、砥石1点、軽石1点が出土している。土師器片は、覆土中層から床面にかけて全体的に散在する状態で出土している。63は覆土下層の焼土塊から正位で、64は貯蔵穴の底部から正位で、65、66は床面から正位で、68は貯蔵穴の覆土中層から横位で出土している。Q105、Q106、Q108はそれぞれ床面から出土している。

所見 床面からの焼土塊や炭化材の出土状況から、焼失住居と考えられる。時期は、出土遺物から、中期前葉（5世紀前葉）と考えられる。

第18号住居跡出土遺物観察表（第56図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
63	土師器	碗	8.6	4.0	2.8	右赤・長石・赤色粒子・砂粒	橙	普通	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ	覆土下層	95%
64	土師器	埴	12.7	11.0	-	長石・赤色粒子	黄橙	普通	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 頸部内面指頭圧痕	貯蔵穴底面	95% PL12
65	土師器	埴	10.3	9.6	3.8	右赤・長石・砂粒	橙	普通	口縁部外面ハケ目後ヨコナデ 内面ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 頸部内面指頭圧痕 口縁部の一部反する片目	覆土下層	100% PL12
66	土師器	埴	12.0	10.6	-	右赤・長石・赤色粒子・砂粒	橙	普通	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 頸部内面指頭圧痕	覆土下層	90%
67	土師器	埴	12.4	14.6	2.3	右赤・長石・赤色粒子	黄橙	普通	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ	床面	75%
68	土師器	高坏	21.1	13.5	12.6	右赤・長石・赤色粒子	橙	普通	頸部外面ハケ目 内面ヘラミガキ 頸部外面ヘラケズリ後ヘラミガキ 頸部内面指頭によるナデ・ヘラケズリ・ヨコナデ	貯蔵穴中層・床面	95% PL12
69	土師器	高坏	20.0	16.5	16.3	右赤・長石・赤色粒子・砂粒	橙	普通	頸部外面ヘラケズリ後ハケ目 口縁部内外面ヨコナデ 頸部外面ヘラミガキ 内面指頭によるナデ後ヘラケズリ・指頭圧痕 スノボヨコナデ	床面	95%

番号	種別	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q105	白玉	0.40	0.15	0.21	0.03	滑石	側面は太鼓状 片面穿孔	床面	PL20
Q106	白玉	0.31	0.13	0.25	0.03	滑石	側面はやや太鼓状 片面穿孔	床面	PL20
Q108	有孔円板	2.60	0.18	0.35	4.20	滑石	表面縦位の研磨 裏面斜位の研磨 両面穿孔	床面	PL20

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q107	剣形品	6.7	2.8	1.0	22.8	滑石	表面両面とも丁寧な研磨 切先より錐が通る 裏部に2か所穿孔のうち1か所は未貫通 孔径0.12	覆土中	PL20

第19号住居跡（第57・58図）

位置 調査区北部のB 2 d9区で、標高23.4mの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第22号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 一辺7.20mの方形で、主軸方向はN-27°-Wである。壁は高さ35~45cmで外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、全体が踏み固められており、壁溝が全周している。貯蔵穴1の周りを中心に、10~15cmほどの馬蹄形状の高まりを持っている。また、貯蔵穴2の周り及び、北西部にも高まりが確認されている。南西部を除

く床面及び覆土下層から、多量の焼土塊や炭化材が出土している。焼土塊は、壁際及び炉の周辺に集中している。炭化材は、幅4～10cmほどの角材及び丸材で、中央部に向かってほぼ放射状に並んで出土している。

炉 5か所。炉1はP4と西壁との間に位置し、地床炉で床面を5cmほど皿状に掘りくぼめている。炉床は赤変硬化している。炉2～炉4は中央部に位置し、地床炉で床面をわずかに掘りくぼめている。炉床は赤変硬化している。炉5は西壁寄りに位置し、地床炉で床面を10cmほど皿状に掘りくぼめ、炉床は赤変硬化している。

炉1土層解説

1 明赤褐色 焼土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量

炉2土層解説

1 赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子少量

炉3土層解説

1 明赤褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック少量

炉4土層解説

1 明赤褐色 ローム粒子・焼土粒子中量

炉5土層解説

1 赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子少量、ローム粒子微量

ピット 5か所。P1～P4は深さ24～64cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ43cmで、炉と対峙する位置にあり、壁側に向かって外傾していることから、出入り口施設に関連するものと考えられる。

貯蔵穴 2か所。貯蔵穴1は、底面がほぼ平坦で深さ95cmである。覆土は4層からなり、不規則な堆積状況を示していることから人為堆積と考えられる。貯蔵穴2は、底面がほぼ平坦で深さ60cmである。覆土は3層からなり、不規則な堆積状況を示していることから人為堆積と考えられる。

貯蔵穴1土層解説

1 褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

3 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

4 褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

貯蔵穴2土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

3 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量

2 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

覆土 10層からなり、不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

1 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

6 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

2 暗褐色 炭化粒子少量、ローム粒子微量

7 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量

3 褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

8 黒褐色 炭化粒子多量、ローム粒子微量

4 褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

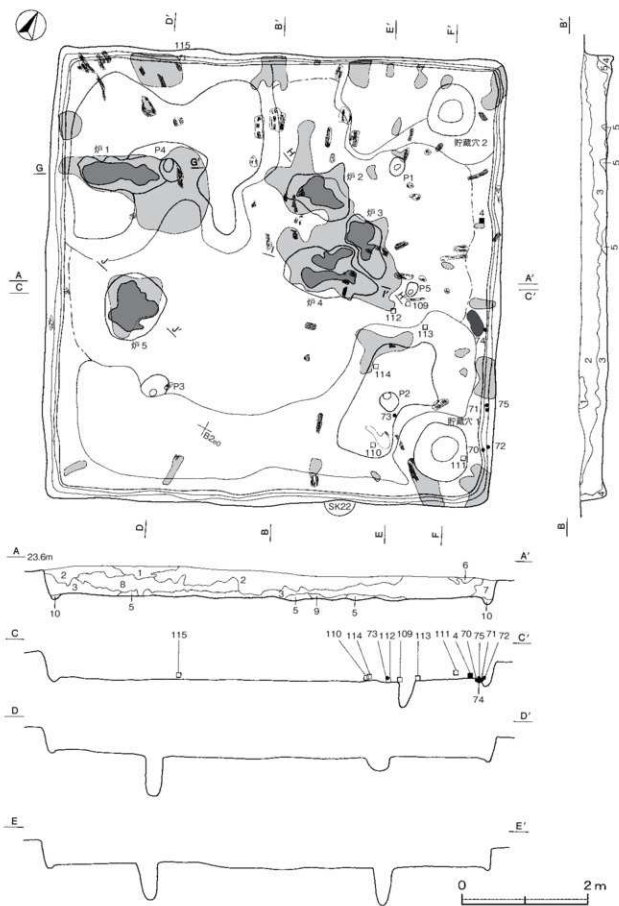
9 褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量

5 赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子微量

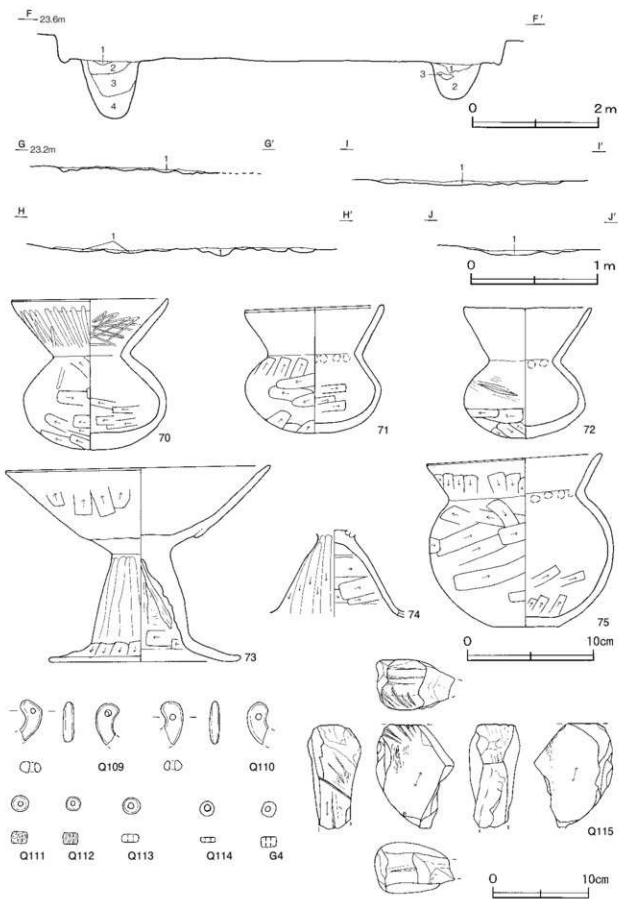
10 に近い褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片2006点（坏2、増136、高坏695、堿1160、小型堿10、瓶3）、石製模造品5点（白玉3、勾玉2）、ガラス製品1点（小玉）、砥石1点。東壁際から粘土塊が出土している。70～72、75は、東壁際の床面及び覆土下層部から横位で出土しており、廃絶時に壁の上から転落したものと推測される。Q109～Q111、Q113、Q114及びG4は、東部の床面及び覆土下層部から出土している。Q115は、北壁直下の床面から出土している。

所見 床面の焼土塊や炭化材の出土状況から、焼失住居と考えられる。Q115の擦痕から、刀子等の金属器の研磨に用いられたものと考えられる。また、Q109～Q114は散在して出土していることから、廃絶時に投げ込まれた可能性が考えられる。時期は、出土遺物から中期前葉（5世紀前葉）と考えられる。



第57图 第19号住居跡实测图



第58图 第19号住居跡・出土遺物実測図

第19号住居跡出土遺物観察表（第58図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
70	土師器	埴	124	120	-	石英・長石・赤色粒子・砂粒	橙	普通	口縁部外面ヘラミゴキ 体部外面ヘラケズリ 後一部ヘラミゴキ	東壁際床面	95% PL13
71	土師器	埴	108	103	-	石英・長石・赤色粒子・砂粒	鈍い黄橙	普通	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ	東壁際床面	95% PL13
72	土師器	埴	101	103	-	長石・雲母・砂粒	橙	普通	口縁部内面ヨコナデ 体部外面下部ヘラケズリ 底右転用痕（石製品研磨痕） 頸部内面指頭圧痕	東壁際床面	90% PL13
73	土師器	高坏	209	155	153	石英・長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	環部外面ヘラケズリ 内面指頭施れのため調整不明 頸部外面ヘラケズリ 内面指頭によるナデヘラケズリ	床面	85%
74	土師器	高坏	-	(70)	-	長石・赤色粒子・砂粒	橙	普通	頸部外面ヘラケズリ 内面輪積み痕・ヘラケズリ	東壁際床面	30%
75	土師器	壺	138	137	50	長石・雲母・砂粒	橙	普通	口縁部外面ヘラケズリ後ヨコナデ 内面ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 頸部内面指頭圧痕	東壁際床面	95%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
Q109	勾玉	(0.90)	0.55	0.30	(0.25)	滑石	孔径0.17 両面縦位 斜位の研磨 両面穿孔	床面	PL20
Q110	勾玉	(1.00)	0.60	0.25	(0.27)	滑石	孔径0.14 両面縦位の研磨 両面穿孔	床面	PL20

番号	種別	径	孔径	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
Q111	白玉	0.45	0.14	0.29	0.10	滑石	側面はやや太鼓状 片面穿孔	貯蔵穴上層	PL20
Q112	白玉	0.40	0.13	0.30	0.07	滑石	側面はやや太鼓状 片面穿孔	床面	PL20
Q113	白玉	0.44	0.20	0.21	0.08	滑石	側面はやや太鼓状 片面穿孔	床面	PL20
Q114	白玉	0.39	0.20	0.10	0.04	滑石	側面は円筒状 片面穿孔	床面	PL20

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
Q115	砥石	(11.1)	(8.4)	5.4	(527.0)	凝灰岩	擦切施溝分割に用いられる金属器を研磨したと思われるV字状の擦痕 6面使用	北壁際床面	PL17

番号	種別	径	孔径	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
G 4	小玉	0.40	0.15	0.25	0.08	ガラス	側面は円筒状 両面穿孔	覆土下層	PL20

第20号住居跡（第59～62図）

位置 調査区東部のB 4 ja区で、標高23.5mの台地の平坦部に位置している。

規模と形状 一辺7.20mの方形で、主軸方向はN-60°-Wである。壁は高さ37～40cmで外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、貯蔵穴及び炉の周辺が踏み固められており、壁溝が全周している。北部及び南東部の壁際から、炭化材や焼土塊が出土している。炭化材は、角材（縦2～4cm、横6～10cm）や丸材（径5～10cm）で、中央部に向かってほぼ放射状に並んで出土している。

炉 2か所。中央より西壁寄りに位置している。それぞれ地床炉で、床面を10cmほど皿状に掘りくぼめており、炉床は赤変硬化している。

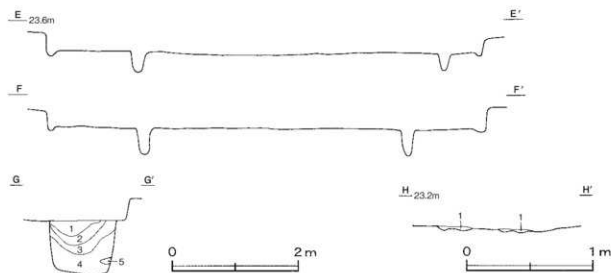
炉1土層解説

1 暗赤褐色 炭化材中量、焼土ブロック・ローム粒子微量

炉2土層解説

1 鈍い赤褐色 ローム粒子中量、焼土ブロック・炭化粒子微量

ピット 7か所。P 1～P 4は深さ38～44cmで、配置から柱穴と考えられる。P 5は深さ38cmで、貯蔵穴との位置関係、硬化面の状況から出入り口施設に関連するものと考えられる。P 6、P 7は補助柱穴と考えられる。



第60図 第20号住居跡実測図(2)

貯蔵穴 形状は方形を呈しており、底面は平坦で深さ85cmである。覆土は5層からなり、レンズ状の堆積状況を示していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|---------------------|-------------------------|
| 1 黒褐色 焼土ブロック微量 | 4 黒暗褐色 ローム粒子・炭化物微量 |
| 2 暗褐色 ロームブロック・炭化物微量 | 5 明灰色 炭化粒子微量、粘土塊、粘性・締り強 |
| 3 黒褐色 ロームブロック・炭化物微量 | |

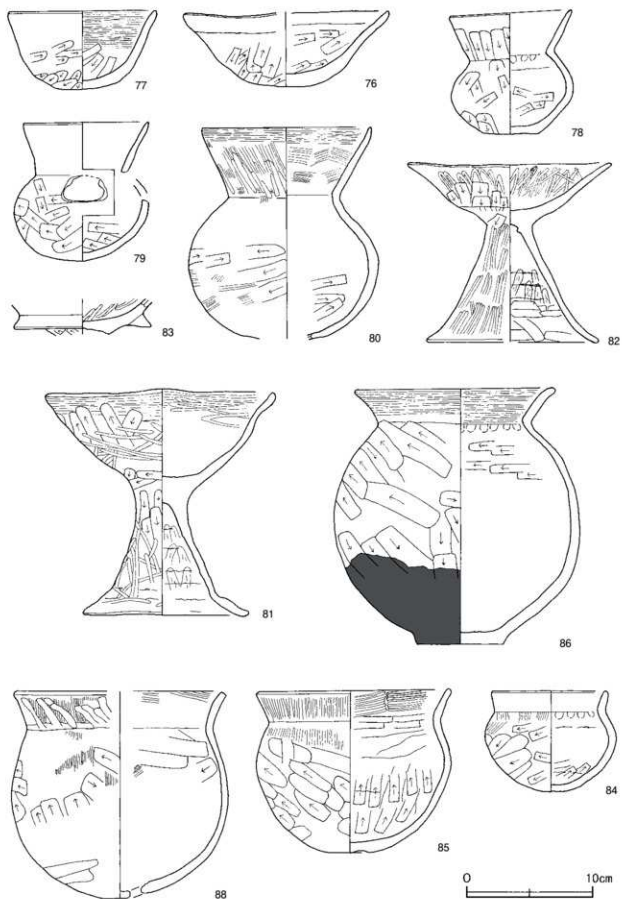
覆土 16層からなり、土質や堆積状況から、自然堆積の後人為堆積と考えられる。

土層解説

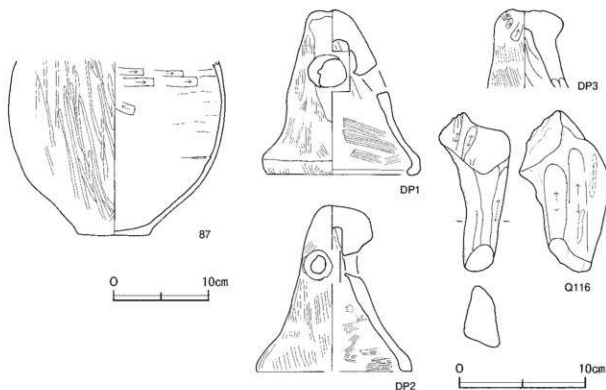
- | | |
|------------------------------|-----------------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物微量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量、締まり強 | 10 鈍い黄褐色 炭化粒子少量 |
| 3 黒褐色 ロームブロック微量 | 11 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 ロームブロック少量 | 12 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 5 黒褐色 ロームブロック・炭化物微量 | 13 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量、粘性弱 |
| 6 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 14 暗褐色 ロームブロック・炭化物微量 |
| 7 鈍い黄褐色 ロームブロック少量、炭化物微量 | 15 暗褐色 ロームブロック微量 |
| 8 灰褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化材微量 | 16 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片1149点(埵2, 碗12, 埴176, 高坏474, 鉢7, 甕464, 壺14), 土製品28点(支脚片), 砥石1点が出土している。土師器片は、南西部のコーナー付近、炉及び貯蔵穴とその周辺を中心として、覆土下層から床面にかけて散在する状態で出土している。79は南西壁直下の壁溝上から正位で出土しており、体部には穿孔が施され、蓋の模倣と見られる。81は南西壁直下の床面から、坏部を壁側に向けた横位で出土している。貯蔵穴周辺では、88が85の上に重なる状態で出土している。また、85の底部から貝殻を砕いた破片がまとまって出土している。88は、甕として焼成したものに、後から底部に1cmほどの穿孔を施したもので、85とともに貯蔵穴隣の床面から出土している。また、貯蔵穴の覆土中層から82, 86が横位でそれぞれ出土している。DP1, DP2は埴1の上面から、DP3は西壁直下の覆土下層から出土している。貯蔵穴隣の床面及び貯蔵穴の底部から粘土塊が出土している。

所見 83は、第9号住居跡の37, 第22号住居跡の94と同様、坏部下に突起を持つ北陸系の流れをくむものと思われる。時期は、床面出土の土器から中期前半(5世紀前半)と考えられる。なお、床面から出土した焼土塊や炭化材から、焼失住居と考えられる。



第61图 第20号住居跡出土遺物実測図(1)



第62図 第20号住居跡出土遺物実測図(2)

第20号住居跡出土遺物観察表 (第61・62図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
76	土師器	坏	[16.2]	5.9	-	石英・雲母・赤色粒子・砂粒	橙	普通	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ上~中部僅存着	床面	60% PL15
77	土師器	坏	11.7	6.2	-	石英・雲母・砂粒	橙	普通	口縁部外面ヨコナデ 体部外面下部ヘラケズリ	床面	50% PL15
78	土師器	埴	9.6	9.8	4.2	長石・砂粒	明赤陶	普通	口縁部外面ヘラケズリ後ヨコナデ 内面ヨコナデ 内面ヨコナデヘラミガキ 体部外面ヘラケズリ	床面	95%
79	土師器	埴	9.8	10.9	-	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部上部に焼成後の穿孔あり 内の縦線あり	南西壁直下	90% PL14
80	土師器	埴	13.2	(16.7)	-	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面ハケ目後ヘラミガキ・ヨコナデ 内面ヨコナデヘラミガキ 体部外面ヘラケズリ後ハケ目	南西部床面	60%
81	土師器	高坏	18.4	17.6	13.0	石英・長石・砂粒	明赤陶	普通	坏部外面ヘラケズリ後ヨコナデ 内面ハケ目後ヘラミガキ 頸部外面ヘラケズリ 内面指掘によるナデスツ部ヨコナデ	南西壁直下	95%
82	土師器	高坏	15.9	14.3	[13.5]	長石・雲母・赤色粒子・砂粒	橙	普通	坏部外面ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面放射状のヘラミガキ 底足残 頸部外面ヘラミガキ 内面指掘によるナデヘラケズリ	貯蔵穴中層	80% PL15
83	土師器	高坏	-	(28)	-	石英・長石・砂粒・小礫	橙	普通	坏部下部に北條系の産れをくむ大型の礫 坏部下部外面ヘラケズリ後ヨコナデ 内面ヘラミガキ	南壁脚床面	10%
84	土師器	小型壺	9.0	8.0	-	石英・長石・赤色粒子・砂粒	橙	普通	口縁部内外面ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ハケ目 内面ヘラケズリ 頸部内面指掘仕立	礎土中	100% PL15
85	土師器	壺	15.0	13.1	3.4	長石・砂粒	橙	普通	口縁部外面縦方向のハケ目 内面縦方向のヘラケズリ後ヘラミガキ 体部外面上部ハケ目・方唇ヘラケズリ 内面輪郭のみ・縦方向ヘラケズリ	北東部床面	100%
86	土師器	壺	15.5	20.4	6.7	石英・長石・雲母・赤色粒子	鈍い黄橙	普通	口縁部外面ハケ目後ヨコナデ 内面ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 上部から中部僅存着 体部内面ヘラケズリ 頸部内面指掘仕立	貯蔵穴中層	100% PL15
87	土師器	壺	-	(20.6)	8.2	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	体部外面ヘラミガキ 内面ヘラケズリ	床面	20%
88	土師器	壺	[16.2]	16.4	-	石英・雲母・赤色粒子・砂粒	橙	普通	口縁部外面ハケ目後ヘラミガキ 内面ハケ目 体部外面ヘラケズリ後ハケ目 内面ヘラケズリ 底部に焼成後の穿孔。 頸への縦線	北東部床面	95%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q116	砥石	12.8	7.2	4.9	342.0	砂岩	右製品研習と思われるU字型柳根の筋砥石面と平砥石面を持つ3面使用	北壁脚床面	PL17

番号	種別	器種	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
DP1	土師器	支脚	130	125	石英・長石・赤色粒子・砂粒	橙	普通	内外面ハケ目 頸部ナテ一部割離	伊1上面	90% PL15
DP2	土師器	支脚	132	[125]	長石・雲母・赤色粒子・砂粒	橙	普通	内外面ハケ目 頸部ナテ一部割離	伊1上面	75% PL15
DP3	土師器	支脚	(130)	[125]	石英・長石・砂粒	明赤褐	普通	外面ハケ目 頸部外面ヘラケズリ	北西壁直下	30% PL15

第21号住居跡（第63図）

位置 調査区中央部のD 2 a7区で、標高23.4mの台地の平坦部に位置している。

確認状況 遺構の南部が調査区域外となっている。

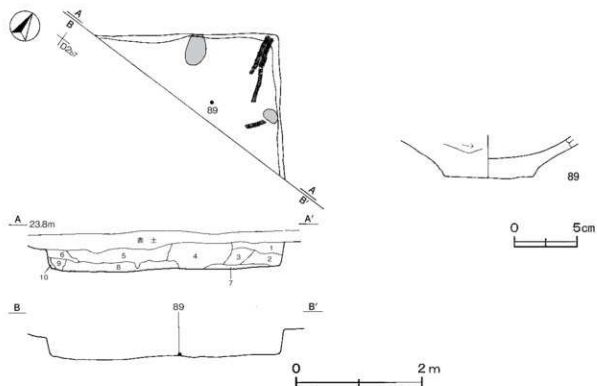
規模と形状 一辺2.8m以上の方形または長方形を呈していたと推測される。壁は高さ15～22cmでわずかに外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦であり、全体として軟弱である。床面から焼土塊や炭化材が出土している。炭化材は、幅5～10cmほどの丸材または角材で、住居の中央部と見られる方向に向けて出土している。

覆土 10層からなり、黒褐色土や暗褐色土がブロック状に堆積し、埋め戻された状況を示している。

土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------|---------|-----------------------|
| 1 黒褐色土 | ロームブロック微量 | 6 極暗褐色土 | ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色土 | ロームブロック少量・焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 暗褐色土 | ロームブロック少量・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色土 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 8 暗褐色土 | ロームブロック少量 |
| 4 黒褐色土 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 9 黒褐色土 | ロームブロック・炭化粒子微量・綿まり筋 |
| 5 黒褐色土 | ロームブロック少量 | 10 暗褐色土 | ローム粒子・焼土粒子微量 |



第63図 第21号住居跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片22点（高坏1、甕21）が出土している。89は床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期（5世紀）と考えられる。なお、床面から出土した焼土塊や炭化材から、焼失住居と考えられる。

第21号住居跡出土遺物観察表（第63図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
89	土師器	甕	-	(3.4)	7.0	石英・長石・赤色粒子・砂粒	橙	普通	器面荒れのため調整不明	床面	5%

第22号住居跡（第64～66図）

位置 調査区東部のB 4j区で、標高23.4mの台地の平坦部に位置している。

規模と形状 長軸8.2m、短軸5.5mの長方形で、主軸方向はN-20°-Wである。壁は高さ40～50cmで外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、貯蔵穴及び炉の周辺が硬化している。貯蔵穴の周りに10cmほどの馬蹄形状の高まりを持っている。壁溝が全周している。東壁際及び北東コーナーの床面及び覆土下層から、炭化材や焼土塊が出土している。

炉 2か所。中央より北壁寄りに位置している。それぞれ地床炉で、床面を10cmほど皿状に掘りくぼめ、炉床は赤変硬化している。

炉1土層解説

1 灰褐色 焼土ブロック少量、粘土ブロック・ローム粒子・炭化物微量

炉2土層解説

1 暗赤褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子・炭化物微量

ピット 6か所。P1～P4は深さ17～42cmで、配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ16cmで、炉と対峙し、壁際に位置していることから、出入り口施設に関連すると考えられる。P6は補助柱穴と推測される。

貯蔵穴 1か所。底面はほぼ平坦で、深さ70cmである。覆土は4層からなり、土質及びレンズ状の堆積状況から自然堆積と考えられる。

貯蔵穴土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量

3 灰褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

4 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

覆土 4層からなる。全体として焼土粒子や炭化粒子、ロームブロックをわずかに含む黒褐色土や暗褐色土で、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

土層解説

1 黒色 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量

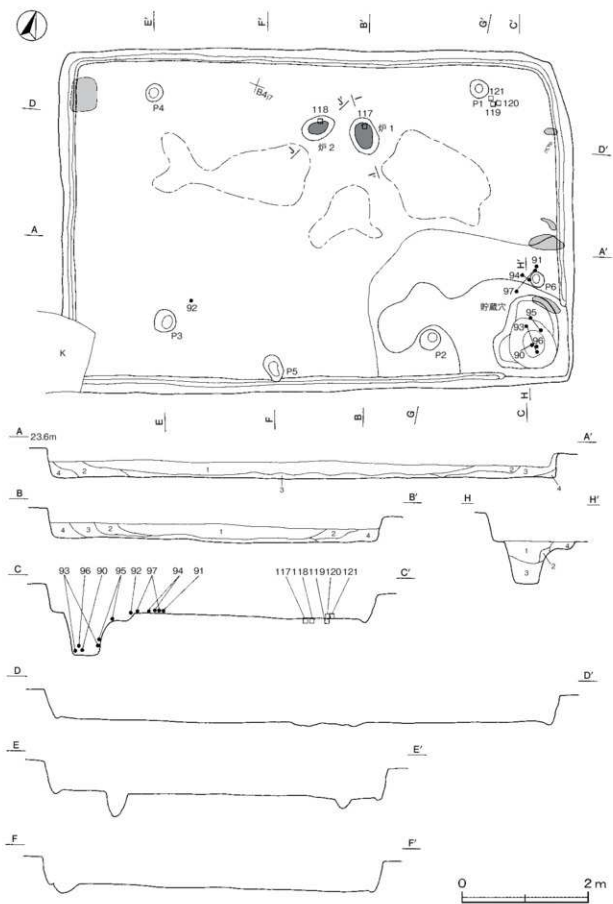
3 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子微量

2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

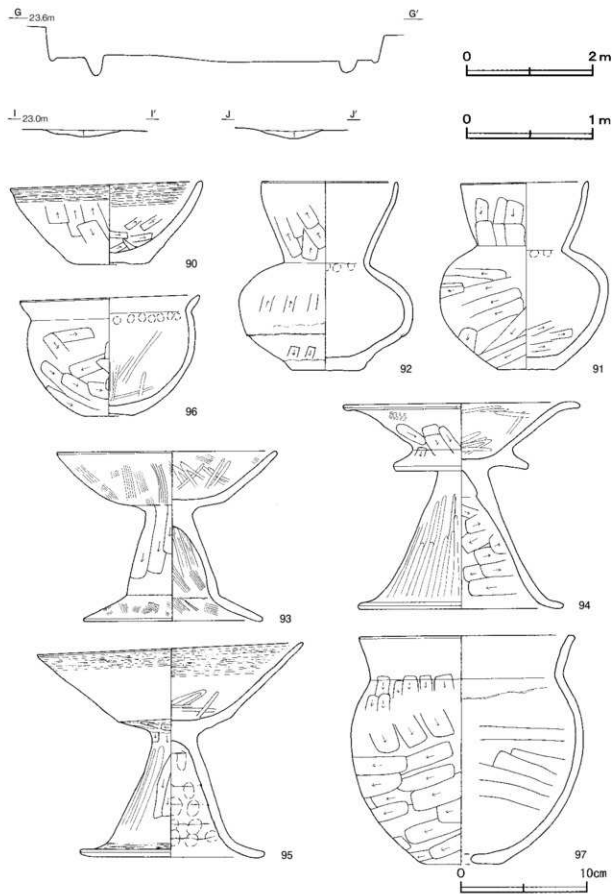
4 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片303点（埴66、高坏126、甕類55、甕2、甗54）、石製模造品5点（白玉2、剣形品3）が出土している。91、94、97は、P6の周りの床面からまとまって出土している。97は、甕として焼成したものに、後から底部に1cmほどの穿孔を施したものである。90、93、95、96は貯蔵穴の覆土下層から底面にかけて出土している。P1の脇からQ119～Q121が重なった状態で出土している。また、Q117は炉1、Q118は炉2から出土している。

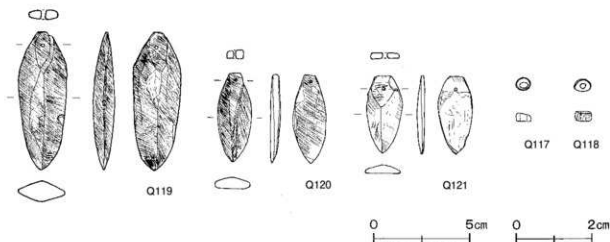
所見 94は、坏部の下に突起を持つ形状で、北陸系の流れをくむものと考えられる。焼土塊や炭化材の出土状況から、焼失住居と思われる。時期は、出土土器から中期前葉（5世紀初頭～前葉）と考えられる。



第64图 第22号住居跡実測图



第65图 第22号住居跡・出土遺物実測図



第66図 第22号住居跡出土遺物実測図

第22号住居跡出土遺物観察表 (第65・66図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
90	土師器	鉢	15.2	6.6	6.4	石英・長石・赤色粒子・砂粒	鈍い橙	普通	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ヘラケズリ	貯蔵穴下層	90% PL17
91	土師器	埴	10.1	15.0	4.7	石英・長石・砂粒	鈍い黄橙	普通	口縁部外面ヘラケズリ後ヨコナデ 内面ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 頸部内面指頭圧痕	床面	90% PL17
92	土師器	埴	10.8	15.0	5.4	石英・長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面ヘラケズリ後ヨコナデ 内面ヨコナデ 頸部内面指頭圧痕	床面	90% PL17
93	土師器	高坏	17.4	13.4	14.2	石英・長石・赤色粒子・雲母	橙	普通	坏部外面ハケ目 内面ハケ目後ヘラミガキ 口縁部内外面ヘラケズリ 内面指頭によるナデ・ハケ目 スリ部内外面ハケ目	貯蔵穴下層	95% PL17
94	土師器	高坏	19.0	16.3	16.0	石英・長石・赤色粒子・砂粒	明黄橙	普通	坏部外面ヘラケズリ 内面ヘラミガキ 口縁部内外面ヨコナデ 頸部外面ヘラミガキ 内面ヘラケズリ 坏部下層に北陸系の流れをくわ大型の塊を持つ	床面	90% PL17
95	土師器	高坏	21.1	17.1	14.6	石英・長石・赤色粒子・砂粒	橙	普通	口縁部内外面ヘラミガキ 口縁部内外面ヨコナデ 頸部外面ヘラケズリ 内面ヘラミガキ 頸部内面指頭圧痕	貯蔵穴中層	90% PL17
96	土師器	碗	14.2	9.6	3.6	石英・長石・砂粒	橙	普通	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 内面ヘラミガキ 頸部内面指頭圧痕	貯蔵穴下層	95% PL17
97	土師器	甌	16.4	18.1	6.2	石英・長石・赤色粒子・砂粒	明赤陶	普通	口縁部内外面ヨコナデ 体部内外面ヘラケズリ 焼成後底部に穿孔	床面	80%

番号	種別	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q117	白玉	0.40	0.20	0.22	0.05	滑石	側面は円筒状 片面穿孔	如1	PL20
Q118	白玉	0.45	0.20	0.25	0.05	滑石	側面は円筒状 片面穿孔	如2	PL20

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q119	銅形品	7.3	2.5	1.1	21.6	滑石	表裏両面とも丁寧な研磨 表裏とも切先より錐が通る 基部に穿孔 Q120 Q121と重なり合う状態で出土	床面	PL16-20
Q120	銅形品	4.7	1.8	0.53	6.2	滑石	表裏両面とも丁寧な研磨 表面に切先より錐が通る 基部に穿孔	床面	PL16-20
Q121	銅形品	4.1	0.85	0.38	3.5	滑石	表裏両面とも丁寧な研磨 表面に切先より錐が通る 基部に穿孔一部欠損	床面	PL16-20

表4 古墳時代住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設			覆土	主な出土遺物	備考 (時期・旧→新)	
								竪穴	竪石	竪穴				
1	D 3 e4	N-15°-W	長方形	4.40×3.80	16~20	平	—	4	—	4	—	2	人為 土師器 (埴, 高坏, 甌)	5世紀前半
2	E 3 a2	N-7°-E	方形	4.80×4.40	0~3	平	—	4	1	2	—	1	不明 土師器 (高坏, 甌)	5世紀前半
3	D 3 a5	N-5°-W	長方形	4.35×3.30	10~20	平	—	—	—	2	1	1	人為 土師器 (埴, 高坏, 甌, 甕)	5世紀前半
4	B 3 c5	N-25°-W	長方形	5.90×4.80	5~15	平	全周	3	—	6	1	2	自然 土師器 (埴, 高坏, 甌) 石製構造 ↓ 人為 銅形品 (白玉, 勾玉) ガラス 人為 製品 (小玉) 石器 (磨石, 砥石)	5世紀前半

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 (m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面 傾斜	内 部 構 造					覆土	主な出土遺物	発見 時期・目 →頁		
							土 間 敷	土 間 壁	土 間 壁	土 間 壁	土 間 壁					
5	A 2e2	N-18°-W	方形	7.00×7.00	5~20	平坦	全周	4	1	10	1	5	人	土師器 (埴、高坏、壺、甕) 石製模造品 (白土、粘土) ガラス製品 (小玉) 石器 (磨石)	5世紀前半	
6	A 2g1	N-27°-W	[方形]	[8.00]×[8.00]	7~28	平坦	全周	3	-	4	1	2	人	土師器 (埴、高坏、壺) 石製模造品 (白土、有孔円板) 滑石調片	5世紀前半	
7	B 3d0	N-25°-W	方形	6.20×5.90	0~8	平坦	一部	4	-	4	1	1	人	土師器 (埴、高坏、壺)	5世紀前半	
8	A 3d8	N-30°-W	長方形	5.20×4.00	8~30	平坦	全周	4	1	2	1	1	自然 人	土師器 (埴、高坏、壺、甕、瓶) 石製模造品 (粘土)	5世紀前半	
9	B 3f9	N-40°-W	方形	6.50×6.60	16~26	平坦	全周	4	1	-	1	1	人	土師器 (埴、高坏、壺、甕)	5世紀前半	
10	B 3c7	N-10°-W	長方形	7.00×5.40	20~25	平坦	全周	4	1	1	-	1	人	土師器 (埴、高坏、壺、甕) 石器 (砥石)	5世紀前半	
11	B 3f9	N-52°-W	方形	7.50×7.40	15~25	平坦	全周	3	-	-	-	1	人	土師器 (埴、高坏、壺、甕)	5世紀前半	
12	B 4g1	N-50°-W	方形	5.00×4.90	10~14	平坦	一部	1	1	-	1	1	人	土師器 (埴、高坏、壺、甕) 石器 (砥石)	5世紀前半	
13	B 4c2	N-30°-W	[方形]	[6.40]×[6.40]	40~50	平坦	全周	2	1	-	1	-	人	土師器 (埴、高坏、壺、甕、瓶) ミニチュア土器 石器 (砥石)	5世紀前半	
14	A 3d7	不明	不明	不明	不明	平坦	不明	-	-	-	-	-	不明	土師器 (甕)	4~5世紀	
15	B 4f3	N-30°-W	方形	6.50×6.20	10~20	平坦	ほぼ全周	1	-	-	-	2	人	土師器 (埴、高坏、壺、甕)	5世紀前半	
16	B 3g3	N-25°-W	方形	5.80×5.60	40~60	平坦	全周	4	1	-	1	3	人	土師器 (埴、高坏、壺、甕、瓶) 石製模造品 (白土、勾玉) ガラス製品 (小玉)	5世紀前半	
17	A 3j1	N-15°-W	方形	2.85×2.70	20~28	平坦	-	-	-	-	-	1	人	土師器 (埴、高坏、壺、甕) 鉄製品 (刀子) 粘土塊	5世紀前半	
18	B 2d8	N-28°-W	方形	6.60×6.40	30~40	平坦	全周	4	-	2	1	4	自然 人	土師器 (埴、高坏、壺、甕、瓶) 石製模造品 (白土、銅形品、有孔円板) 石器 (砥石)	5世紀前半	
19	B 2d9	N-27°-W	方形	7.20×7.20	35~45	平坦	全周	4	1	-	2	5	人	土師器 (埴、高坏、壺、甕、瓶) 石製模造品 (白土、勾玉) ガラス製品 (小玉) 石器 (砥石)	5世紀前半	
20	B 4j3	N-60°-W	方形	7.20×7.20	37~40	平坦	全周	4	1	2	1	2	自然 人	土師器 (埴、高坏、壺、甕) 土製品 (支脚) 石器 (砥石) 貝殻片	5世紀前半	
21	D 2a7	-	-	(2.80)×(2.30)	15~22	平坦	-	-	-	-	-	-	-	人	土師器 (高坏、壺)	5世紀前半
22	B 4j7	N-20°-W	長方形	8.20×5.50	40~50	平坦	全周	4	1	1	1	2	自然	土師器 (埴、高坏、壺、甕、瓶) 石製模造品 (白土、銅形品)	5世紀前半	

(2) 土坑

第1号土坑 (第67図)

位置 調査区南部のD 3a6区で、標高23.9mの台地の平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.95m、短径1.10mの不整楕円形を呈し、長径方向はN-20°-Wである。深さは28cmで、壁は内傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

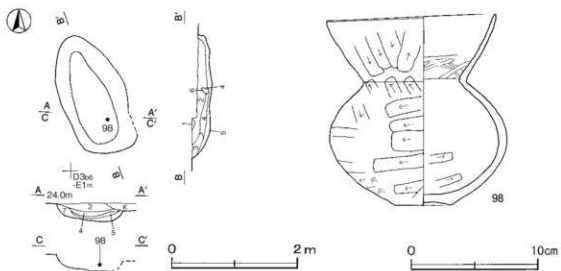
覆土 7層からなり、黒褐色土や暗褐色土がブロック状に堆積し、埋め戻された状況を示している。

土層解説

1	黒褐色	炭化物少量、ローム粒子微量	5	暗褐色	ロームブロック微量、粘性強
2	黒褐色	ローム粒子少量	6	黒色	ローム粒子微量、粘まり弱
3	暗褐色	ロームブロック微量	7	暗褐色	ロームブロック微量、粘性強
4	黒褐色	ローム粒子微量、粘性強			

遺物出土状況 土師器片18点 (埴1、高坏12、甕5) が出土している。埴は、ほぼ完形の状態でも覆土下層部から横位で出土している。

所見 時期は、出土土器から、中期前葉 (5世紀前葉) と考えられる。また、覆土が埋め戻されていることや、98の埴の出土状況などから墓坑と推定される。



第67図 第1号土坑・出土遺物実測図

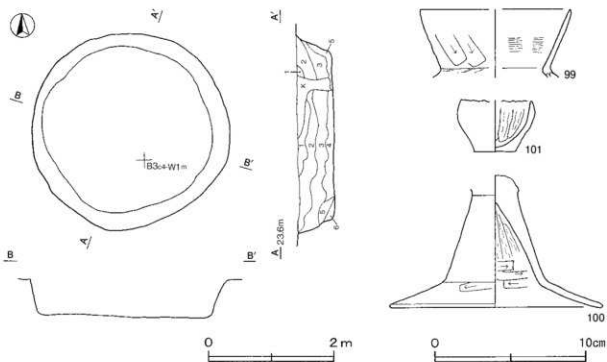
第1号土坑出土遺物観察表 (第67図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法的特徴	出土位置	備考	
98	土師器	埴	13.4	15.2	4.4	右蒸・長石・赤色粒子・砂粒	明褐色	普通	口縁部外面ヘラケズリ後ヨコナデ が本後ヨコナデ体部ヘラケズリ 一部ハケ目	内面ヘラミ	覆土下層	80%

第30号土坑 (第68図)

位置 調査区北部のB 3b3区で、標高23.4mの台地の平坦部に位置している。

規模と形状 長径3.20m、短径3.10mの円形で、長径方向はN-18°-Eである。深さは60cmで、壁はやや外傾



第68図 第30号土坑・出土遺物実測図

して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

覆土 6層からなり、黒褐色土や暗褐色土がブロック状に堆積し、埋め戻された状況を示している。

土層解説

- | | |
|----------------------------|-----------------------|
| 1 暗褐色土 ロームブロック微量 | 4 黒褐色土 ロームブロック・炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色土 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色土 ローム粒子微量 |
| 3 黒褐色土 ロームブロック・炭化粒子微量、締まり強 | 6 褐色土 ロームブロック微量 |

遺物出土状況 土師器片131点（埴17、高坏34、壺類3、甕76、ミニチュア鉢1）が出土している。

所見 時期は、出土土器から中期前半（5世紀前半）と考えられる。また、覆土が埋め戻されていることや、覆土下層が黒褐色土であること及び出土遺物から、墓坑の可能性が考えられる。

第30号土坑出土遺物観察表（第68図）

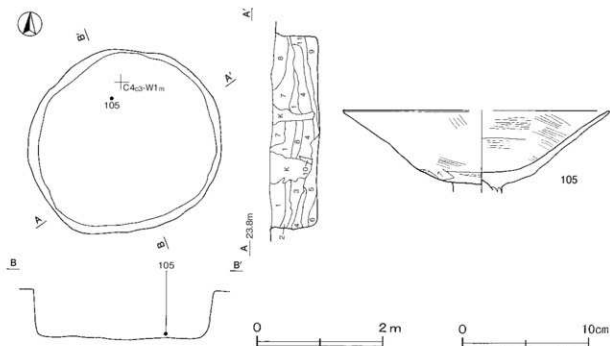
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
99	土師器	埴	[119]	(55)	-	長石・雲母・砂粒	鈍い黄橙	普通	口縁部外面へラケズリ後ヨコナデ 内面ハケ目後ヨコナデ	覆土中	5%
100	土師器	高坏	-	(106)	166	赤色粒子・砂粒	橙	普通	頸部外面器面変れのため調整不明 内面指頭によるナデ スノ部外面へクミガキ後ヨコナデ	覆土中	30%
101	土師器	ミニチュア鉢	[56]	4.1	3.4	石英・長石・雲母・砂粒	鈍い黄橙	普通	体部外面指ナデ 内面指頭によるナデ	覆土中	95%

第43号土坑（第69図）

位置 調査区中央部のC4c2区で、標高235mの台地の平坦部に位置している。

規模と形状 長径3.10m、短径2.90mの円形で、長径方向はN-32°-Eである。深さは80cmで、壁はやや外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

覆土 11層からなり、黒褐色土や暗褐色土がブロック状に堆積し、埋め戻された状況を示している。



第69図 第43号土坑・出土遺物実測図

土層解説

1	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量、締まり強	7	暗褐色	ローム粒子微量
2	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量、締まり強	8	暗褐色	ロームブロック少量、締まり強
3	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	9	灰褐色	ロームブロック少量、粘性強
4	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	10	褐色	ロームブロック少量、締まり弱
5	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量、粘性弱	11	黒褐色	ロームブロック微量、粘性弱、締まり強
6	暗褐色	ローム粒子少量			

遺物出土状況 土師器片10点（高坏）が出土している。105はほぼ床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期前葉（5世紀前葉）と考えられる。また、覆土が埋め戻されていることや、105の高坏坏部が床面に伏せられた状態で出土していることなどから、墓坑の可能性が考えられる。

第43号土坑出土遺物観察表（第69図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
105	土師器	高坏	[212]	(6.5)	-	右裏・長石・紫色粒子・砂粒	橙	普通	坏部内外面ハケ目後コナテ ハケテスリ	床面	30%

第49号土坑（第70図）

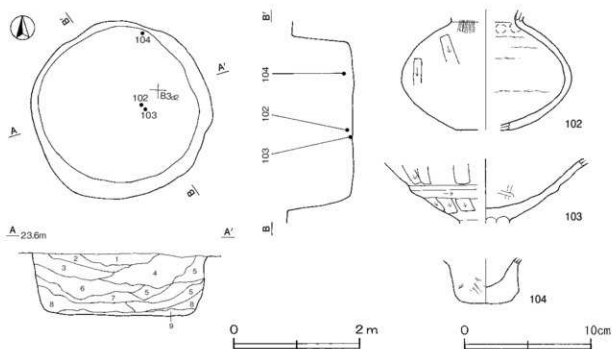
位置 調査区北部のB 3 d 1区で、標高23.4 mの台地の平坦部に位置している。

規模と形状 径2.80 mの円形で、長軸方向はN-72°-Eである。深さは100 cmで、壁は外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

覆土 9層からなり、全体としてロームブロックや炭化粒子を含む黒褐色土や暗褐色土で埋め戻された状況を示していることから人為堆積と考えられる。

土層解説

1	灰褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	6	褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量
2	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	7	暗褐色	ロームブロック少量
3	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	8	暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
4	暗褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	9	極暗褐色	ローム粒子・炭化粒子微量
5	黒褐色	ローム粒子微量			



第70図 第49号土坑・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片306点(坏5, 埴26, 高坏72, 甕202, ミニチュア鉢1)が出土している。102.103はともに床面から出土している。

所見 時期は, 出土土器から中期前半(5世紀前半)と考えられる。また, 覆土が埋め戻されていることや, 床面の遺物出土状況などから, 墓坑の可能性が考えられる。

第49号土坑出土遺物観察表 (第70図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴		出土位置	備考	
									体部外面ハケ目・ヘラケズリ	胴部内面指摺圧痕			
102	土師器	埴	-	(9.4)	[4.7]	石英・長石・砂粒	橙	普通	体部外面ハケ目・ヘラケズリ	胴部内面指摺圧痕	覆土下層	35%	
103	土師器	高坏	-	(5.1)	-	長石・砂粒	明赤褐	普通	坏部外面ヘラケズリ	内面ヘラミガキ	坏部下層付込に後を持つ	床面	20%
104	土師器	ミニチュア鉢	-	(3.7)	3.2	石英・雲母・砂粒	鈍い黄橙	普通	体部外面丁寧なナテ	内面磨減のため調整不明	覆土下層	80%	

表5 古墳時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考(時期)
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					
1	D 3 a6	N-20°-W	不整形円形	1.95 × 1.10	28	外傾	平坦	人為	土師器(埴, 高坏, 甕)	中期前葉(5世紀前半)
30	B 3 b3	N-18°-E	円形	3.20 × 3.10	60	外傾	平坦	人為	土師器(埴, 高坏, 甕, ミニチュア鉢)	中期前半(5世紀前半)
43	C 4 c2	N-32°-E	円形	3.10 × 2.90	80	外傾	平坦	人為	土師器(高坏)	中期前葉(5世紀前半)
49	B 3 d1	N-72°-E	円形	2.80 × 2.75	100	外傾	平坦	人為	土師器(坏, 埴, 高坏, 甕, ミニチュア鉢)	中期前半(5世紀前半)

4 その他の遺構と遺物

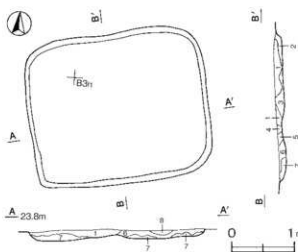
(1) 方形堅穴遺構

第1号方形堅穴遺構 (第71図)

位置 調査区北部のB 3区で, 標高23.6mの台地の平坦部に位置している。

規模と形状 長軸2.80m, 短軸2.40mの長方形を呈し, 長軸方向はN-10°-Wである。深さは15cmで, 壁は外傾して立ち上がり, 底面はほぼ平坦である。

床 ほぼ平坦であるが, 全体として軟弱である。



第71図 第1号方形堅穴遺構実測図

覆土 8層からなり, 黒褐色土や暗褐色土がブロック状に堆積し, 埋め戻された状況を示している。

土層解説

- 1 黒褐色土 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色土 ロームブロック少量・炭化粒子微量
- 3 暗褐色土 ロームブロック少量・炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色土 ローム粒子・焼土ブロック微量
- 5 黒褐色土 ローム粒子少量・焼土粒子微量
- 6 鈍い黄褐色土 ロームブロック微量
- 7 暗赤褐色土 焼土ブロック少量・炭化粒子微量
- 8 暗褐色土 ロームブロック微量

遺物出土状況 土師器片42点(甕)が覆土上層から下層にかけて散在した状態で出土している。

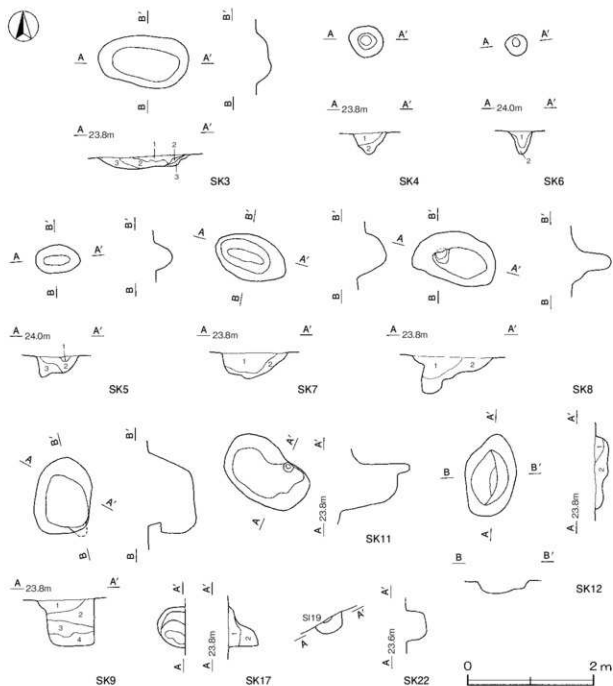
所見 時期・性格ともに不明である。

表6 方形竪穴遺構一覧表

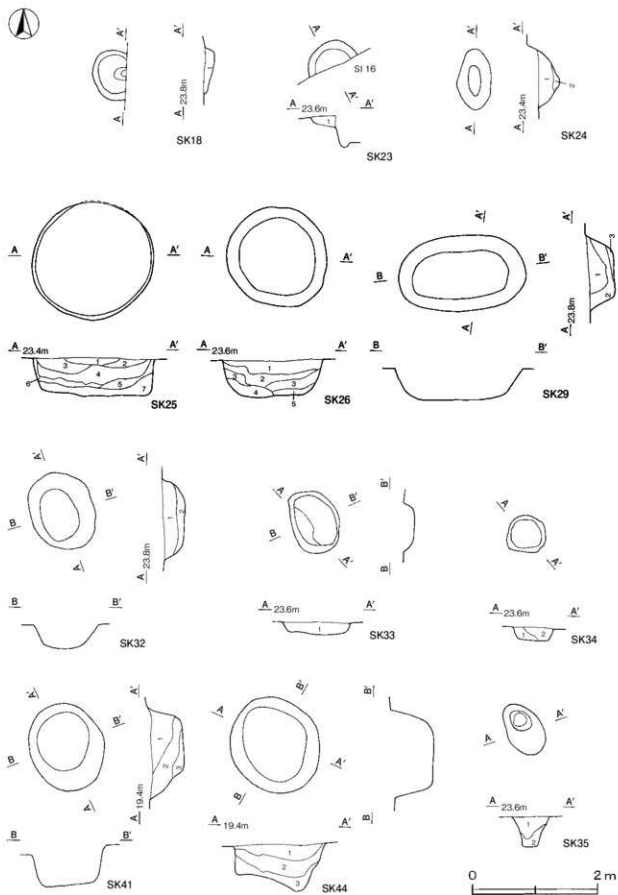
番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 (時期)
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深3(cm)					
1	B3f1	N-10°-W	長方形	2.80×2.40	15	外傾	平坦	人為	土師器(高坏, 甕)	

(2) 土坑 (第72~74図)

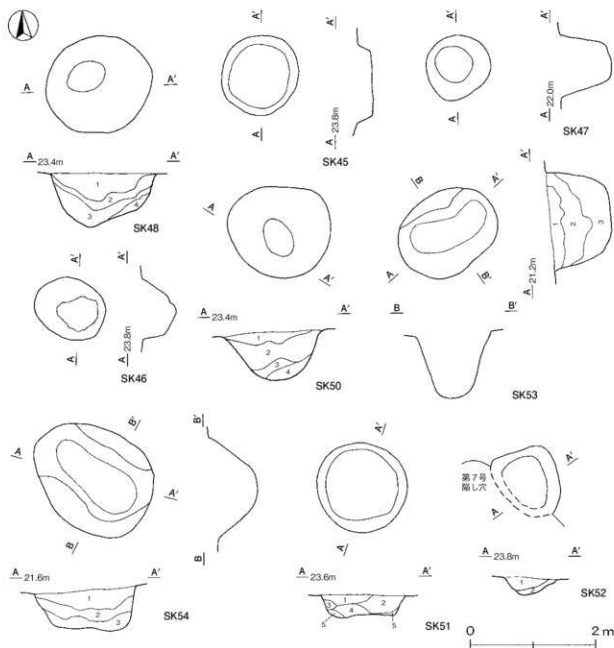
今回の調査で、時期が明確でない土坑32基が確認された。以下、確認された遺構の実測図と土層解説を記載する。



第72図 その他の土坑実測図(1)



第73図 その他の土坑実測図2)



第74図 その他の土坑実測図(3)

第3号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量, 粘性強
- 2 褐色 ロームブロック微量, 粘性強
- 3 褐色 ロームブロック中量, 締まり弱

第4号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量

第5号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック微量

第6号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

第7号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化物微量

第8号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

第9号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ロームブロック微量

第12号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物微量

第17号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量

第18号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

第23号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

第24号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 黄い黄褐色 ロームブロック少量

第25号土坑土層解説

- 1 黄い褐色 炭化粒子少量、ロームブロック微量
- 2 褐色 ロームブロック・炭化材微量
- 3 明褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 5 暗褐色 ロームブロック・炭化材微量
- 6 明褐色 ロームブロック・炭化粒子少量
- 7 褐色 炭化粒子中量、ロームブロック少量

第26号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 5 麻褐色 ロームブロック微量

第29号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子中量

第32号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ロームブロック微量

第33号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量

第34号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量

第35号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土ブロック微量
- 2 灰褐色 ロームブロック微量

第41号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量、粘まり強
- 2 麻褐色 ロームブロック・炭化粒子微量、粘性弱
- 3 暗褐色 ロームブロック微量

第44号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 麻褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

第48号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム中ブロック微量
- 2 褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ローム大ブロック微量
- 4 褐色 ロームブロック少量

第50号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 焼土ブロック微量
- 4 褐色 ロームブロック少量

第51号土坑土層解説

- 1 褐色 ロームブロック・炭化物微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム粒子微量
- 4 暗褐色 ローム中ブロック微量
- 5 褐色 ローム粒子多量

第52号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量

第53号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量

第54号土坑土層解説

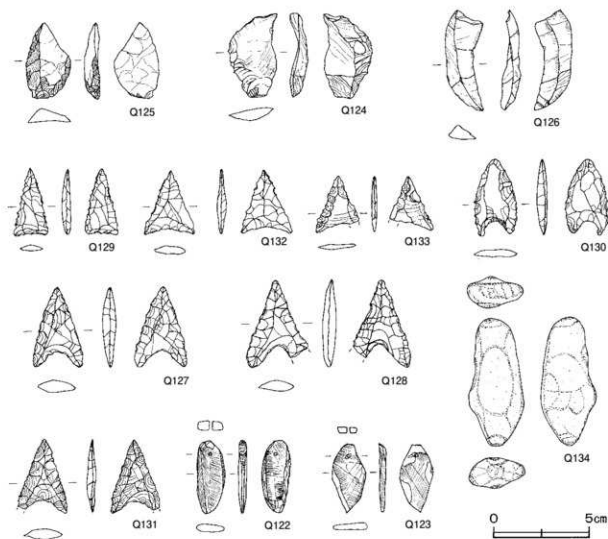
- 1 暗褐色 ロームブロック微量
- 2 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

表7 その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土 遺物	備考・重複関係
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深 3 (cm)					
3	A 2d4	N-82°-W	長楕円形	1.45×0.80	24	縦斜	皿状	自然		
4	A 2d4	N-66°-W	円形	0.55×0.50	36	外傾	平坦	自然	土師器片	
5	A 3f9	N-80°-E	楕円形	0.75×0.45	28	外傾	平坦	自然		
6	A 2j1	N-0°	円形	0.35×0.30	40	縦斜	皿状	自然		
7	B 2b1	N-65°-W	楕円形	1.20×0.70	40	縦斜	皿状	自然		
8	B 2b2	N-72°-W	楕円形	1.30×0.82	60	縦斜	皿状	自然		
9	A 2h3	N-7°-E	楕円形	1.22×0.88	75	縦斜	平坦	自然	土師器片	
11	A 2j3	N-57°-W	長楕円形	1.44×0.92	86	外傾	平坦	不明		
12	A 2i4	N-14°-E	長楕円形	1.32×0.82	20	縦斜	皿状	自然		
17	B 2a4	N-65°-W	[楕円形]	0.65×[0.45]	40	外傾	平坦	自然		
18	A 2h5	N-25°-W	[楕円形]	0.85×[0.55]	20	外傾	平坦	自然	土師器片	
22	B 2e0	N-30°-E	[円形]	0.50×[0.20]	32	外傾	平坦	不明		本跡→SI19
23	B 3g3	N-65°-E	[円形]	0.80×[0.40]	18	外傾	平坦	自然		本跡→SI16
24	B 4f3	N-0°	長楕円形	0.96×0.54	35	外傾	皿状	自然		SI15→本跡
25	B 3h2	N-0°	円形	1.94×1.88	57	外傾	平坦	自然	土師器片	
26	B 3a5	N-0°	円形	1.60×1.55	72	外傾	平坦	自然	土師器片	
29	C 3e5	N-83°-E	長楕円形	2.05×1.20	50	外傾	平坦	自然		
32	A 2i4	N-27°-W	楕円形	1.28×1.02	40	外傾	皿状	自然		
33	B 2g3	N-45°-W	楕円形	1.02×0.78	18	外傾	平坦	自然		
34	B 2g2	N-0°	円形	0.65×0.60	23	外傾	平坦	自然		
35	B 2f4	N-35°-W	楕円形	0.90×0.60	48	外傾	皿状	自然		
41	E 1g0	N-23°-W	楕円形	1.40×1.20	55	外傾	平坦	自然		
44	E 2h1	N-35°-W	楕円形	1.57×1.40	66	外傾	平坦	自然		
45	B 3h6	N-0°	円形	1.28×1.22	25	外傾	平坦	不明	土師器片	
46	D 3h2	N-65°-W	楕円形	1.13×0.94	55	外傾	皿状	不明		
47	E 2d5	N-18°-E	円形	1.12×1.02	80	外傾	平坦	不明		
48	C 4f8	N-62°-E	円形	1.70×1.56	80	外傾	平坦	自然	土師器片	
50	B 4a6	N-40°-W	円形	0.80×0.80	78	外傾	平坦	自然		第5号陥し穴→本跡
51	A 3j5	N-0°	円形	1.44×1.42	34	縦斜	平坦	人為		
52	C 4c2	(N-57°-W)	(楕円形)	1.34×(0.70)	30	縦斜	皿状	自然		第7号陥し穴→本跡
53	E 2c3	N-50°-E	楕円形	1.65×1.25	103	外傾	皿状	自然		
54	E 2a3	N-60°-W	楕円形	2.05×1.60	70	縦斜	平坦	自然		

(3) 遺構外出土遺物 (第75図)

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物のうち、特徴的なものを抽出して記載する。なお、解説は遺物観察表で示した。



第75図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表 (第75図)

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q122	剥形品	3.9	1.6	0.41	4.36	滑石	表裏両面とも丁寧な研削 切先より筋が通る 基部に穿孔 孔径0.18	A 1区表土	PL20
Q123	剥形品	6.7	2.8	1.0	3.28	滑石	表裏両面とも丁寧な研削 切先より筋が通る 基部に穿孔 孔径0.13	B 2区表土	PL20
番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q124	剥片	4.4	2.6	1.0	5.8	硬質頁岩	縦長剥片 背面に前段階の剥離痕を有する	S19覆土中	PL19
Q125	ナミア 形石鏃	4.0	2.4	0.9	6.2	硬質頁岩	縦長剥片を素材とし 細かい調整を加えた2層線加工 小型化した形	S11覆土中	PL19
Q126	剥片	5.3	2.0	1.1	5.8	珪質頁岩	縦長剥片 背面に前段階の剥離痕を有する	S6覆土中	PL19
Q127	石鏃	2.8	1.7	0.5	1.7	硬質頁岩	凹基無基鏃 両面剥離調整により三稜を有する	B 3区表土	PL19
Q128	石鏃	3.0	2.0	0.4	1.5	チャート	凹基無基鏃 両面剥離調整により三稜を有する	B 3区表土	PL19
Q129	石鏃	3.5	1.8	0.4	2.0	安山岩	凹基無基鏃 両面剥離調整により三稜を有する	B 3区表土	PL19
Q130	石鏃	2.6	1.5	0.4	1.2	頁岩	凹基無基鏃 両面剥離調整により三稜を有する	D 3区表土	PL19
Q131	石鏃	1.7 (0.4)	2.6	(1.1)		凝灰岩	凹基無基鏃 両面剥離調整により三稜を有する	S120覆土中	PL19
Q132	石鏃	2.2	1.8	0.3	0.7	安山岩	凹基無基鏃 両面剥離調整により三稜を有する	S8覆土中	PL19
Q133	石鏃	2.0 (1.6)	0.2	(0.5)		チャート	凹基無基鏃 両面剥離調整 裏面に剥離痕を残す	S19覆土中	PL19
Q134	砥石	6.8	2.9	1.6	34.0	安山岩	凹基砥石 上下口を右打ち 両端部に砥溝を有し 研削痕と見られる縦方向の擦痕を残す 中央部の砥溝に用いられた	第3号穴 覆土中	PL20

第4節 ま と め

旧石器時代から古墳時代にかけての複合遺跡で、旧石器時代では石器集中地点1か所、縄文時代では竪穴3基、陥し穴7基、古墳時代では竪穴住居跡22軒、土坑4基、その他の遺構として、方形竪穴遺構1基、土坑32基が確認された。

旧石器時代では、遺跡の南側に広がる台地の端部において石器集中地点が確認された。出土した石器群には、時期を決定できる道具の組み合わせがないため、年代を特定することはできない。しかし、石器集中地点のほぼ中央部から、剥片剥離を行ったと見られる台石が出土している。このことから、この地に一定期間生活し、石器の加工を行っていたことがうかがわれる。

縄文時代では、竪穴から出土した条痕文土器の様相から、早期後葉において人々の生活が営まれていたことが明らかになった。また、陥し穴は確認面が楕円形で、断面形状はV字状とU字状のものに分けられる。

古墳時代では、中期に集落が営まれ、それ以降は営まれていないことがわかった。また、確認された住居跡のほぼ半数が焼失住居であった。さらに、石製模造品工房として使用されていた住居跡も確認された。

ここでは、古墳時代中期における当遺跡の集落の様相と石製模造品製作に焦点を当て、若干の考察を加えてまとめたい。

1 古墳時代中期における集落の様相について

当遺跡の集落は、出土土器及び住居跡の形態から、中期前半、櫻村編年¹⁾のⅠ・Ⅱ期に相当すると考えられる。わずか半世紀前後という短期間のうちに、集落が形成され廃絶されたということから、当遺跡が拠点集落ではなく、開拓等のための単発的な集落であったと考えられる。

また、確認された竪穴住居跡22軒のうち10軒が焼失住居であったことも特筆すべきことである。そこで、それぞれの焼失住居の火災要因について、石野博信氏²⁾による火災住居のタイプ別分類に基づいて検討を加えてみたい。A型は土器が多い住居、B型は土器が少ない住居を示している。また、ここでいう「外区」とは住居内の主柱穴より外側に当たる部分を指す。

(1) 全炭全焼住居（住居内の全体に炭化材と焼土が遺存する）

A…第13・18・19号住居跡

これらの住居跡は放火・失火・飛火による火事によって焼失したと考えられる。

(2) 外炭全焼住居（外区に炭化材があり、全体に焼土が遺存する）

A…第16号住居跡

(3) 外炭外焼住居（外区に炭化材と焼土が遺存する）

A…第8・9・20・22号住居跡

これらの住居跡は住居中央部を火元とする放火・失火などの火事と見られる。

B…第7号住居跡

この住居跡は住居中心部を火元とする意図的放火と見られる。

上記のことから、焼失住居のほとんどが放火または失火による火事の可能性がある。しかし、第7号住居跡からは日常雑器としての土器がほとんど出土しておらず、住居廃絶に伴う意図的焼失と考えられる。

今後の課題として、古墳時代に見られる住居廃絶に伴う意図的焼失の可能性について、本遺跡内の焼失住居をさらに検証していきたいと考える。

2 石製模造品製作について

古墳時代の住居跡22軒中8軒から、滑石を材料とした石製模造品が出土している。第6号住居跡では、原石をはじめ、さまざまな工作痕を残す剥片が出土している。さらに、製作用工具としての敲石、各種砥石（内磨砥石、平砥石、筋砥石）、金属製工具等が隣接する住居跡などからも出土している。また、第6号住居跡からは工作用ビットとみられる施設も確認されている。これらについて具体的に検証を試み、当遺跡内における石製模造品製作工房の存在と、集落全体としての関わりについて追究してみたいと考える。

(1) 出土した完成品

石製模造品は、すべて滑石を材料とし、種類は白玉（35点）、剣形品（7点）、勾玉（5点）、有孔円板（2点）、紡錘車（2点）、甍玉（1点）である。白玉は出土総数の半数にあたる18点が第4号住居跡P6脇の床面から出土している。また、Q107（第56図）の剣形品は上部に2か所穿孔が施され、うち1か所は未貫通である。Q43（第27図）も、上部中央への穿孔失敗により、上部右側が欠損した後、左側に穿孔を施したものである。

(2) 石製模造品製作に関わる出土遺物

製作に関わる工具類や滑石片等について、第5号・第6号住居跡及び周辺遺構を中心にまとめてみたい。

① 第5号住居跡

砂岩の敲石は、下端部に撃打痕、上端部に磨石としての痕跡を残し、滑石等の敲打分割に用いられたと推測される。千葉県成田市の外小代遺跡034B号址出土の「台石ま叩き石」と特徴が類似している。

13の高坏は、坏部外面を砥石として再利用した痕跡が見られる。砥面は、断面形がゆるやかなU字型を呈しており、勾玉の背などを研磨するために用いられた筋砥石（溝砥石）と推測される。

Q47の紡錘車は、石製模造品製作過程の穿孔段階で使用される、舞盤のコマ（はずみ車）として利用された可能性が考えられる。

② 第6号住居跡

住居北寄りの床面（滑石出土範囲1）、北壁際の覆土下層（滑石出土範囲2）及びその周辺から多量の滑石片（144点）が出土している。工程別に見ると、原石・荒削品・形削品・砕片であり、未製品（研磨品・穿孔品）は確認されていない。

③ 周辺の遺構

第10号住居跡では、断面形がU字型の筋砥石が出土している。第17号住居跡では、荒削及び形削工程の擦切施溝分割法（刀子状の金属器や石剛などで溝をつけ、この溝に型状工具を当てて分割する方法）や切載に使用されたと見られる刀子状の金属製工具が出土している。第19号住居跡からは、断面形がV字状の砥石が出土し、滑石の分割・切載に用いる金属製工具を研磨したものと考えられる。さらに、体部にU字型の擦痕を持つ砥石転用の埴も出土している。第20号住居跡からも、同様のU字型擦痕を有する筋砥石が出土している。第6号住居跡から南へ40mほど下った第3号炉穴の覆土上面から、内磨砥石（勾玉等の抉り部の研磨用と推測される）が出土している。しかし、第3号炉穴は縄文早期の遺構と考えられるため、この内磨砥石が炉穴に伴うとは考えにくく、周囲からの流れ込みと考えられる。

(3) 石製模造品の製作工程と第6号住居跡出土の滑石片（第76図）

寺村光晴氏³⁾によれば、石製模造品の基本的な製作工程は、『原石採取→荒削→形削→調整→研磨→穿孔→仕上げ→完成』の順であると述べられている。これに基づき、第6号住居跡の滑石片を検討したい。

① 剣形品

『荒削品は、原石から剣形品に必要な分だけを打ち割ったもので……先端部が細くなっている』⁶¹ という特徴がある。本遺跡では6点出土しており、鋭利な金属器等による擦切施溝分割の痕や切痕がうかがわれる（第33図Q53・Q57、第34図Q63・Q64・Q84・Q85）。形削品は、「荒削品をより剣形品に近く形を整えたもので、さらに板状に近く」⁶²加工されたものである。本遺跡では3点出土しており、長さが4cmほどで形状が整えられている（第34図Q65～Q67）。

② 勾玉

荒削品が8点出土している。Q56は、擦切施溝分割法により形を整えている。Q62は細かい調整剥離を行っている。Q68～Q71、Q89・Q90は、小形の勾玉を意図したと考えられる（第33・34図）。形削品は、「荒削品に腹部の「えぐり」と思われる「く」の字状の切り込みを入れたもの」⁶³を指し、本遺跡では研磨品・穿孔品も含めて確認されていない。

③ 白玉

荒削品が5点、形削品が4点出土している。形削品は板状を呈しており、「面取り」の前段階と考えられる（第34図）。

④ 有孔円板・紡錘車

荒削品が2点出土しており、原石の形状を利用してさらに円形に剥離調整したものと（Q54）と、薄い板状に調整剥離したものと（Q61）がある。Q61は、径が0.5cmほどの穿孔痕を残す（第33図）。

⑤ 管玉・霰玉

荒削品4点Q72（+Q73+Q74）・Q86～Q88、形削品が2点出土している。形削品のQ73・Q74は、Q72から分割された後さらにQ73とQ74に分割されたと考えられる。また切断面を観察すると、表面が平滑されわずかに緩やかな弧を描いていることから、擦切施溝分割法ではなく、刀子状の金属製工具により切裁されたと推測される。Q73とQ74は、細長い四角柱状で断面形がほぼ正方形を呈し、次の調整（側面打裂）工程の前段階と推測される。荒削品、形削品以外は確認されていない。

(4) 石製模造品の工作用ビットについて

第6号住居跡において、石製模造品製作のための工作用ビットとみられる施設が確認された。それについて検討を試みたい。

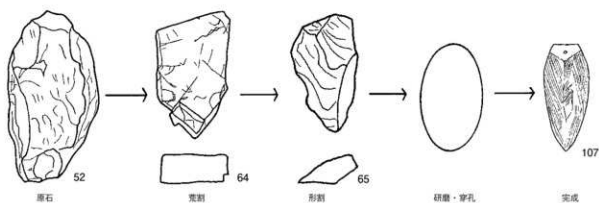
住居中央部のビット（P7）は、床面を60cmほど凹状に掘り窪め、さらに底部の一部を径が10cmほどの円筒形状に深さ20cmほど掘り窪めている。これは、烏山遺跡のA地区第57号住（A-57号住）及び、千葉県八千代市の北海道遺跡D012号遺構にみられる工作用ビットと形態が類似している（第77図）。

また、滑石片の多くはビット（P7）脇から北壁付近にかけて集中して確認されている。これは、烏山遺跡の中で述べられている「玉類未製品、剥片、屑片は壁近くの周辺部に多く出土し、壁穴の中央部には少ない」⁷¹という所見と共通した特徴がある。

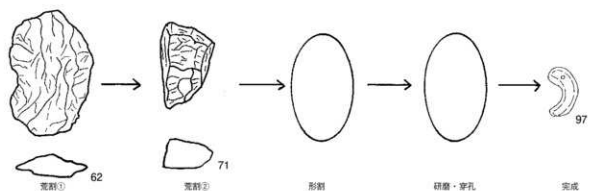
(5) 石製模造品製作工房の存在と集落全体の関わり

(1)で述べた欠損品について、石製模造品の流通の中で生産地と消費地を考えると、欠損品は生産地内に留まると考えられる。つまり、Q43及びQ107は本遺跡内で製作されたと推測される。このことは、石製模造品製作工房の存在を裏付けるものと考えられる。

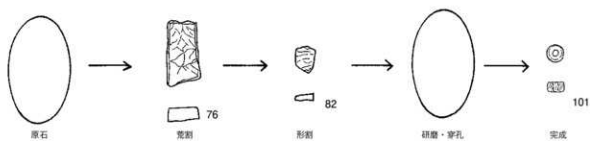
刻形品の製作工程



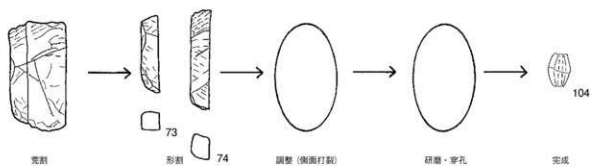
勾玉の製作工程



臼玉の製作工程



管玉・薬玉等の製作工程



第76図 石製模造品の製品別製作工程

第6号住居跡出土の滑石片には、擦切施溝分割が施されたものや金属製工具により切裁されたものが多い。その加工の様子もうかがわれる。また、隣接する住居跡から「U字型擦痕の砥石」や「刀子状の金属製工具」等が出土していることから、第5号・第6号住居跡を中心とする工房が存在する可能性が高い。

(4)の検討から、第6号住居跡は、石製模造品の工作用ピットを持つ工房の可能性が高いと考えられる。また、出土土器から第5号住居跡及び工房に比定される第6号住居跡は、ほぼ同時期に存在したものと考えられる。そして、それらは相互に関連性を持って石製模造品の製作に関わっていた可能性も考えられる。第10・17・19・20号住居跡についても、工房の可能性も考えられるが、明らかにそれと比定する根拠に乏しい。

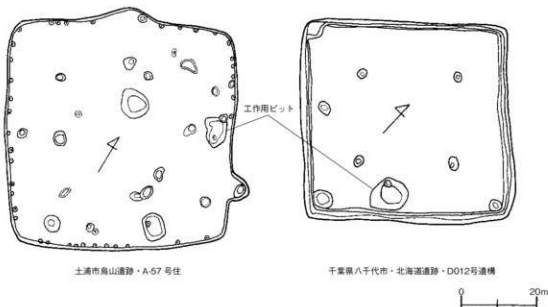
以上の検討結果から、本遺跡は、第5号・第6号住居跡を石製模造品の製作工房とし、全体として相互に関連性を持つ「集団内専業的生産」形態の集落であると考えられる。

(6) 今後の課題

石製模造品の製作を考える上で、滑石の原石産出地がどこであるかを特定することは必須である。そして、原石産出地と石製模造品製作地（当遺跡）、さらに製品の流通先との間の交流に際して、各々の地域の支配者間での政治的交渉があったものと思われる。こうした地域間の交流について、今後詳しく調べていきたい。また、石製模造品製作のための工作用ピットがどのように使用されていたかについても、文献を紐解き、検討を重ねていきたい。

3 小結

以上、元宮本前山遺跡の様相について若干の考察を試みた。その成果として、第1に古墳時代中期前半に限定して集落が営まれていたこと。第2に焼失住居が半数を占め、そのほとんどが放火または失火による火



第77図 烏山遺跡・北海道遺跡

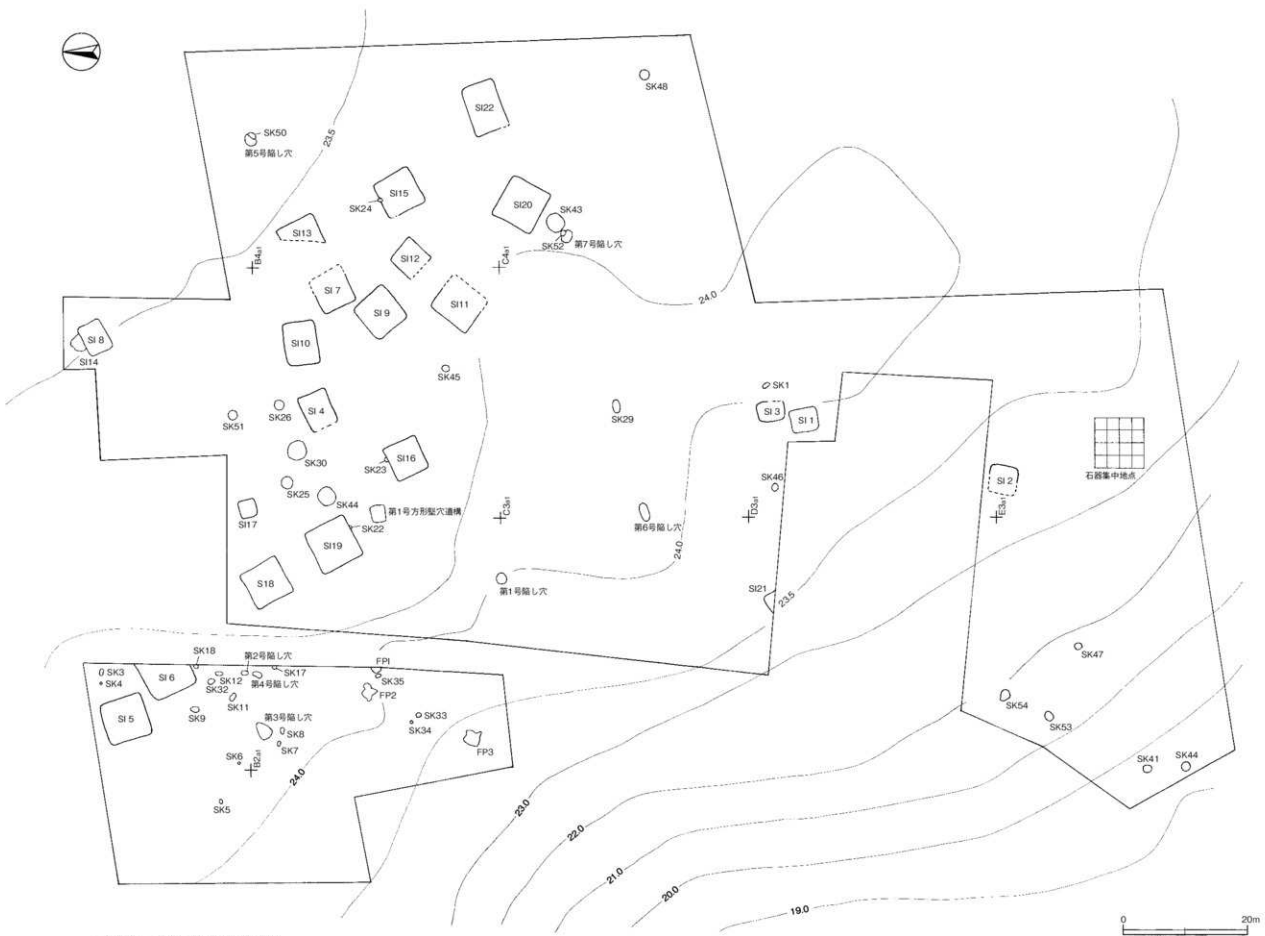
災で焼失したこと。第3に石製模造品製作工房が存在し、それを中心に集落全体が石製模造品製作に関わりを持って営まれていることが明らかになった。まだまだ多くの検討課題を残しているが、つくば市周辺における石製模造品製作（玉作り）のひとつの資料となり得ることを期待したい。

註

- 1) 古墳時代の年代観については、櫻村宣行氏の編年に基づいた。
 - ・櫻村宣行「茨城県における5世紀の動向」『東国土器研究』5号 1999年5月
 - ・櫻村宣行「和泉式土器編年考-茨城県を中心として」『研究ノート』第5号 茨城県教育財団 1996年
- 2) 石野博信「日本原始・古代の住居の研究」1991年
- 3) 寺村光晴「玉作とその流通」『ものづくりの考古学-原始・古代の人々の知恵と工夫』大田区立郷土博物館 2001年2月
- 4) ~6) 和田雄次他「本田道跡 善長寺道跡 小田林道跡- 一般国道4号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書2」『茨城県教育財団文化財調査報告』第51集 1989年3月
- 7) 大川清・寺村光晴「茨城県土浦市・烏山道跡」土浦市教育委員会 1988年3月

参考文献

- ・小高五十二「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅰ） ヤツノ上道跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第81集 1993年3月
- ・荒井保雄「牛久北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅱ） 中久喜道跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第86集 1993年9月
- ・皆川修「鳥名ツタ道跡-上河原崎・中西特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第203集 2003年3月
- ・石川義信・後藤孝行「ナギ山道跡1・柏峯B道跡-一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第233集 2005年3月
- ・駒沢悦郎「薬師入道跡 阿見吉原土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第239集 1993年9月
- ・山武考古学研究所「茨城県東村 幸田道跡・幸田台道跡-東台団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-」幸田台道跡発掘調査会 東村教育委員会 1995年3月
- ・加藤正信・小林清隆・山口典子 千葉県文化財センター「研究紀要」第13号 財団法人千葉県文化財センター 1992年3月
- ・篠原祐一「白玉研究私論」『研究紀要』第3号 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1995年3月
- ・岩上照朗・篠原祐一・斎藤弘「塚崎道跡-一般国道4号（新4号国道）改築に伴う埋蔵文化財発掘調査」『栃木県埋蔵文化財調査報告第150集』財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター



第78図 元宮本前山遺跡全体図

写 真 图 版





遺跡遠景（南方から）



遺跡全景

PL 2



旧石器出土状況



第 2 号 炉 穴
完 掘 状 況



第 3 号 炉 穴
完 掘 状 況

第1号住居跡
完掘状況



第2号住居跡
完掘状況



第4号住居跡
完掘状況



PL 4



第3号住居跡完掘・遺物出土状況，出土遺物



第5号住居跡完掘・遺物出土状況。出土遺物

PL 6

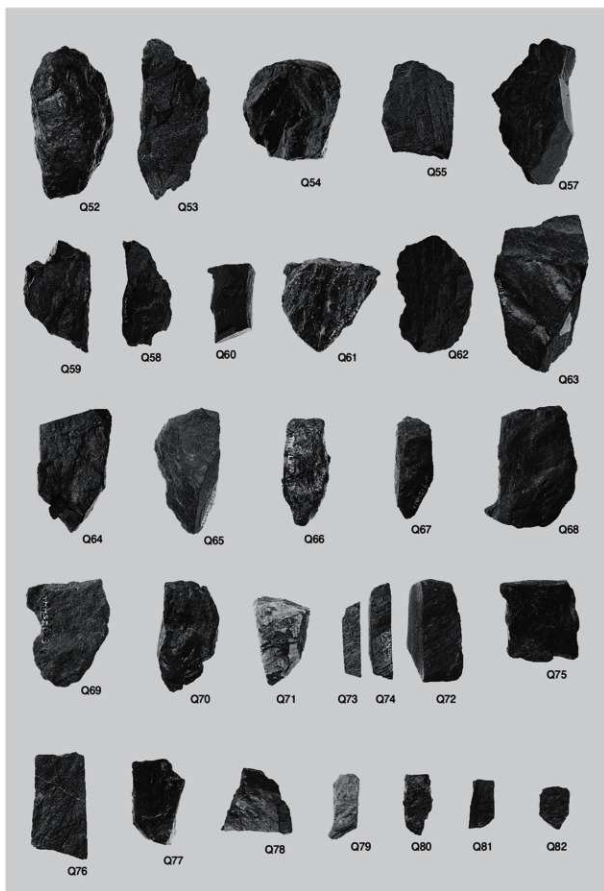


20



18

第6号住居跡・ビット7完掘・遺物出土状況，出土遺物

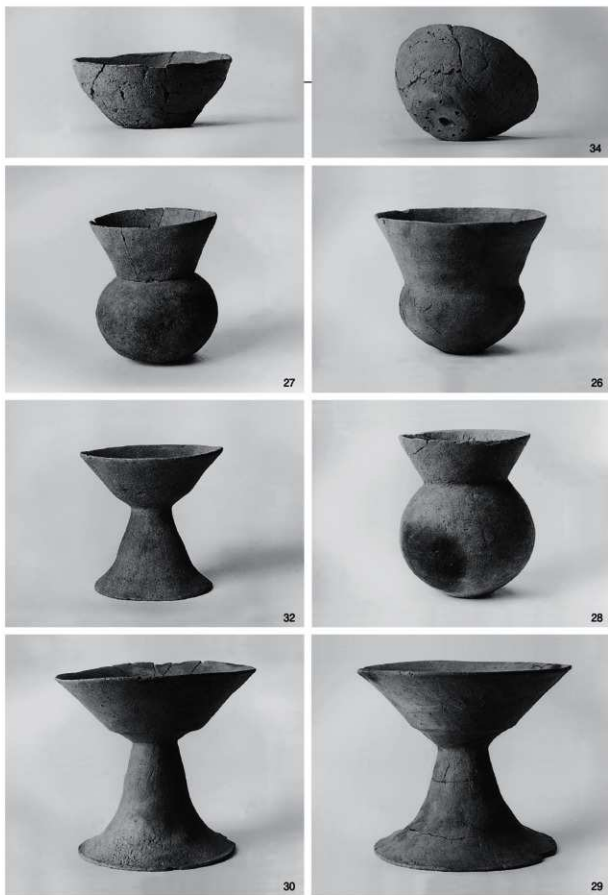


第6号住居跡出土遺物

PL 8



第8号住居跡遺物出土状況



第8号住居跡出土遺物

PL10



第13号住居跡遺物出土状況，出土遺物

第16号住居跡
完掘状況



第17号住居跡
遺物出土状況



SI 16-58



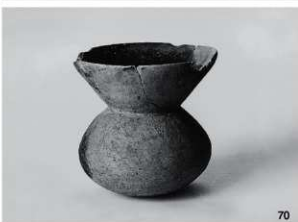
SI 17-61

第16・17号住居跡完掘・遺物出土状況、出土遺物

PL12



第18号住居跡完掘・遺物出土状況、出土遺物



第19号住居跡完掘・遺物出土状況、出土遺物

PL14



第20号住居跡完掘・遺物出土状況、出土遺物



第20号住居跡出土遺物

PL16

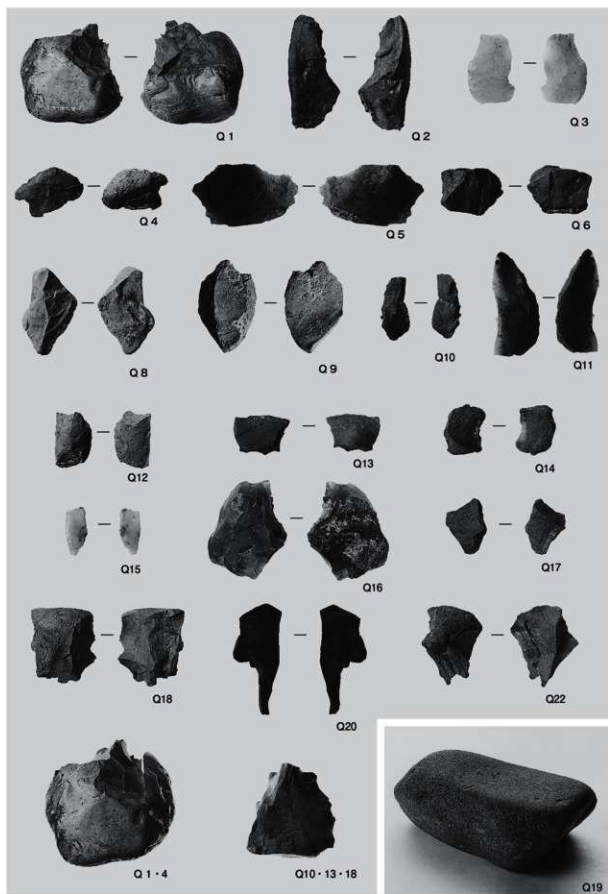


第22号住居跡完掘・遺物出土状況

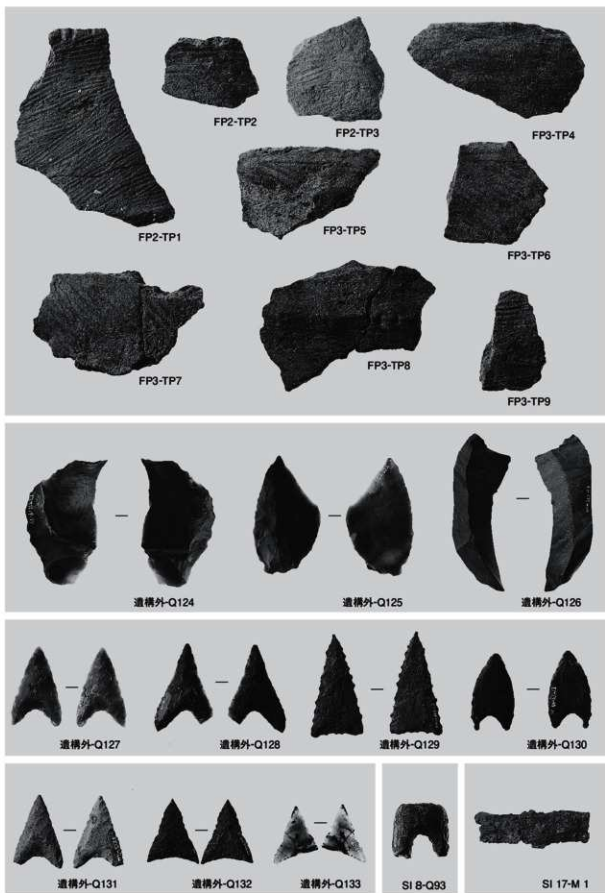


第22号住居跡出土遺物，第4・5・10・19・20号住居跡出土石器

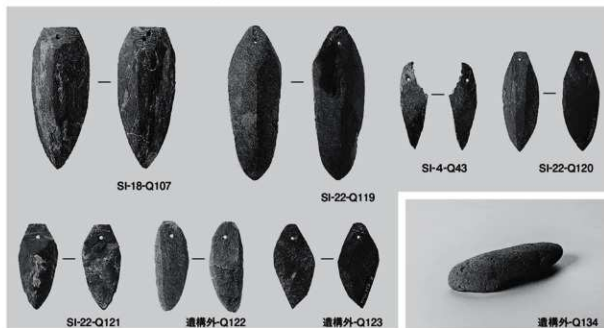
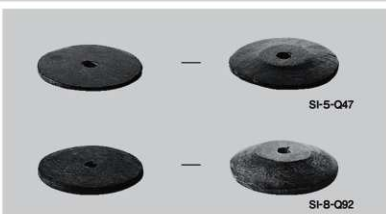
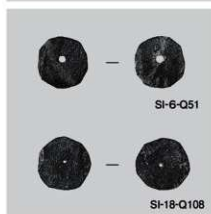
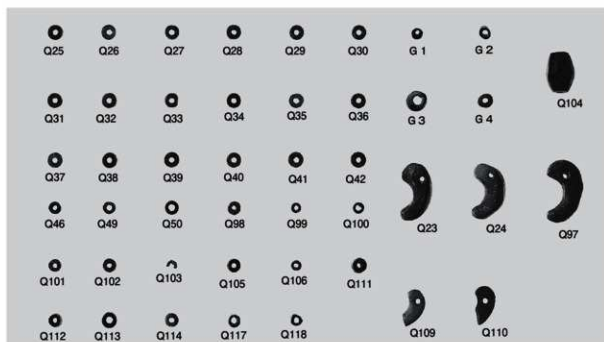
PL18



石器集中地点出土石器



第8・17号住居跡出土石製品・鉄製品，第2・3号炉穴出土土器，遺構外出土石器



茨城県教育財団文化財調査報告第265集

元宮本前山遺跡

上河原崎・中西特定土地地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書2

平成18(2006)年3月20日 印刷

平成18(2006)年3月24日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
T E L 029-225-6587

印刷 株式会社 あけほの印刷社

〒310-0804 水戸市白梅1丁目2番11号
T E L 029-227-5505